

上の山遺跡 I

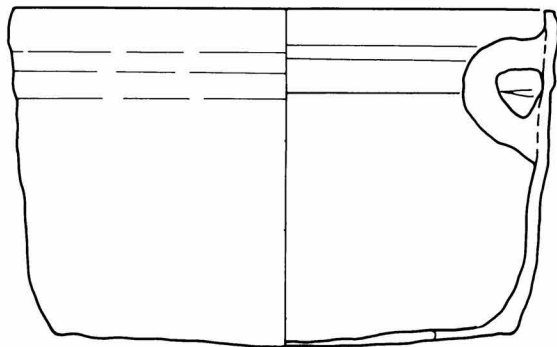
長野県辰野高等学校校舎改築に伴う
第1次埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

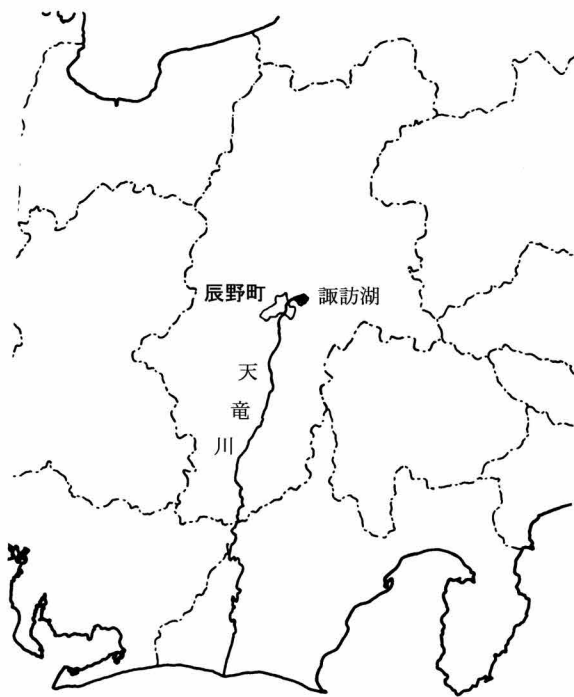
長野県辰野町教育委員会

上の山遺跡 I

長野県辰野高等学校校舎改築に伴う
第1次埋蔵文化財発掘調査報告書



長野県辰野町教育委員会



序

上の山遺跡は、辰野町宮木辰野高校一帯に位置し、古くから縄文時代の埋蔵文化財包蔵地として知られ、過去に多くの遺物が採集されてきました。また「天白の城」と呼ばれ戦国時代末期矢島氏の館跡と伝えられてきたところで、この遺跡に隣接する滝洞遺跡では辰野高校テニスコート造成に伴って昭和60年に発掘調査が行われ、中世の遺構と遺物が出土しております。

今回、この上の山遺跡地内において辰野高校校舎改築事業が計画され、事前に発掘調査の必要が生じたため、同校の委託を受け町教育委員会が主体となり調査を実施しました。

その結果、縄文時代の住居跡をはじめ多数の遺物と、中世末期の堀跡が出土し、一帯が縄文時代の集落跡であるとともに、伝えられてきた館跡の存在を裏づけることになるなど、大きな成果をあげることができました。

ここに調査報告書を刊行する運びとなり、ご指導を賜った長野県教育委員会文化課をはじめ、辰野高等学校、それに直接調査に従事された調査団の皆様に深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用されることを願う次第です。

昭和62年3月

辰野町教育委員会

教育長 小林 晃 一

例 言

1. 本書は、長野県辰野高等学校による校舎改築事業に伴う、長野県上伊那郡辰野町大字伊那富3644の2番地に所在する^{うえ}上の山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、辰野高等学校長山崎袈裟強と辰野町教育委員会教育長小林晃一との委託契約に基づいて行われた。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は昭和61年6月25日から7月30日及び9月29日から10月29日まで現場作業を実施し出土遺物の整理及び報告書の作成は昭和61年11月7日から昭和62年3月20日まで行った。
4. 発掘調査現場における記録は、混合教室棟及び浄化槽建設予定地区は主として赤羽義洋が、部室棟建設予定地区については友野良一が担当し、遺構等の実測図作成は林康彦、赤羽やよいが主として行った。遺物の実測図作成は、土器実測図を赤羽義洋が、同拓影図を福島永、小池幸夫、赤羽義洋が、そして石器実測図を小池、赤羽義洋が担当した。土器復原は主として福沢幸一氏にお願いし、一部赤羽が行ったものもある。報告書の執筆は友野良一、赤羽義洋で行い、分担については各文末に記した。なお、本書の編集は赤羽義洋が担当した。
5. 調査及び整理にあたっては、実測図、写真等多数を作成したが、それらの資料は出土遺物とともに辰野町教育委員会に保管しているので、広く活用されたい。

発掘調査関係者名簿

1. 上の山遺跡発掘調査団

調査団長 友野良一（考古学研究者、宮田村）

調査員 赤羽義洋（辰野町郷土美術館学芸員）

発掘調査参加者 赤羽信雄・有賀潔・垣内諭・蒲金吾・小島芳雄・小松祐二・城倉けさみ・百瀬茂久・矢島郁夫・山崎馨・山崎良之助・赤羽やよい（以上辰野町）・赤坂文隆（岡谷市）・竹入俊男（学校教育課）・日下部英司（辰野高校）・辰野高校文学部、同歴史部生徒

遺物整理参加者 小沢節子・垣内諭・小林すみ子・小松嘉祐・清水幸・菅野志保・高橋春美・中原圭子・三浦豊・赤羽やよい・小池幸夫・林操・福島永・村上茂子・福沢幸一

2. 辰野町教育委員会事務局

教育長 小林晃一

社会教育課長 吉江悟郎

庶務係長 宮原 一

社会教育係長 赤羽八州男

社会教育係 林康彦・遠藤陽子

目 次

序	
例 言	
第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 保護協議の経過	1
第2節 発掘調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第1節 位置と付近の地形・地質	5
第2節 歴史的な環境	7
第Ⅲ章 発掘調査	11
第1節 調査の方法と調査結果の概要	11
第2節 遺跡の層序	12
第Ⅳ章 遺構と遺物	22
第1節 縄文時代の遺構と遺物	22
1. 第1号住居址	22
2. 第2号住居址	25
3. 第3号住居址	29
4. 土 坑	31
5. 第1号ローム・マウンド	35
6. 遺構外出土の遺物	36
第2節 歴史時代の遺構と遺物	46
1. 第1号空堀	46
第3節 その他の遺構と遺物	52
第4節 部室棟建設予定地の遺構と遺物	53
第Ⅴ章 発掘調査の成果とまとめ	57
第1節 歴史時代の遺構と遺物について	57
1. 中世の遺物と年代	57
2. 中世の遺構について	58
3. 上の山遺跡と宮所郷	60
註・参照文献	62
写真図版	

挿図目次

第1図	遺跡位置図	4
第2図	辰野町段丘面区分図	6
第3図	周辺遺跡分布図	9
第4図	周辺地名分布図	10
第5図	調査区基本層序概念図	12
第6図	発掘調査区位置図	13-14
第7図	調査区土層断面図(1)	15-16
第8図	調査区土層断面図(2)	17-18
第9図	調査区遺構全体図	19-20
第10図	第1号住居址実測図	22
第11図	第1号住居址出土土器実測図	23
第12図	第1号住居址出土石器実測図	23
第13図	第1号住居址出土土器拓影図	24
第14図	第2号住居址実測図	25
第15図	第2号住居址出土土器実測図	26
第16図	第2号住居址出土石器実測図(1)	26
第17図	第2号住居址出土土器拓影図	27
第18図	第2号住居址出土石器実測図(2)	28
第19図	第3号住居址実測図	29
第20図	浄化槽区内出土土器拓影図	30
第21図	土坑実測図(1)	31
第22図	土坑及びピット実測図	32
第23図	土坑実測図(2)	33
第24図	土坑出土土器実測図	34
第25図	第1号ローム・マウンド実測図	35
第26図	第1号ローム・マウンド出土土器拓影図	36
第27図	遺構外出土縄文土器拓影図(1)	36
第28図	遺構外出土縄文土器拓影図(2)	37
第29図	遺構外出土縄文土器拓影図(3)	39
第30図	遺構外出土縄文土器拓影図(4)	40
第31図	遺構外出土縄文土器拓影図(5)	41
第32図	遺構外出土縄文土器拓影図(6)	42
第33図	遺構外出土石器実測図(1)	43
第34図	遺構外出土石器実測図(2)	44
第35図	第1号空堀実測図	47-49
第36図	第1号空堀及びその他出土遺物実測図	50
第37図	第1号及び第2号竪穴実測図	51
第38図	第1号集石址実測図	52
第39図	第1号配石址実測図	52
第40図	部室棟建設予定調査区全体図	54

第41図	部室棟建設予定調査区土層断面図	55-56
第42図	「天白古城」の城域概念図	59
第43図	周辺城館跡分布図	61

写真図版目次

- 図版 1-1 遺跡遠景（荒神山から）
 - 2 遺跡遠景（西から）
- 図版 2-1 遺跡遠景（北東から）
 - 2 遺跡近景（西から）
- 図版 3-1 調査区（教室棟建設予定区西端部）
 - 2 調査区（教室棟建設予定区中央部）
- 図版 4-1 調査区（教室棟建設予定区東端部）
 - 2 調査区（教室棟建設予定区東端部）
- 図版 5-1 第1号住居址
 - 2 第1号住居址炉
- 図版 6-1 第2号住居址
 - 2 第2号住居址炉
- 図版 7-1 調査区（浄化槽建設予定区）
 - 2 第3号住居址
- 図版 8-1 第2号土坑
 - 2 第3号土坑
 - 3 第5号土坑
 - 4 第6号土坑
 - 5 第7号土坑
 - 6 第8号土坑
 - 7 第9号土坑
 - 8 第10号土坑
- 図版 9-1 第1号及び第2号竪穴
 - 2 第1号、第2号竪穴と土坑及びピット
- 図版10-1 第1号空堀
 - 2 第1号空堀内の内耳土器出土状態
- 図版11-1 第1号集石址
 - 2 第1号配石址と第1号空堀
- 図版12-1 調査区（部室棟建設予定区）
 - 2 発掘調査風景（部室棟建設予定区）
- 図版13-1 第1号住居址出土土器（1）
 - 2 第1号住居址出土土器（2）
 - 3 第1号住居址炉内出土貝殻
- 図版14-1 第2号住居址出土土器
 - 2 第2号住居址出土石器
- 図版15-1 浄化槽建設予定区内出土土器
 - 2 土坑内出土土器
- 図版16-1 第1号ローム・マウンド出土土器
 - 2 同内面
- 図版17-1 遺構外出土縄文時代早期の土器
 - 2 同内面
- 図版18-1 遺構外出土縄文時代前期・中期の土器
 - 2 遺構外出土縄文時代中期の土器
- 図版19-1 古銭「紹聖元寶」
 - 2 内耳土器（1）
 - 3 内耳土器（2）
 - 4 内耳土器（3）
- 図版20-1 遺跡西方の「要害」遺構
 - 2 滝洞遺跡との間にある空堀跡
- 図版21-1 滝洞遺跡内の空堀跡
 - 2 遺跡北側の滝洞川
- 図版22-1 発掘調査風景（東から）
 - 2 発掘調査風景（第1号住居址）

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 保護協議の経過

上の山遺跡は古くから土器、石器が出土し、多くの遺物が採集され、縄文時代中期の遺跡として知られてきた。(註1) また「天白の城」と呼ばれる中世城館跡のひとつで、空堀と思われる遺構の一部がのこっていた。

大正初年、この地に伊北農蚕学校が創立され、その後伊北農商学校を経て、戦後は長野県辰野高等学校となり現在に至っているが、昭和54年、校舎改築期成同盟会が発足し、増改築事業が開始された。

ところが、辰野高校敷地は全域が周知の上の山遺跡内に含まれているため、昭和57年12月、県教育委員会文化課小林孚、臼田武正両指導主事、辰野町教育委員会、辰野高等学校、それに考古学研究者友野良一氏がこの遺跡の保護について現地で協議を行った。その結果、工事着工を目前にしていた第二体育館の建設について、予定地は遺跡の立地する台地西縁の窪地で、戦前の西天竜用水路の開削工事による土層のかく乱も予想されたため、立会調査とすることとした。同月、友野良一氏及び町教育委員会赤羽義洋の2名が、深掘りされた10カ所近いピット内の土層等を調査し、断面の磨滅した内耳土器片1点を採集した。その地点は地表110 cm から2 m に達するところに青灰色のテフラ層があり、この上に径2, 3 cm から10 cm ほどの礫、それに黄褐色と青灰色のテラフがブロック状に混合した土層が何層かにわたって堆積していた。また、最上層には、かつて敷地造成時等に行われたと思われる埋土層が認められた。したがってこの地点は、西側の扇状地からの数回にわたる土砂崩壊によって削平と堆積がくり返されたところで、遺物は山麓寄りの滝洞遺跡で内耳土器片等が多く採集されていることから、そこからもたらされたものと判断した。

昭和59年4月、県教育委員会文化課小林孚指導主事来町し、辰野高等学校、それに町教育委員会社会教育課林康彦、町郷土美術館学芸員赤羽義洋が、今後の校舎改築事業の計画に伴う遺跡の保護措地について協議を行った。現地は過去数十年間に何回かにわたって校舎等の増改築工事がくり返されてきたところだが、木造の校舎によるため、地下の遺構等へのかく乱はそれほど及んでいない部分もあると予想されるものの、校舎の増改築は現地外へは考えられないことから、今後の工事に際しては事前に発掘調査を行うこととした。また、今後数年にわたって工事が断続的に行われることから、その都度四者で事前に協議することとなった。

昭和60年4月、辰野高校が新たに買収して造成を計画しているテニスコート予定地の遺跡の保護について、県教育委員会文化課、辰野高校、それに町教育委員会の三者が現地で協議し、造成予定地は上の山遺跡に隣接する滝洞遺跡内に含まれ、内耳土器片等も何点か採集されており、事前に発掘調査を実施することとなった。町教育委員会が調査を受託し、12月2日から21日まで現

地で発掘調査を実施した。

一方、昭和61年度に計画されている混合教室棟、浄化槽及び部室棟の建設に伴う遺跡の保護について、昭和60年11月、県教育委員会文化課太田喜幸・小林秀夫両指導主事、辰野高校、それに町教育委員会教育長小林、社会教育課主事林、郷土美術館学芸員赤羽が現地で協議を行い、建設予定地は発掘調査を実施することとした。なお、混合教室棟予定地の西寄りには、旧テニスコートの造成によって地表下2～3mのテフラ層内まで削平されているため、発掘調査の対象から除外してさしつかえない旨確認した。

昭和61年6月、辰野高等学校長山崎袈裟強の委託を受け、辰野町教育委員会教育長小林晃一が主体となって発掘調査を実施することとなった。考古学研究者友野良一氏を団長とする調査団を組織し、6月25日から7月30日まで混合教室棟及び浄化槽予定地を対象に現地の発掘調査を実施した。また、部室棟予定地については、9月29日から10月29日まで現地の調査を行った。なお、出土遺物等の整理及び報告書の作成は61年11月から62年3月まで行い、61年度に調査を実施したこれら3地点すべてを報告することとした。

(赤羽)



発掘調査参加者

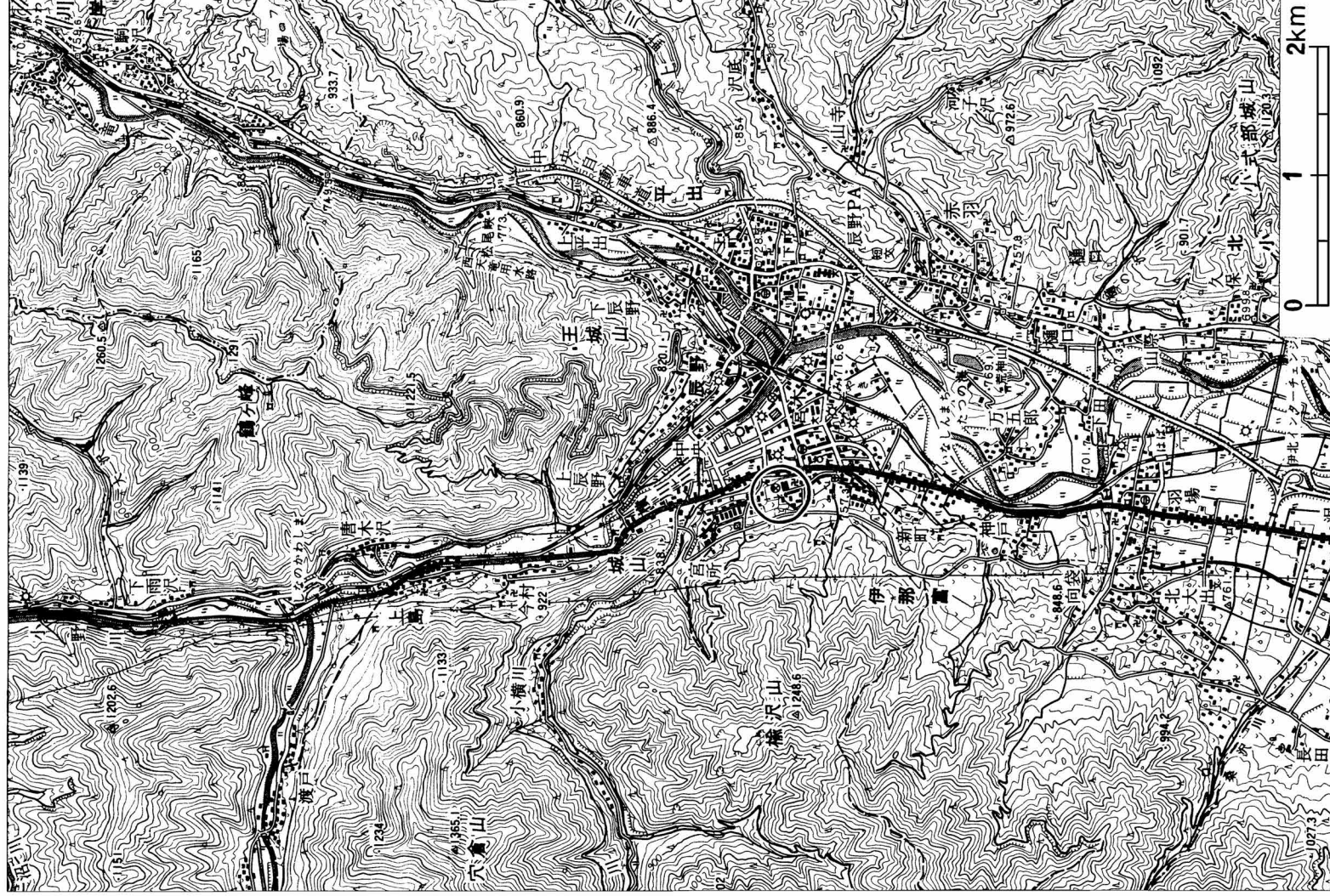
第2節 発掘調査の経過

- 6月25日 発掘調査の準備 器材の搬入とテントの設営。
- 6月26日～27日 混合教室棟及び浄化槽予定地内をバックホーにより表土除去。
- 7月1日～5日 表土を除去した箇所のジョレンがけと排土作業。
調査区内の東寄りほど各土層が厚く、作業は一部難航する。
- 7月7日～9日 ジョレンがけにより遺構確認作業を行う。
混合教室棟予定地内の西側部分は、校舎建設等によりソフトルームまで削られていることがわかる。
- 7月11日～14日 混合教室棟及び浄化槽予定地内の遺構確認作業。
たびたびの豪雨のため、浄化槽予定地内で調査区の壁面が崩落し、3分の1近くまで埋まってしまう。また混合教室棟地内も東側に雨水がたまり、調査は難航する。
- 7月17日 浄化槽予定地内の崩落土の排土作業。
本日までに、混合教室棟予定地内で、東西方向に空堀らしい溝状遺構や土坑、ルーム・マウンド等を確認する。また、浄化槽予定地内では、不明瞭ながら住居址らしいプランを確認。
- 7月18日～21日 遺構内部の掘り下げを始める。辰野高校生が放課後等に調査に参加してくれる。
混合教室棟調査区西端部付近に縄文時代の住居址らしい落ち込みを認め、拡張して2基の住居址を発見。
- 7月23日～26日 各遺構内部の掘り上げと断面図、平面図の作成を行う。
- 7月27日～29日 各遺構細部の掘り上げと各遺構や全体の測量を行う。
- 7月30日 器材、テントを撤収、重機による調査坑の埋戻しと整地作業が行われる。

(赤羽)

- 9月29日～30日 部室棟予定地内をバックホーにより表土除去。
器材を搬入し、テントを設営する。
- 10月6日～9日 表土除去後の調査区内のジョレンがけと排土作業。
- 10月13日～15日 ジョレンがけによる遺構の確認作業。
- 10月20日～23日 調査区内各箇所の精査と断面測量。
- 10月29日 調査区平面図の作成と器材の撤収を行う。

(友野)



第1図 遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

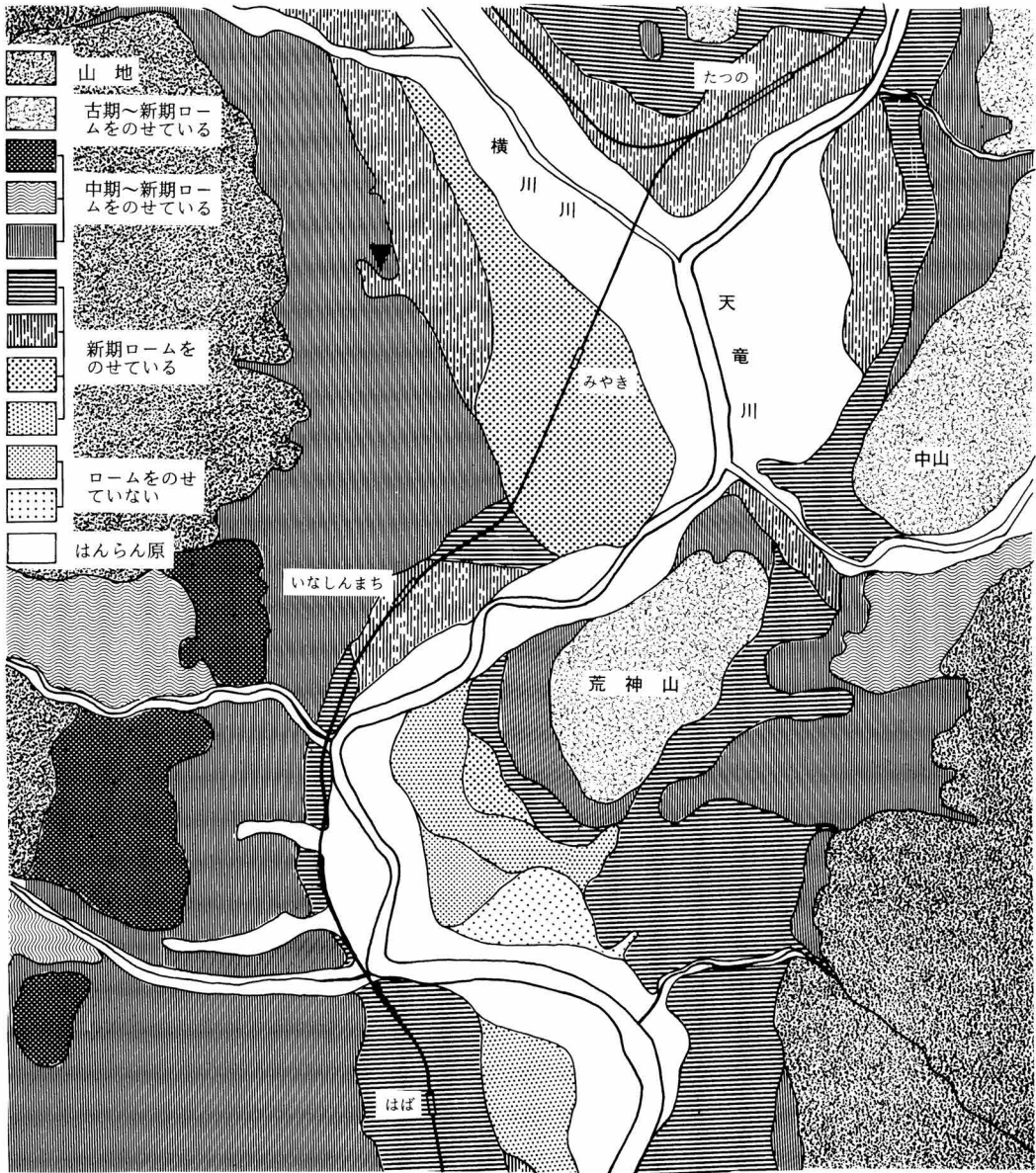
第1節 位置と付近の地形・地質

地理的立地 上の山遺跡は、長野県上伊那郡辰野町宮木の辰野高等学校一帯に所在する。辰野町平坦部は伊那盆地の北端に位置しており、小横川川、小野川が流入する横川川と、諏訪湖から流れる天流川とがその中央部で合流している。遺跡はこの合流点の西約1 kmの段丘上に立地している。標高は750 m前後で、天流川、横川川河床との比高は30～35 mである。遺跡西方は木曾山脈北部に属する経ヶ岳山塊の北端で、楡沢山（標高1248.6 m）があり、その山麓を楡沢川、滝洞川が東へ流れている。上の山遺跡の立地する段丘はこのふたつの川によって、北と南で開析されている。遺跡の西側には西天竜用水路が南北に通っており、そこから西方の山地までは複合扇状地が広がっている。楡沢川、滝洞川ともふだんは殆ど流水の見られない涸川で、扇状地下に潜入した伏流水は段丘下の国道脇に湧水となって出ており、生活に利用されている。したがって、遺跡の立地する段丘上は、学校建設以前は畑地で、山麓まで広がる扇状地一帯は桑園として利用されてきた。

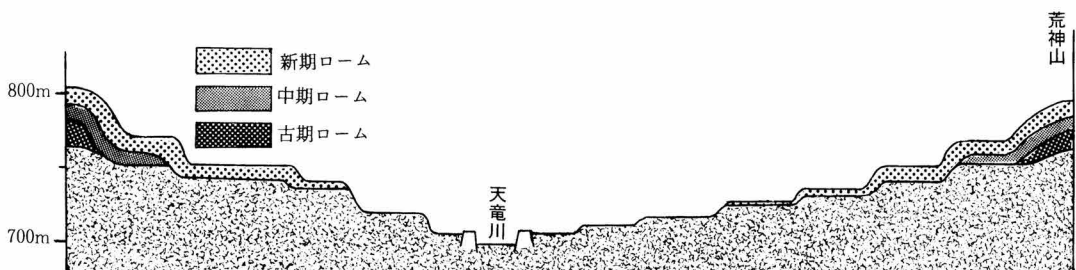
地形・地質 前述したように、辰野町の平坦部一帯は南北70 kmに達する伊那盆地の最北端に位置しており、この平坦部西は木曾山脈の、東は赤石山脈のそれぞれ北端にあたる。北には標高1035 mの大城山がある。これら三方の山地に囲まれた平坦部は、構造運動によって形成されたとされる伊那盆地の低地が埋まったものである。これを埋めている堆積物は、基盤の古生層の上に、天流川本流の古い堆積物、諏訪湖周縁の火山から供給された火山砕屑物、天竜川支流河川から運ばれてきた堆積物、風成テフラ、それに崖錐堆積物や沖積土である。

一方、この地域の段丘は荒神山から南では多いところで6段、北では3～4段が形成されており、天流川が蛇行する内側では段数が多い。これらの段丘の基盤を構成しているのが、天竜川やその支流河川による堆積物で、平出礫層、横川礫層と呼称されている。上の山遺跡の立地する辰野高校の段丘は上位から1段目の段丘で、湯舟面と呼ばれ、その基盤を構成する横川礫層の上を中期ローム上部及び新期ロームが被覆している。この横川礫層は、天竜川東の礫層とは対照的に安山岩を含まない点の特徴で、砂岩、粘板岩、珪岩、チャート等から構成されている。なお、この湯舟面の段丘はPm—Ⅲ降灰以前に離水し、これより上層のテフラをすべてのせているわけだが、テフラと崖錐堆積物が互層をなしていることから、付近一帯の扇状地の形成は断続的に続いていると考えられている。上の山遺跡の北300 mの高畑地籍の湯舟団地下露頭では、Pm—Ⅲ、Pm—Ⅳが確認されている。（註2）

ところで、この遺跡の西方には活断層の存在が知られ、北大出神明神社裏～向袋西方山地～新町貯木場を結ぶ線がケルン・コルに相当すると考えられており（註3）、新町上水道水源地の露頭では、昭和4年に春日琢美によって、ローム層を切る断層が観察されている。（註4）（赤羽）



▼印は上の山遺跡



[東西断面模式図]

第2図 辰野町段丘面区分図

第2節 歴史的な環境

辰野町宮木地区は町内でも遺跡の稠密地帯で、低位から高位にかけての段丘上には大規模な遺跡が櫛比している。町内最大級の前田遺跡をはじめ、重要な遺跡も多い。以下、小横川川南から新町北部付近にかけて遺跡を概観しながら、この地区の歴史的な流れをおってみたい。

縄文時代の遺跡としては第3図の殆どが該当するが、中でも榊林遺跡は昭和61年に発掘調査が行われ、縄文時代早期の押型文土器を出土した住居址や集石炉が発見された。続く縄文時代前期のものとしては、楡沢山麓遺跡として古くから知られていた遺跡があり、前期末葉の土器片が多量に採集されている。同じく榊林遺跡では前期末の小竪穴が出土しているほか、中期初頭の小竪穴群が発見された。他に北湯舟B遺跡でも中期初頭の土器が採集されている。中期中葉の時期は今までのところこの地区では目立った遺構、遺物の出土はないが、榊林遺跡で復原可能な土器2点を採集している。中期後半の遺跡としては前田遺跡がある。古くから辰野西小学校校庭遺跡として知られ、旧六角便所付近を中心に曾利式土器が出土している。また西小学校の南約250mの春日電機(株)工場から中部電力変電所付近一帯でも、曾利式土器多数が採集されている。なお、富士塚遺跡では縄文時代中期ころと思われる狩猟用の落穴遺構数基が発見され、一帯の遺跡立地の考え方にひとつの示唆を与えた。

縄文時代後期の遺跡としては泉水遺跡があり、県宝指定となっている加曾利B式の土偶が出土している。また、近接する榊林遺跡では同じく加曾利B式の土偶片と土器、土坑などが発掘されている。縄文時代晩期の遺跡は町全体でもきわめて少なく、樋口五反田遺跡で配石墓と土器が出土している例がよく知られている(註5)にすぎないが、上原遺跡ではわずかに晩期らしい土器片が発見されている。

弥生時代の遺跡は、宮木地区一帯では今のところ殆ど目立った遺構、遺物は発見されていないが、今後新たに発見される可能性は十分ある。続く古墳時代の遺物も皆無に近い状態だが、かつて古墳らしいものがあつたと伝えられる所が1カ所ある。

奈良、平安時代の遺物が出土している遺跡は多く、殆どの遺跡で平安時代の土師器や須恵器の破片が採集されている。宮木諏訪神社境内地を含む月丘の森遺跡では古くから土師器が採集されており、前田遺跡内にも土師器、須恵器を出土する箇所が点在している。段丘上のこれらの規模の大きい遺跡とは対照的に、山麓には小規模な平安時代の遺跡があり、急傾斜地に立地する富士塚東遺跡からは多くの土師器片が出土している。なお、この時代町内には官牧として平井手、宮処両牧が設置されており、特に宮処牧とこの宮木一帯の遺跡との関連は今後十分検討すべき課題を含んでいる。

さて、城館跡としての上の山遺跡と関係の深い付近の中世以降の遺跡は、小横川川をへだてて北側に竜ヶ崎城址がある。北方の山地から文字どおり竜の首のようにつき出た尾根を利用して山城が築かれており、山頂には土塁がのこっていて、その北と南の尾根上や山腹には数本の堀切が

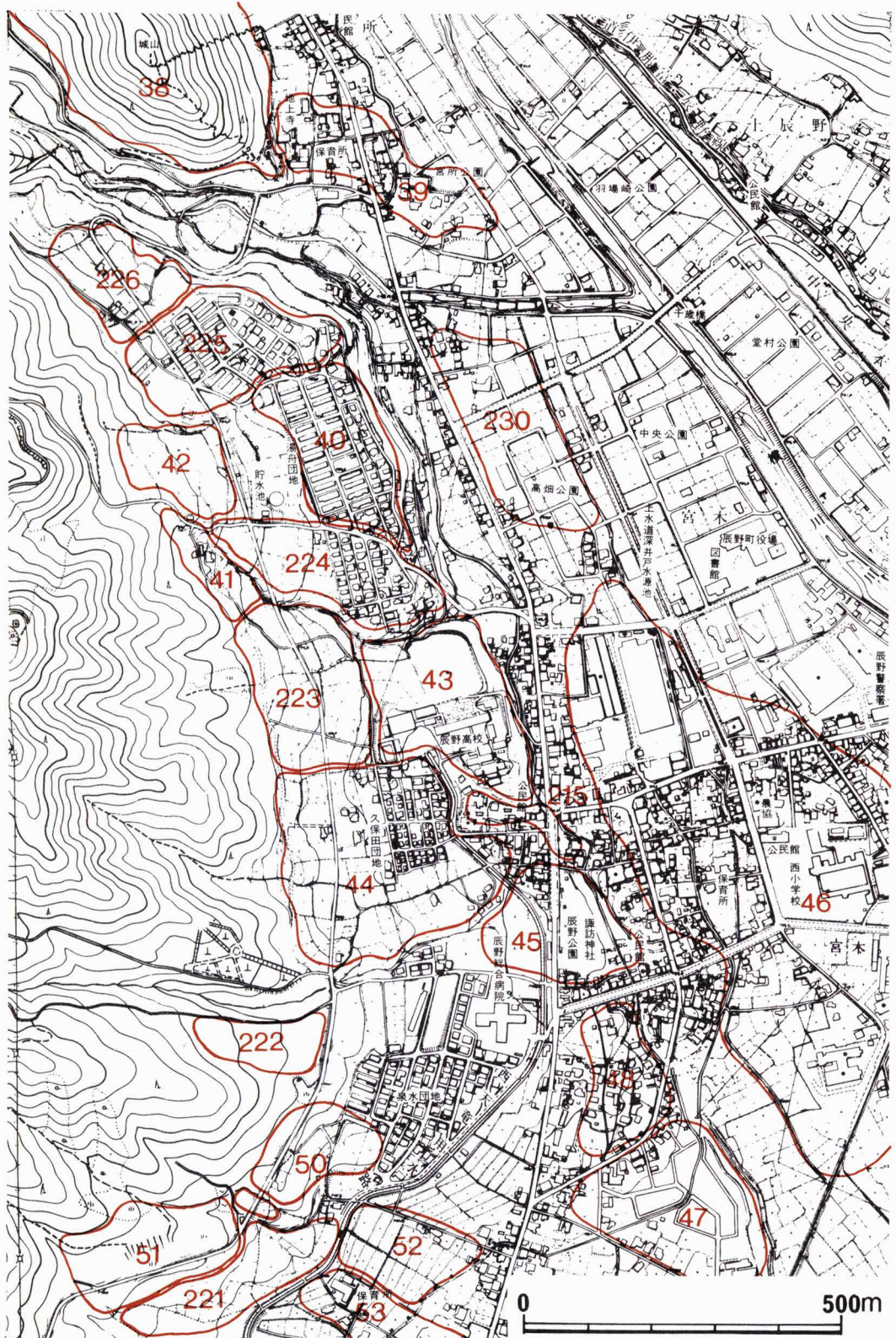
見られる。この竜ヶ崎の地名についてはすでに、『守矢満実書留』寛正5年（1464）に、「宮所龍ヶ崎之城」、『諏訪御符礼之古書』長享元年（1487）に「りうか崎之城」とあり、『小白斎記』は、天文14年（1545）6月の武田信玄による伊那侵攻の際、福与城の藤沢頼親援護のための小笠原長時勢の陣場となったことを伝えている。ところで、『伊那温知集』によれば「弘治天正の頃郷士矢島勘六其子勘兵衛居住の後今以天白之小城と云在」とあり、上の山の地は、戦国時代末期には矢島氏の城館であったが、江戸時代初期にはすでに「天白の小城」と呼ばれていたらしい。矢島勘兵衛はいわゆる寛永年間の上伊那十三騎のひとりで、寛永13年（1636）の高遠城主保科正之の出羽山形転封の際に従って行ったとされている。（註6）

なお、天和3年（1683）には、伊那街道の宮所宿と新町の相宿にかわって宮木村が継立宿となり、以後宮木宿が成立し、今日の宮木の集落を形成するに至った。（註7）

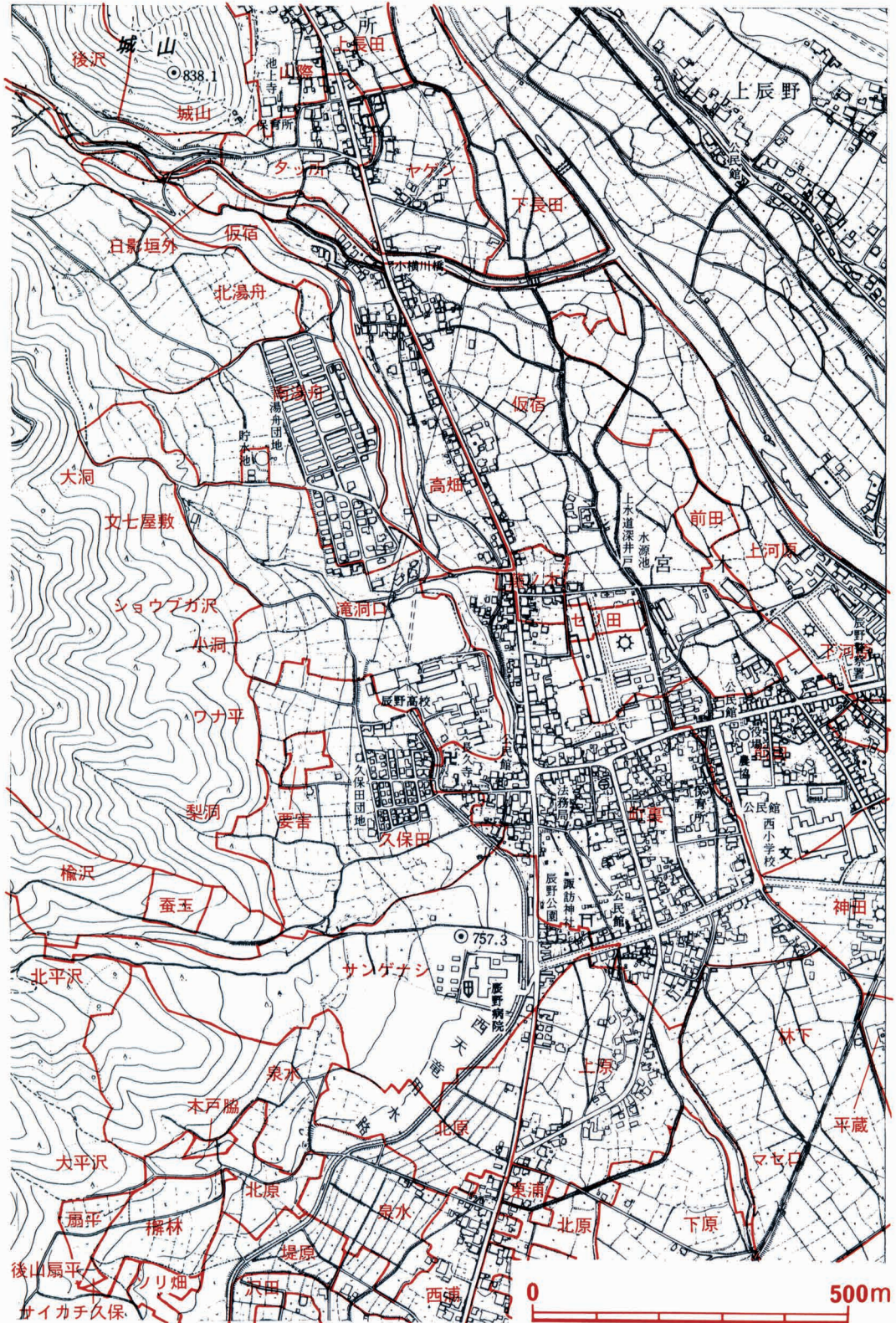
ところで、第4図は明治22年の土地台帳による地名だが、宮木地区の歴史を知る手がかりになりそうな地名も多い。「要害」は城館跡と直接関係がありそうで、元禄3年の検地帳には「やうかい」と記されている。「湯舟」「神田」などは諏訪神社との関連が考えられる地名で、元禄検地帳にも見える。「サンゲナシ」はやはり元禄検地帳に「さけなし」とある。また、「平蔵」は意味ははっきりしないが、平出の辰野東小学校付近には「半平蔵」という地名がある。（赤羽）

No.	遺 跡 名	繩 文 時 代					弥 生 代	古 墳 代	奈 良 代	中 世 以降	備 考
		早期	前期	中期	後期	晩期					
38	竜ヶ崎城址								◎	別称、小城・城山	
39	タ ッ 所			○							
40	湯 舟			○				○			
41	楡 沢 山 麓		○	○				○			
42	湯 舟 西			○							
43	上 の 山			○					○?		
44	久 保 田			○				○			
45	月 丘 の 森						○	○?			
46	前 田			○				○			
47	上 原			○		○?		○	○		
48	天 狗 坂			○							
50	富 士 塚 東			○				○			
51	榎 林	◎	◎	◎	◎					昭61.発掘調査	
52	泉 水				○					県宝指定土偶出土	
53	泉 水 南							○			
215	長 久 寺 下			○							
221	榎 林 第 二	○		○							
222	富 士 塚 北			◎				○	○	昭57.発掘調査	
223	滝 洞			○					◎	昭60.発掘調査	
224	南 湯 舟			○				○	○		
225	北 湯 舟 A			○				○?	○		
226	北 湯 舟 B			○					○		
230	仮 宿							○			
244	木 戸 脇				○						

周辺遺跡一覧表（○は遺物出土、◎は遺構出土を示す）



第3図 周辺遺跡分布図



第4図 周辺地名分布図

第三章 発掘調査

第1節 調査の方法と調査結果の概要

今回の発掘調査の対象となった箇所は、上の山遺跡の所在する段丘の南寄りの、辰野高校旧家庭館及び南校舎、それに旧温室や炊事室、プロパン庫、便所などがあった新教室棟建設予定地、及びそこから北へ約40 mの台地東端部に近い旧部室棟の一部で新浄化槽設置予定地、それに北西へ90 m離れた旧体育館跡地に造成されたテニスコートの一帯で新部室棟建設予定地の3箇所である。この内教室棟予定地内には、台地西寄りに旧校舎立地面を4 m削平して造成した旧テニスコートがあり、新教室棟はこの部分に埋土を行い、東西100 m、幅10 m、建築面積約1100 m²の規模で計画され、新浄化槽は約80 m²、新部室棟は約300 m²の規模が予定されていた。従って発掘調査は、教室棟建設予定地は遺構等の出土の可能性がない旧テニスコート部分を除いたおよそ600 m²を対象とすることとし、新浄化槽及び新部室棟予定地についてはほぼ全域を対象として行うこととした。新部室棟予定地を除き、新教室棟及び新浄化槽予定地の調査区全体に、新教室棟の長軸に合わせて2 m×2 mのメッシュを設定したが、南北の列は数字を、東西の列はアルファベットと五十音の片仮名を用いて表現した。なお南北の軸線の方向はN8°Wである。また標高については、標高値が求められている工事用のベンチマーク(753.187 m)を基準点として使用した。

ところで、上の山遺跡内は大正元年の伊北農蚕学校創立以来、伊北農商の時期や辰野高等学校となってからの増改築工事により何回もの掘削、整地が行われ、段丘東寄りを中心にそれらによる盛土や埋土が予想されたため、表土の除去は重機を用いることとした。しかし、調査対象地内からは中世に属する遺構出土の可能性も当然考えられ、表土除去作業は慎重を期した。以下は手作業により行い、遺構の所在を確認するまではジョレン等を用いて掘り下げ、遺構内の排土は移植ゴテなどを使用した。また、土坑、竪穴などは半カットの状態掘り下げ、住居址や堀は土層観察用のあぜを残すなどし、遺構内の土層の観察と記録につとめた。なお、今後も敷地内において増改築工事が予定されているため、調査区内の堆積土層の状態をできる限り観察し、記録化を図った。

出土遺物の取り上げは、表土下から遺構確認面まではグリッド別、層位別に行い、遺構内の遺物は各遺構ごとに取り上げ、必要に応じて適宜出土位置やレベルを記録し、図化及び写真撮影を行ったものもある。整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には遺物番号を注記した。

現場での撮影には一眼レフカメラ2台を使用し、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムを用い、出土遺物の撮影は一部大型カメラにより、6×9モノクロームネガフィルムを使用した。現場での撮影点数は、モノクロームネガ約440点、カラーポジ145点である。

なお、調査現場の一般への公開については、随時地元新聞社等による取材や一般の見学に応じ

たが、現地説明会を開催するには至らなかった。

今回の調査により出土した遺構、遺物の概要は次のとおりである。

1. 竪穴住居址 3 基（縄文時代前期 1 基、同中期 2 基）
2. 竪穴 2 基（時代不明）
3. 土坑 12 基（縄文時代中期 2 基、時代不明 10 基）
4. 空堀址 1 基（中世）
5. 集石址 1 基（縄文時代？）
6. 配石址 1 基（近世以降）
7. ローム・マウンド 1 基（縄文時代早期？）
8. 焼土 1 カ所（時代不明）
9. その他土坑状の落ち込み及びピット多数（時代不明）

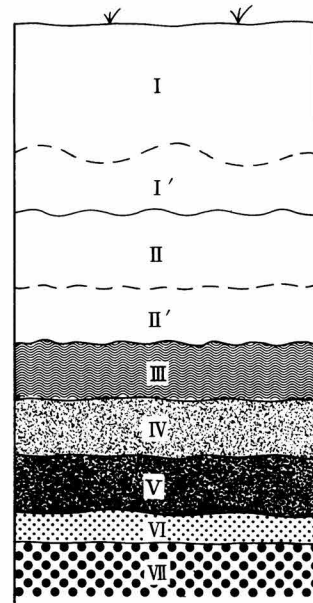
（赤羽）

第 3 節 遺跡の層序

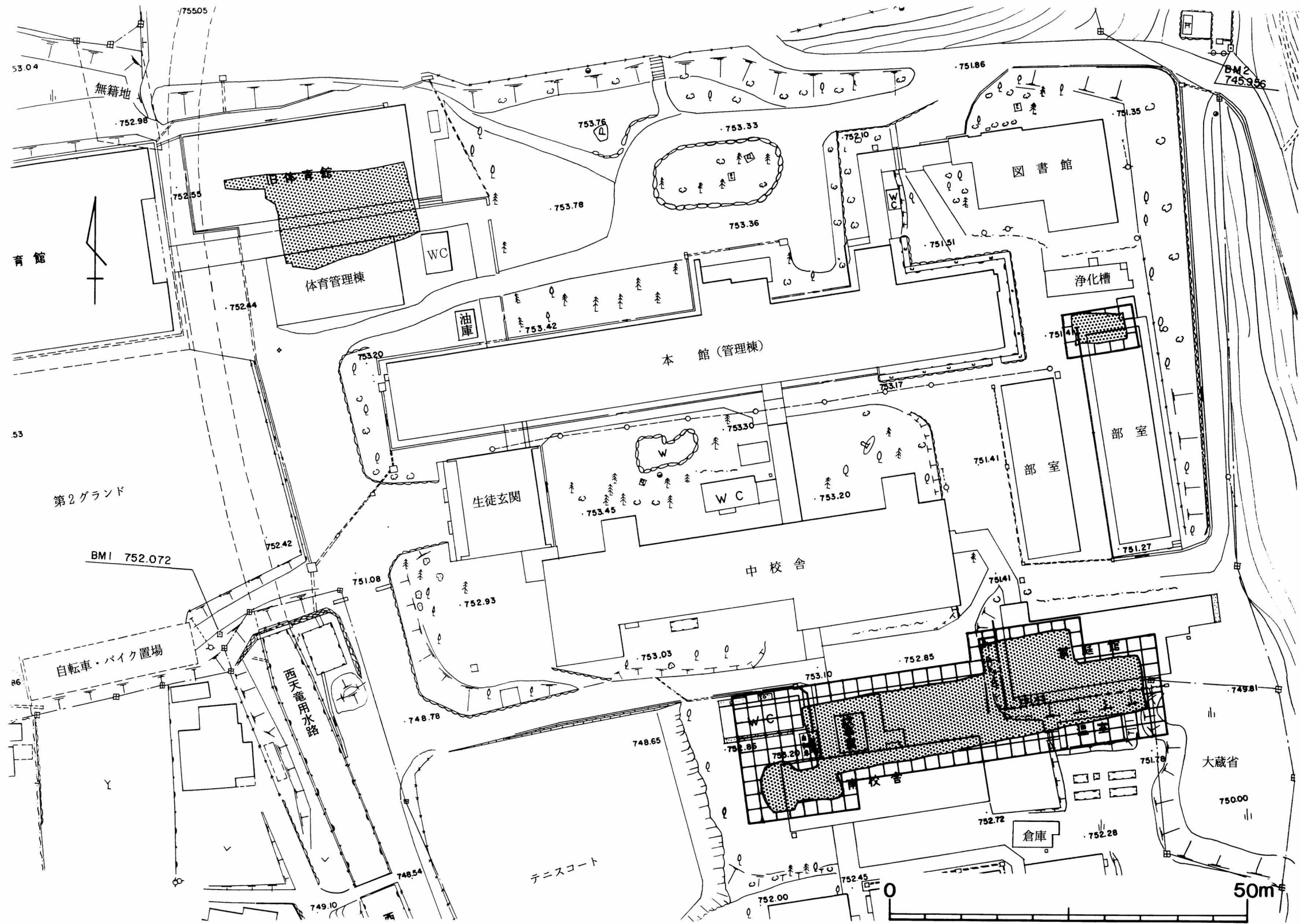
楡沢山麓から広がる扇状地の扇端部にあたる段丘上に立地する上の山遺跡の一带は、長く畑地として利用されてきたが、大正元年この地に伊北農蚕学校が創設され、以来70余年の間に校舎等の増改築がたびたび行われてきた。もともと段丘上面はフラットではなく、全体が東へ緩く傾斜し、東端部近くで急傾斜となる断面構造で、校地内は削平や盛土工事がたびたび行われてきた。従って、発掘調査では校舎建設以前の旧状を示している土層の状態をできる限り把握することにつとめ、発掘調査区各壁面の土層の観察と測量を行い、記録化をはかった。（第 7 図、第 8 図）基本的な土層層序は第 5 図に示したとおりだが、混合教室棟及び浄化槽予定地と部室棟予定地では、両地点の距離があることや、削平、盛土が激しいことから、共通した基本土層としてとらえることができず、やむを得ず部室棟予定地内の土層は別番号とした。従って、基本層序として用いたものは混合教室棟地区内東側のあまり削平の及んでいない良好な土層を基本とした。

各基本土層は次のとおりである。なお、遺構内部の土層については遺構ごとに別番号とし、それぞれ土層の説明をしてある。

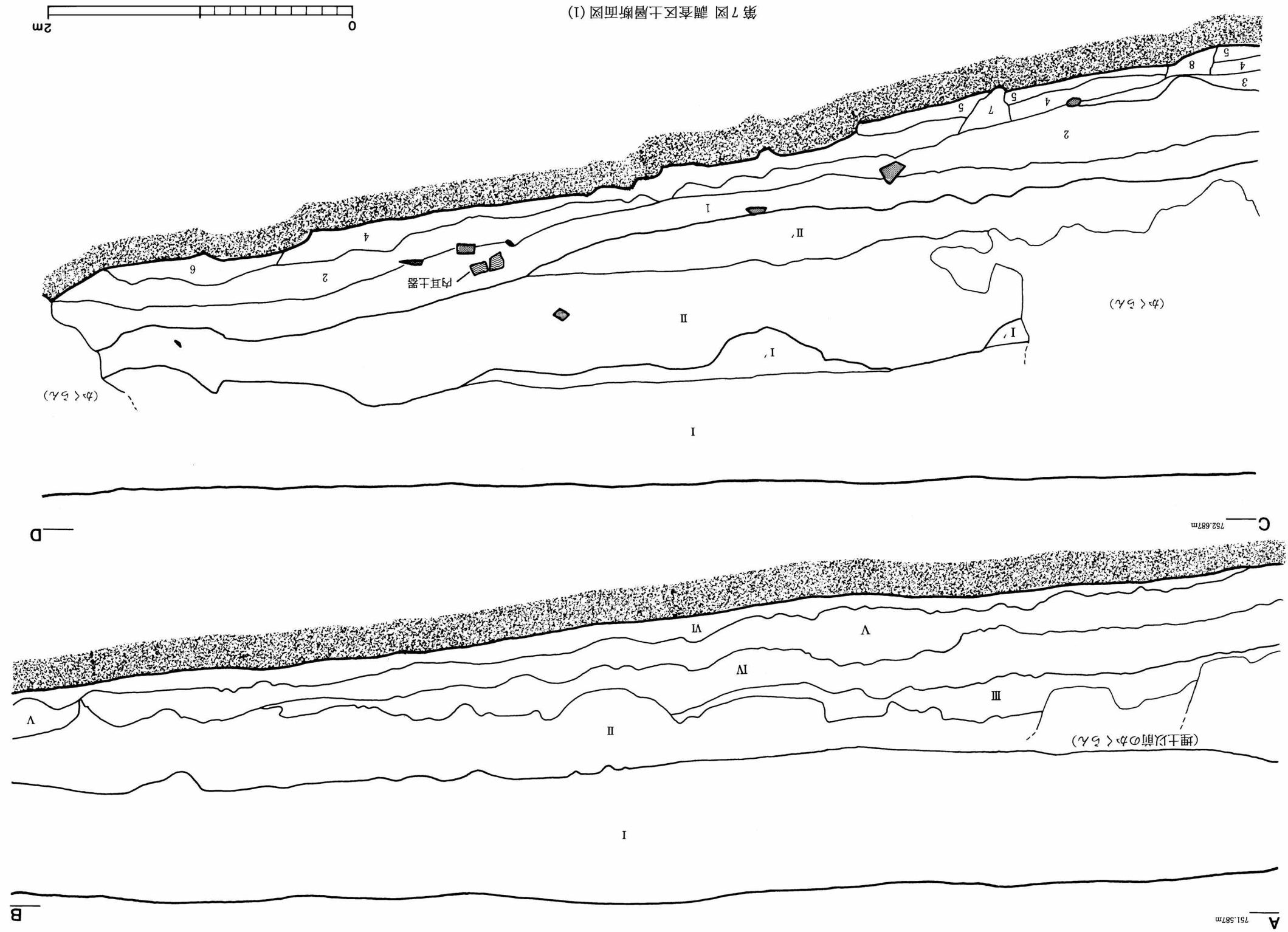
I 層 伊北農蚕学校、伊北農商学校、辰野高等学校による整地工事等の埋土で、古いものから新しい時期のものまで含めておよそ 3 層くらいに細分できそうだが、明瞭な箇所については I' として分離し、かくらん層とし



第 5 図 調査区基本層序概念図



第6図 発掘調査区位置図



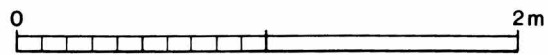
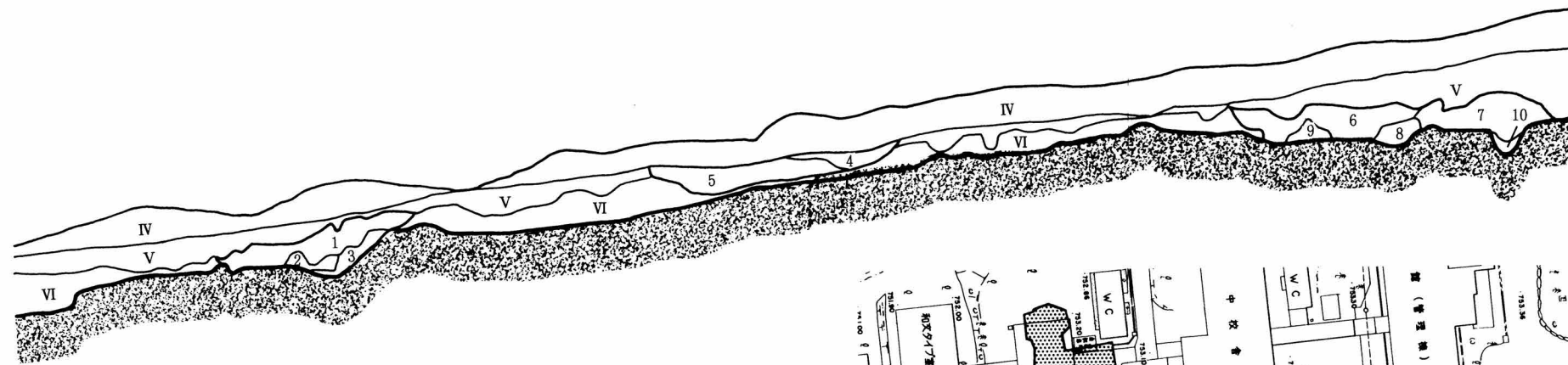
第7図 調査区土層断面図(1)

0 2m

E 751.532m

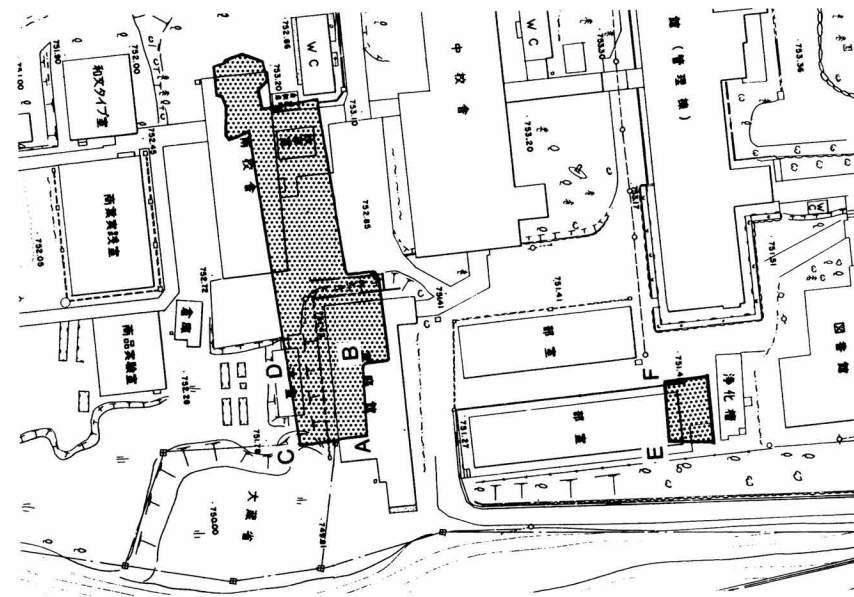
F

I

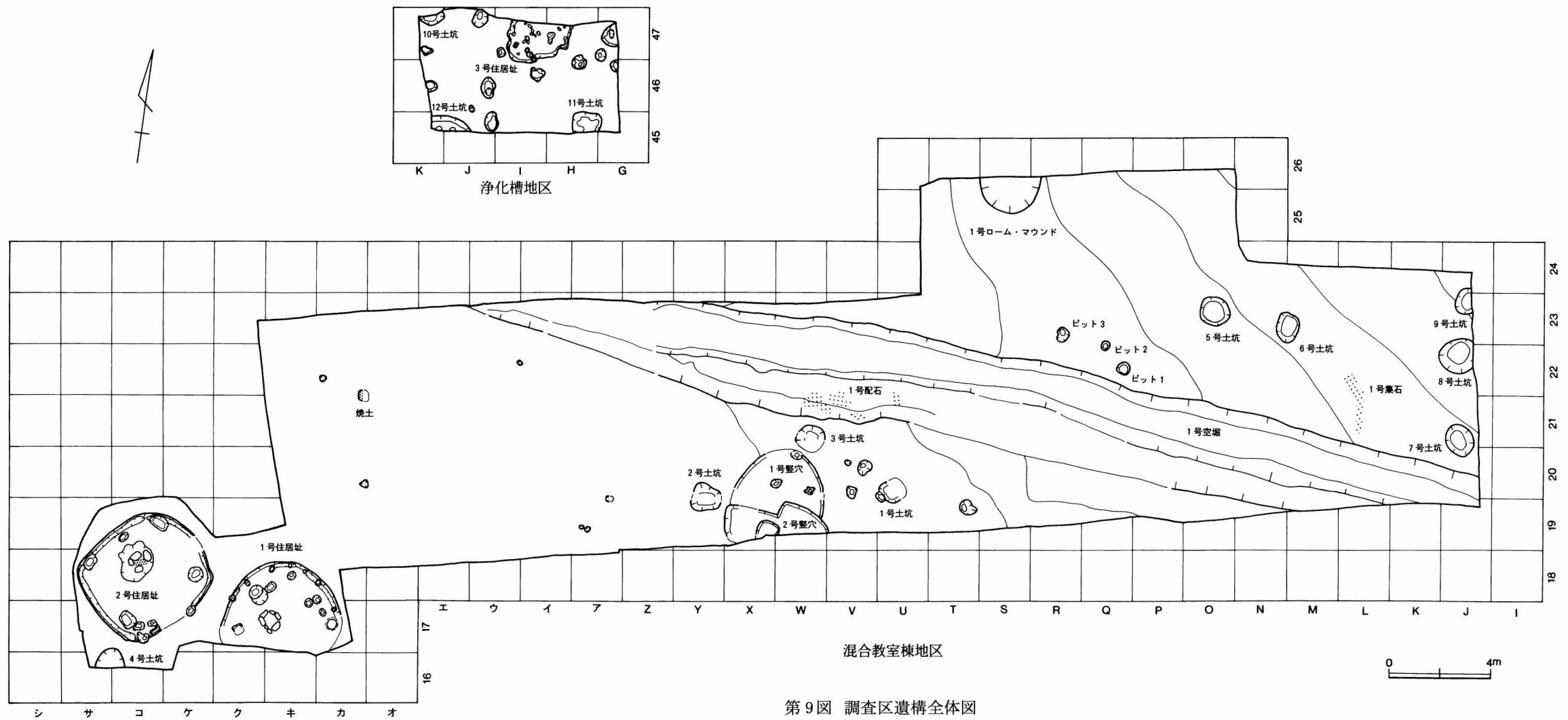


- I 埋土層
- I' 旧埋土層
- II 灰褐色土 (埋土以前の表土層)
- III 黒色土 (遺物包含する)
- IV 灰色がかった黒褐色土 (遺物包含する)
- V 黒色土 (ローム粒・木炭粒含む・縄文時代遺物包含)
- VI 黒色土とソフトロームのまじり

- 1~3 11号土坑覆土
- 6~10 12号土坑覆土
- 4 黒褐色土
- 5 黒色土 (ローム粒含む) } 土坑覆土?



第8図 調査区土層断面図(2)



第9図 調査区遺構全体図

で処理したところもある。段丘東端に近いところほど厚く、浄化槽予定地内の東壁断面では3mをこえている。大正時代以降の陶磁器などが出土している。

- II層 学校建設以前の旧表土で、かつての畑地の耕作土である。灰黒色のやわらかい土層で、中世以前の遺物は殆ど包含していないが、江戸～明治ころの陶磁器片がわずかに出土する。場所によってII層内の下部にII'層を分離したが、この層は主として中世の遺構上面を覆っていた。
- III層 黒色土でやわらかく、中世末期の遺物包含層である。中世の遺構はこの層中から落ち込んでいたと思われる。
- IV層 灰黒褐色で、場所により茶褐色に近い色調となる。ややしまった感じの土層で、木炭粒を含み、縄文時代前期～中期の遺物を包含している。
- V層 黒色土だがしまっており、木炭粒の包含が目立つ層である。この層の下部でローム粒を多く含むところもある。縄文時代の遺物を包含しており、前期～中期の遺構はV層下面付近で落ち込むものと思われる。
- VI層 黒色土とソフトロームがまじった土層で、土坑のいくつかとローム・マウンドは、この層の上面付近から落ち込んでいる。遺物の包含は殆ど認められなかった。
- VII層 ソフトロームの上部で、混合教室棟調査区内の西半部では、校舎建設時の整地により、この層までが削り取られていた。

(赤羽)



混合教室棟調査区北壁断面

第IV章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

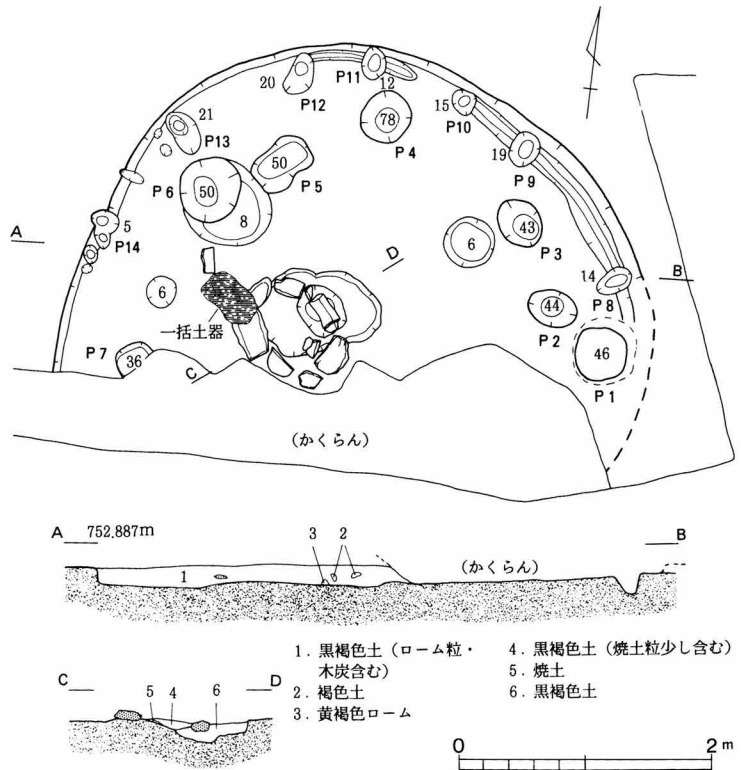
1. 第1号住居址

混合教室棟調査区の西端部は、旧校舎の一部である便所、プロパン庫などがあり、調査当初は遺構の存在の可能性は低いと考えていたが、旧校舎の基礎坑などによってかなり破壊されながらも2基の住居址を確認することができた。

この第1号住居址はキー17グリッドを中心に出土したもので、プランの2分の1近くは旧校舎のかくらん坑により失われており、竪穴の壁高もわずかに10~15cmをのこしていたにすぎない。径約4.5mの円形と思われる、竪穴内中央やや西寄りに石囲いの炉がある。炉縁は大小10個ほどの礫によって構成されているが、炉の掘り方はきわめて浅く、少量の焼土が認められたにすぎない。炉縁石の東側に張り出して別の浅い掘り込みが確認されたが、わずかに移動して炉の再築成を行っている可能性がある。炉縁石上に第11図の深鉢形土器がつぶれた状態でまとも出土しており、

炉内の土層中からは図版13-3に示した貝殻が検出された。主要柱穴としてP2~P7をあげることができるが、数の上からや、炉の状態から考えると、住居の建て替えや柱穴の掘り直しが推測される。竪穴内の壁際にはP8~P14の小ピットがあり、北から東にかけての壁に接して周溝が設けられている。一方、P2の東側の壁際には袋状のP1がある。

遺構内からの遺物の出土はあまり多くはなく、第11図~第13図に示したものが主な遺物である。

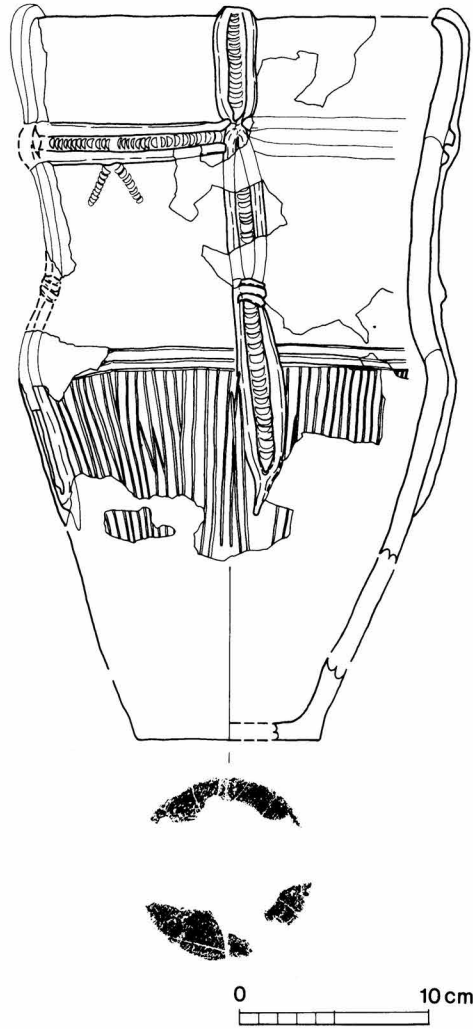


第10図 第1号住居址実測図

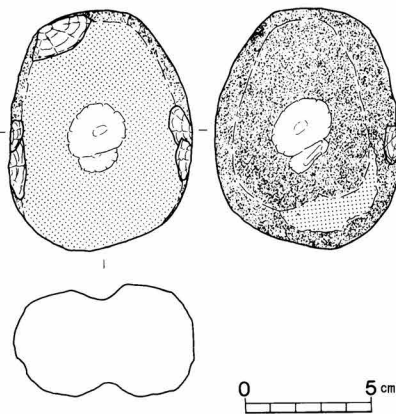
これらはいずれも竪穴覆土の1層に包含されていた。

第11図の土器は炉縁石上から一括して出土した深鉢形土器で、この住居址出土の土器のうちで唯一器形が復原できたものである。内湾する口縁部から胴上半部にかけてゆるくくびれる器形で、口縁下部を横にめぐる隆帯と、口縁から垂下する隆帯によって器面が区画されており、頸部と胴部は平行沈線が縦に密接して施文されている。また、隆帯は2本平行し、その間に半割竹管による連続刺突が加えられており、無文部には「ハ」の字状に施文が行われた箇所もある。なお、木葉痕が見られる底部は、周縁部のみ残っていた。

第13図は、竪穴内のわずかに残っていた覆土と床から出土した土器で、2は炉に近い床面から出土している。4は中期井戸尻式特有の楕円文が構成されている深鉢形土器の下部破片で、5は横に巡る隆帯と沈線が縦に密接施文されている胴部破片である。1は横方向の隆帯上に不鮮明だが連続した刺突が行われている。3は外へ開く口縁部の破片で、細い隆帯上に押引状の連続刺突があり、6にも類似した効果の施文が見られるが、別個体



第11図 第1号住居址出土土器実測図

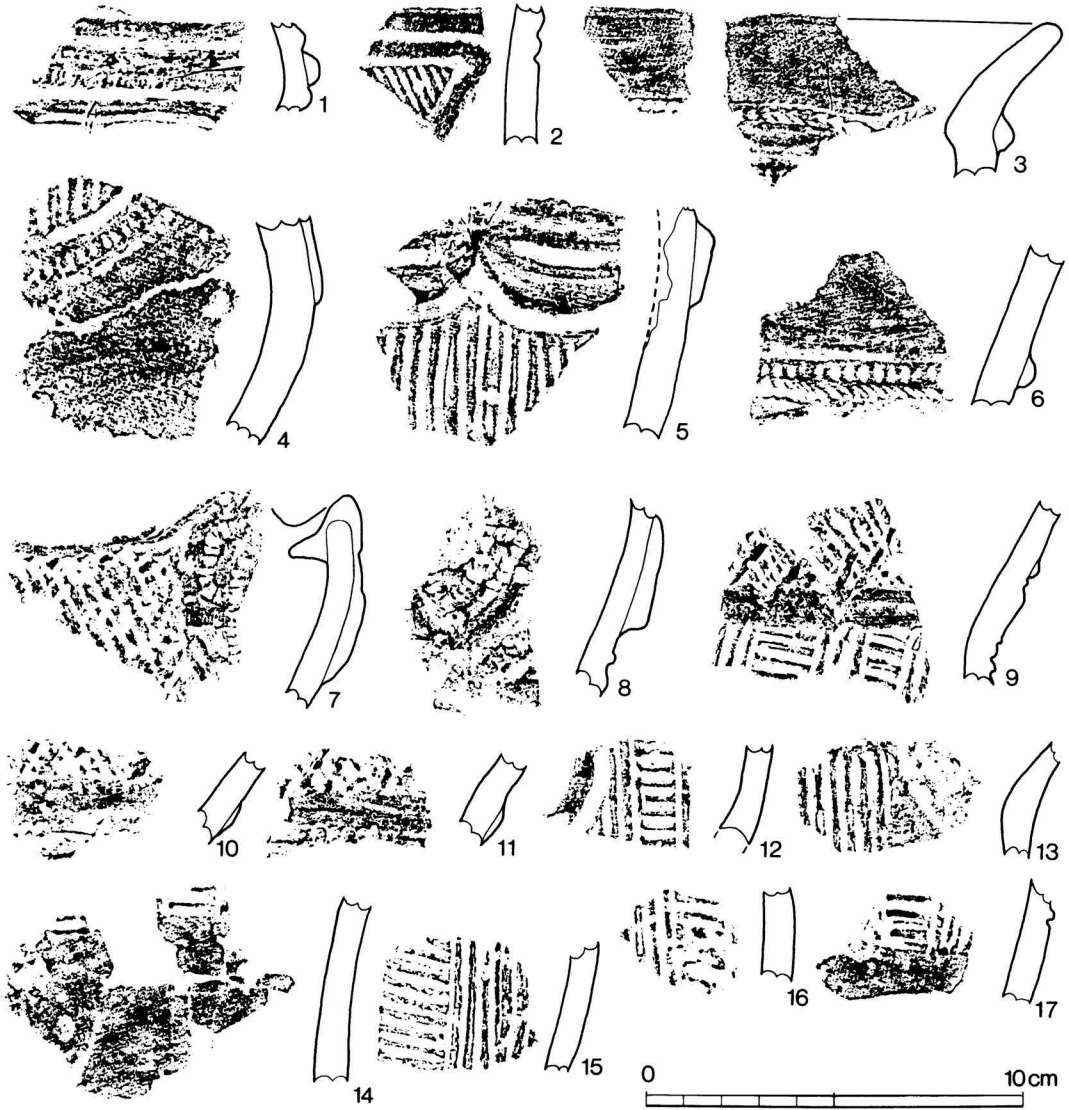


第12図 第1号住居址出土土器実測図

である。7～17は同一個体の破片で、7、8の波状口縁の頂部を中心に隆帯が貼り付けられており、連続刺突による施文がある。9～11及び13は口縁下部から頸部にかけての破片で、口縁部には沈線とソーマン状の粘土紐の貼り付けによる網目状の効果が見られる。胴部の平行沈線による施文とは、微隆起状の無文帯を横に巡らせることで区画している。胴下部には施文は見られない。これらは中期の曾利式期初頭の土器と考えられるものである。

石器としては、第12図の凹石が主なもので、他に

黒曜石片がわずかに出土したにすぎない。凹石は砂岩の楕円礫を用いており、両面の中央に凹痕がある。表面の全面と裏面の一部に研磨が認められ、裏面の大部分と側縁部に細かな敲打痕がある。また、側縁部の3カ所に打撃痕が見られる。

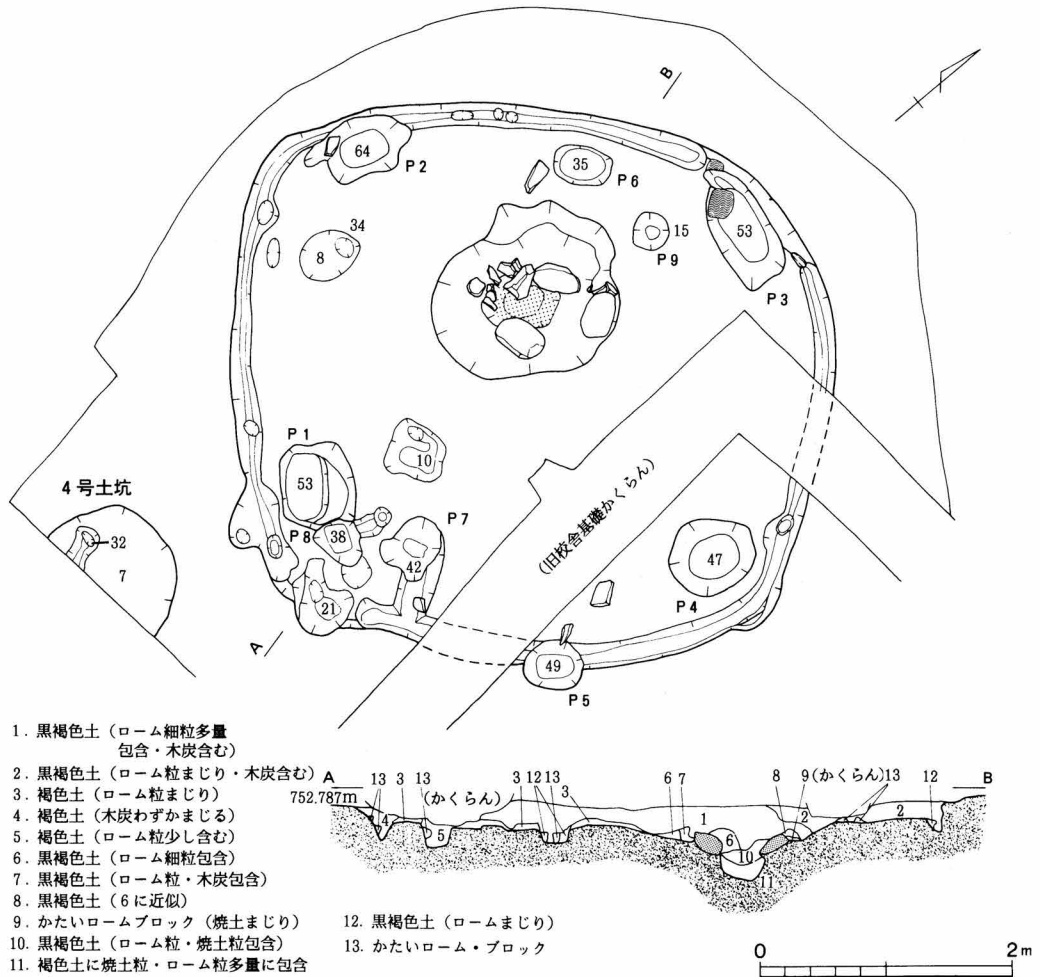


第13図 第1号住居址出土土器拓影図

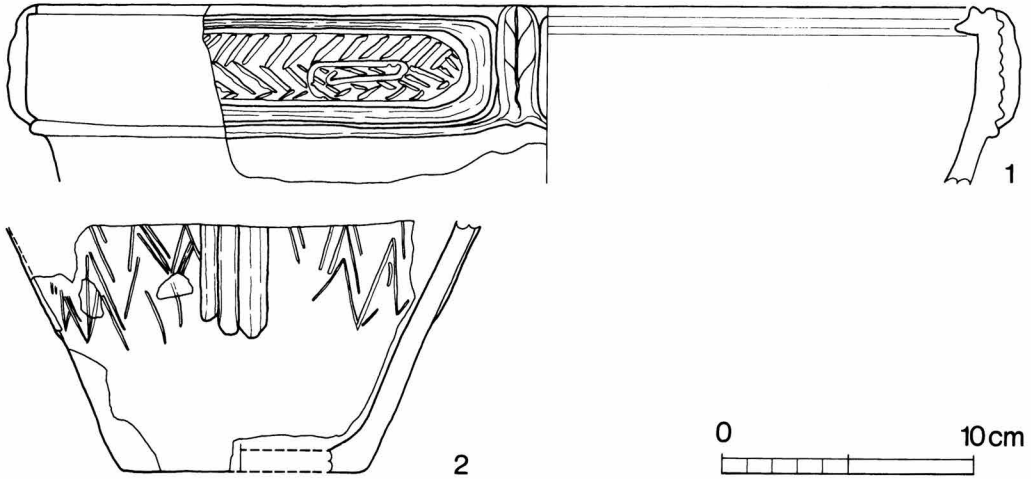
2. 第2号住居址

第1号住居址発見後、調査区西端部で何か所かのテスト・ピットにより遺構の存在を探った結果、第1号住居址の西側のコー18グリッドを中心に新たに住居址が出土し、第2号住居址とした。なお、この第2号住居址の北側は旧校舎の便所等のあったところで、かくらんと削平が著しく、遺構は認められなかった。

第1号住居址と同様に、堅穴の上部の大半は削平されているが、旧校舎の基礎坑がL字状に住居址を破壊しているものの、プランは原形を失っていない。隅丸方形に近い平面形を示し、各コーナーの壁際にP1～P4の支柱穴がある。P-6は補助的な柱穴と思われる。堅穴の壁に接して周溝が巡っており、周溝内には何か所かの小ピットがある。堅穴南コーナーにはP7、P8をはじめ大小の掘り込みが集中している。炉は堅穴中央からやや北西に寄って設けられており、大形の掘り方の中央が更に深くなっており、多量の焼土が残っていた。また、炉縁石は配置が整っ



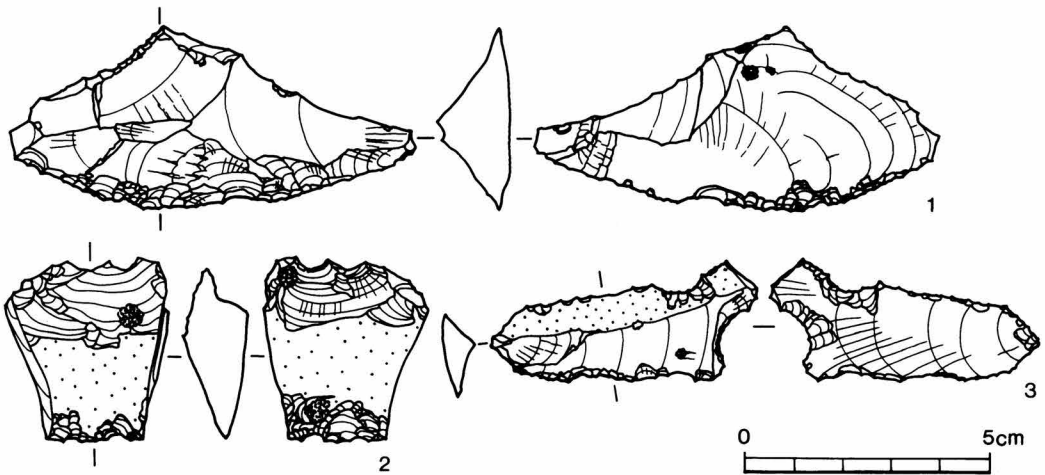
第14図 第2号住居址実測図



第15図 第2号住居址出土土器実測図

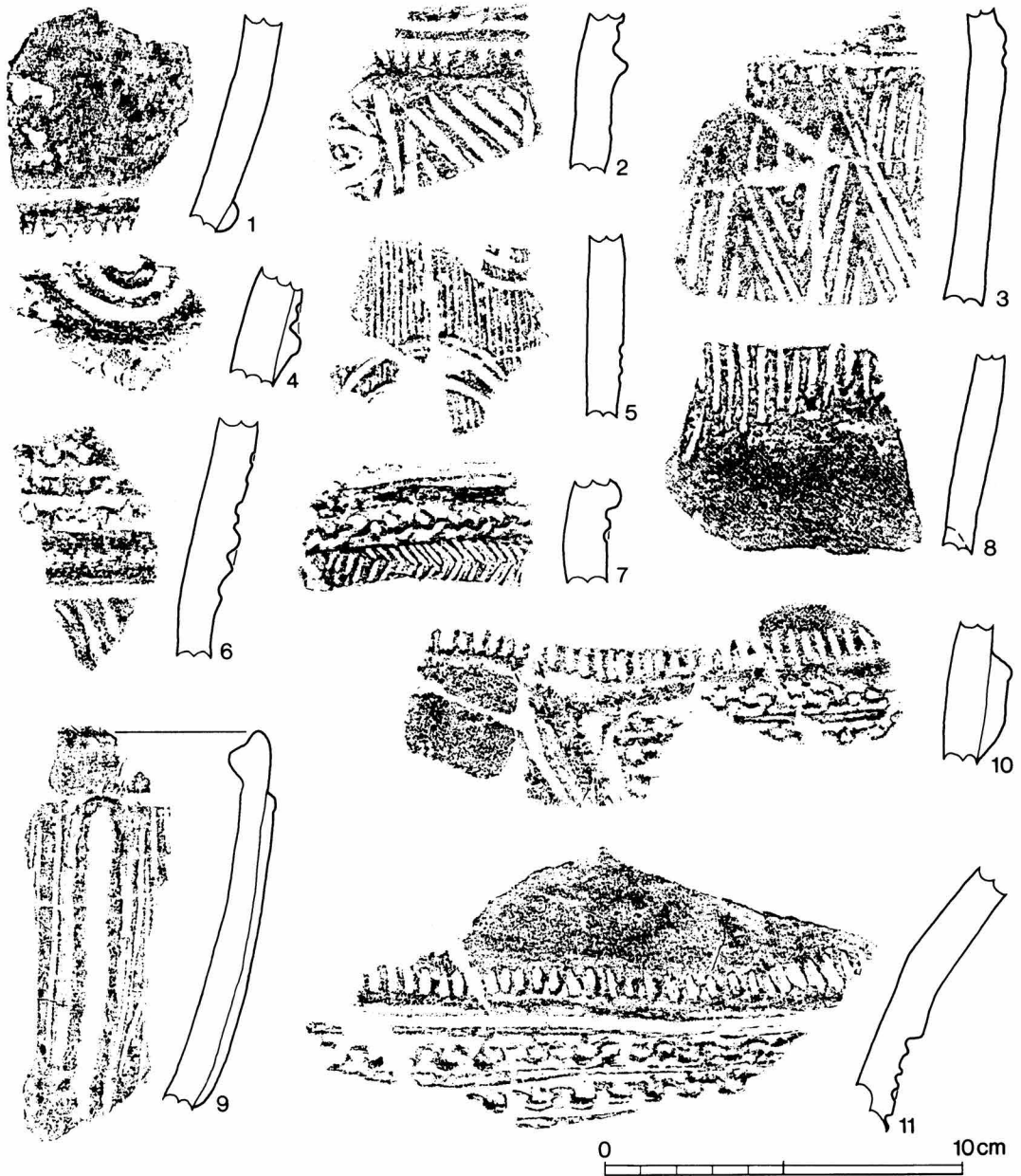
ておらず、住居廃棄時の人為的な破壊の可能性がある。なお、P 3の上面に貼床状の部分があり、柱埋設の際の埋め戻しによるものと思われる。

竪穴内からの遺物の出土量はあまり多くはない。第15図1は口縁部の隆帯による区画内に、沈線による綾杉状や渦巻状の施文があり、頸部は無文となる深鉢形土器である。2は垂下する隆帯と「ハ」の字状の沈線文があり、底部に網代痕が観察できる。第17図1、11は頸部から口縁部の破片で、1は無文の口縁が内湾し、11は外反している。2、5、6は頸部付近の破片で、太い沈線があり、5は綾杉状の構成となる。10も深鉢の頸部付近で、隆帯の貼付けがある。9は小形の単純な深鉢で、垂下隆帯と沈線が施文されている。第16図1～3は小形の石器で、1は剝片の側縁に両面から簡単な刃部が作られており、スクレイパーの機能を持つもの。2も簡単な刃部が

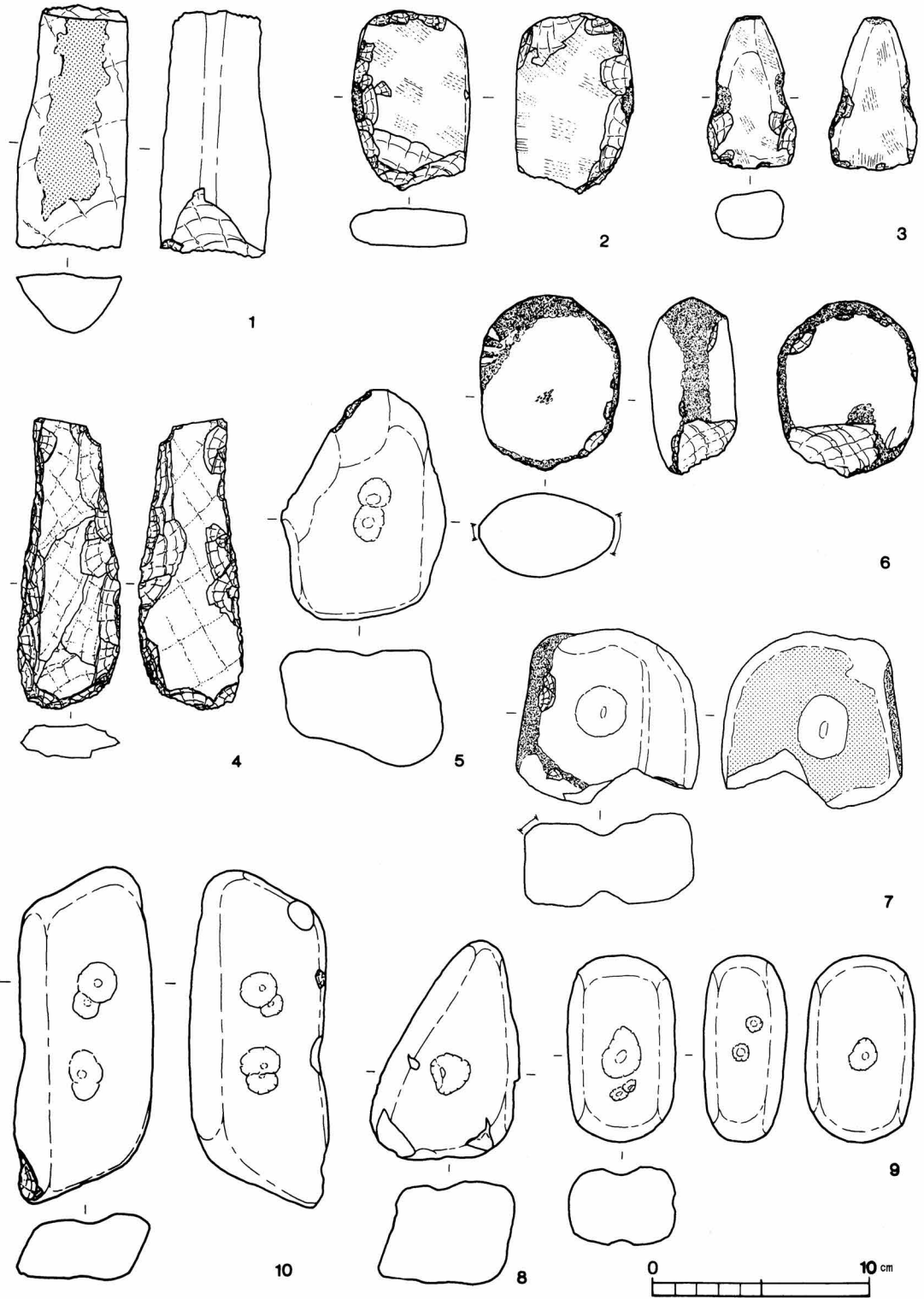


第16図 第2号住居址出土石器実測図(1)

あり、3は炉内から出土した石匙である。いずれも石材は黒曜石である。第18図4は打製石斧、2、3は磨製石斧で、2は側縁に打撃による剝離があり、先端は欠失している。3の両側縁の握りは着柄のためのものであろう。磨石類として1、5～9があり、凹みだけがある凹石（5、8～10）、凹みと磨面、それに側縁に特殊磨石の機能面がある7、周縁に敲打による磨滅痕と表裏にわずかな打撃痕がある6などである。1～3はP4、7はP9、9はP1内から、また4、8は炉内から出土している。4は粘板岩、2は蛇紋岩、3、6は緑泥岩、9は安山岩、他は砂岩である。



第17図 第2号住居址出土土器拓影図



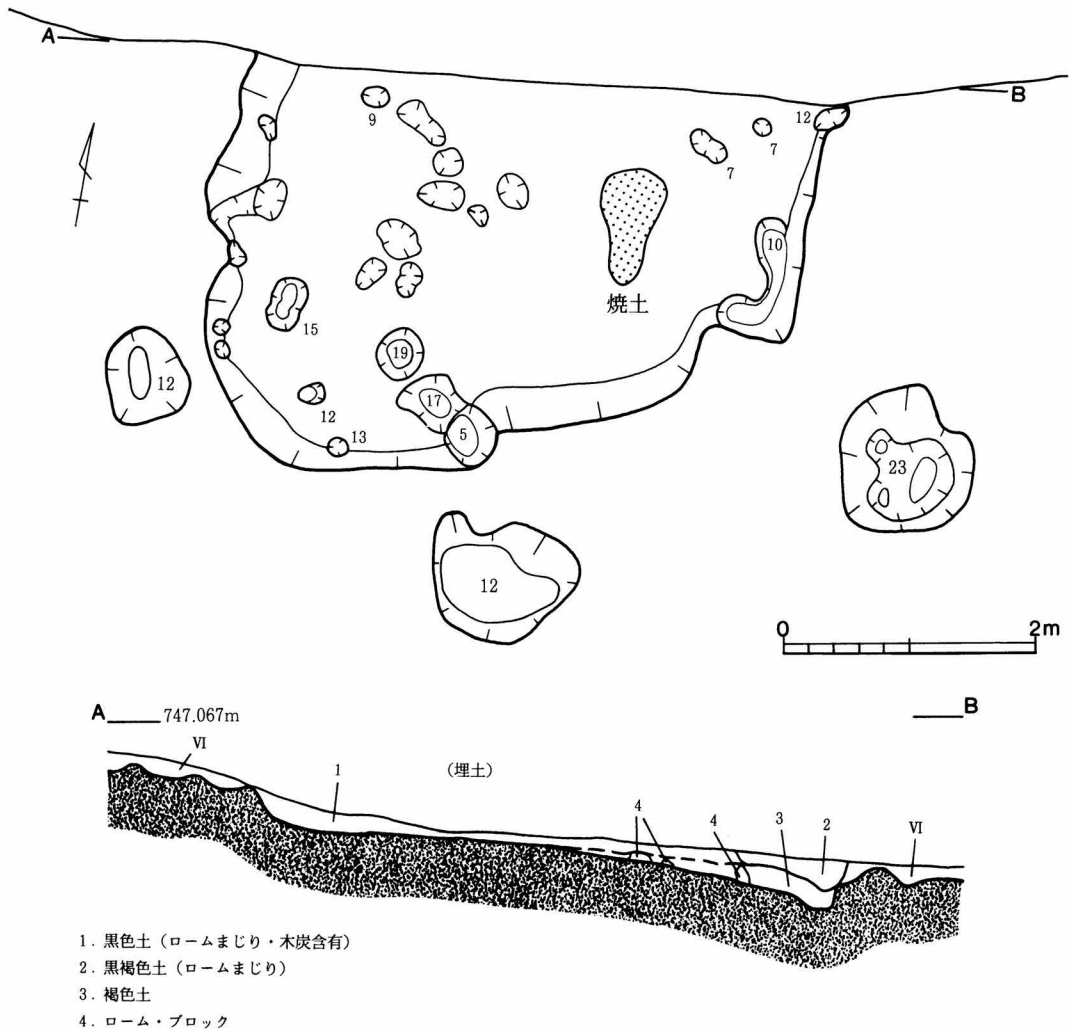
第18图 第2号住居址出土石器实测图(2)

3. 第3号住居址

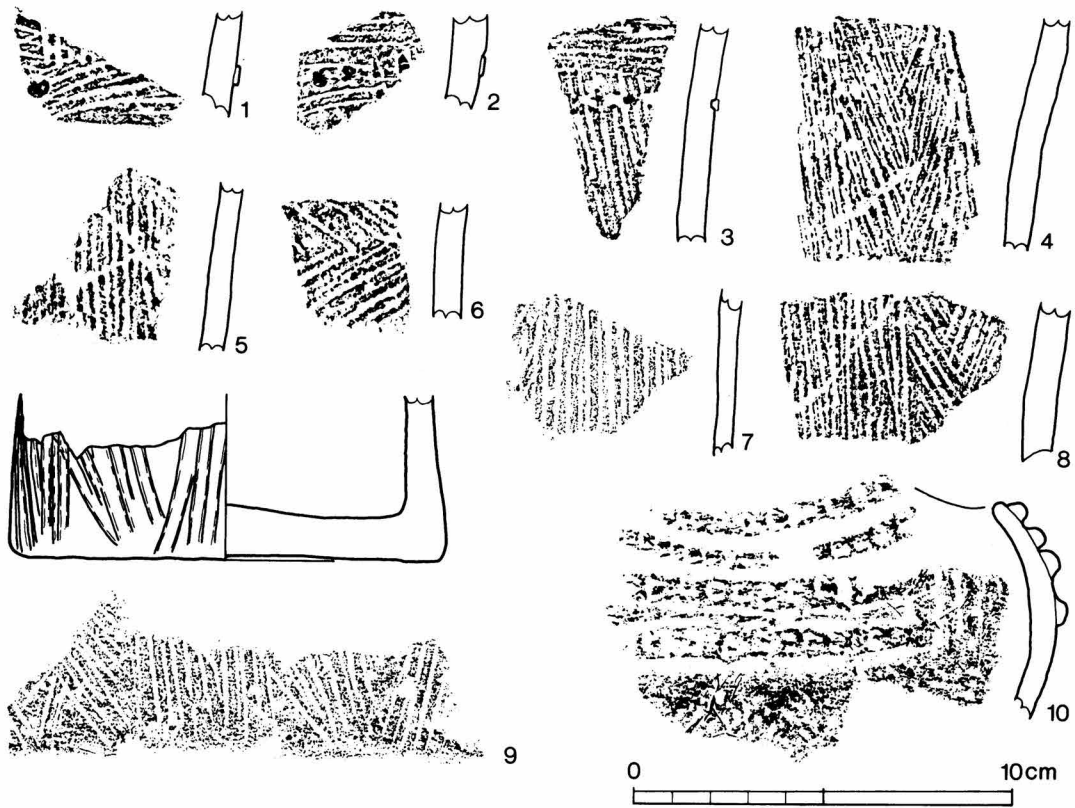
新しい浄化槽は管理棟の東で、旧浄化槽の南隣りへ計画されており、10m×6m程度の小規模な範囲の発掘となった。更に、対象地は段丘東端で、校地造成により極度の埋土が行われており、深い箇所では3mをこえていたため、周囲の土砂崩落による危険防止を目的として調査区壁に傾斜をもたせたことから、実際には30m²余りを発掘したにすぎない。また、梅雨明け直前の豪雨が続いたため、現実には壁面が2度にわたって崩落し、調査区内が多量の土砂で埋まり、人力による排土を余儀なくされた。

このため浄化槽調査区内の遺構の確認は難航し、しかも発見された遺構は不明瞭なものとなった。

調査区内から出土した遺構は、住居址1基、土坑3基、それに不整形で浅い落ち込み等が11カ所である。このうち第3号住居址としたものは、調査区北壁寄りのH 47グリットで焼土が出土



第19図 第3号住居址実測図



第20図 浄化槽区内出土土器拓影図

したため周囲を調査したところ、深さ10cmほどの浅い落ち込みが認められたものである。プランは整っておらず、内部は床面とするにはあまり状態は良好ではなかった。特に東寄りの部分は床面が不明瞭で東側へ傾斜しており、3層は4層のローム・ブロックを包含した状態で、貼床か或いは別の遺構の重複も考えられる。竪穴内のピットはすべて20cmに満たない深さで、積極的に柱穴とするに適したものはない。東壁、西壁に接して浅い溝状の掘り込みがあるが、これも周溝としては貧弱である。従ってこの遺構は住居址とする条件は希薄だが、段丘東端部の傾斜地に築かれたため廃棄後はしだいに段丘崖の崩落によって竪穴上部が失われ、しかも調査時に2度にわたる土砂崩落があったため、こうした不明瞭な形で確認されたと考えておきたい。

遺物として第20図の土器があるが、これらは遺構確認に至るまでの間に調査区全体から出土したもので、前期末葉に属する。1～9はいずれも半截竹管による施文があり、1、2はボタン状の貼付けが見られる。また3には横方向に連続して半截竹管の刺突が施されている。10は内湾する口縁部の破片で、波状と思われる。地紋に縄文が施文されており、貼付けられた粘土紐上には半截竹管による連続刺突がある。これらは胎土に砂を多く含むが、焼きは良好である。1～9は日向Ⅱ式土器で、10は日向Ⅱ式でも若干新しい印象をうける。

これらの土器のほか、この調査区内からは中期の土器細片7点と、黒曜石の剝片13点などが出

土している。なお、土坑等からは遺物は出土していない。

4. 土 坑

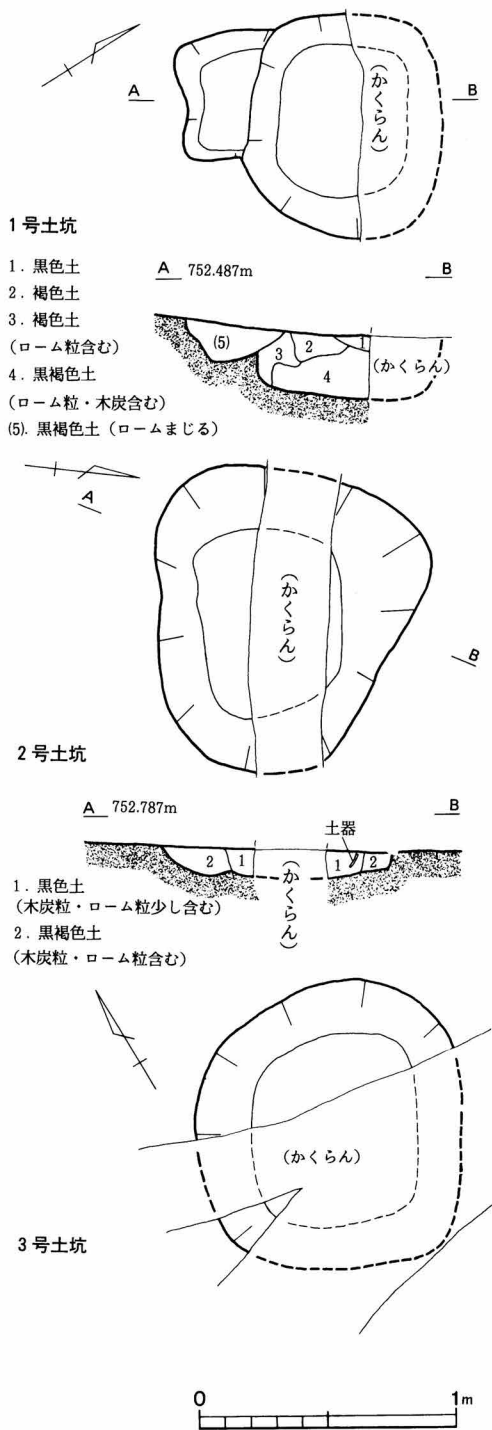
第1号土坑 混合教室棟調査区中央部のU-20グリッド内から出土した。北東側の2分の1近くは、水道管理設溝により失われている。また、南西側でこの土坑より新しい時期の浅い掘り込みが重複している。隅丸長方形に近いプランと思われ、壁高は約25cmが残っており、壁、床とも明瞭であったが、木の根等による凹凸がはげしい。内部からは土器、石器等の遺物は出土しなかった。

第2号土坑 Y-19、Y-20グリッド内から出土した。楕円形に近いプランで、土坑中央部を東西に水道管理設溝が通っており失われている。校地造成により土坑上部は削平され、壁高はわずか10cmほどである。内部からは第24図7のやや小形の浅鉢が出土しており、口縁内側に結節状の浅い沈線が4状巡っている。

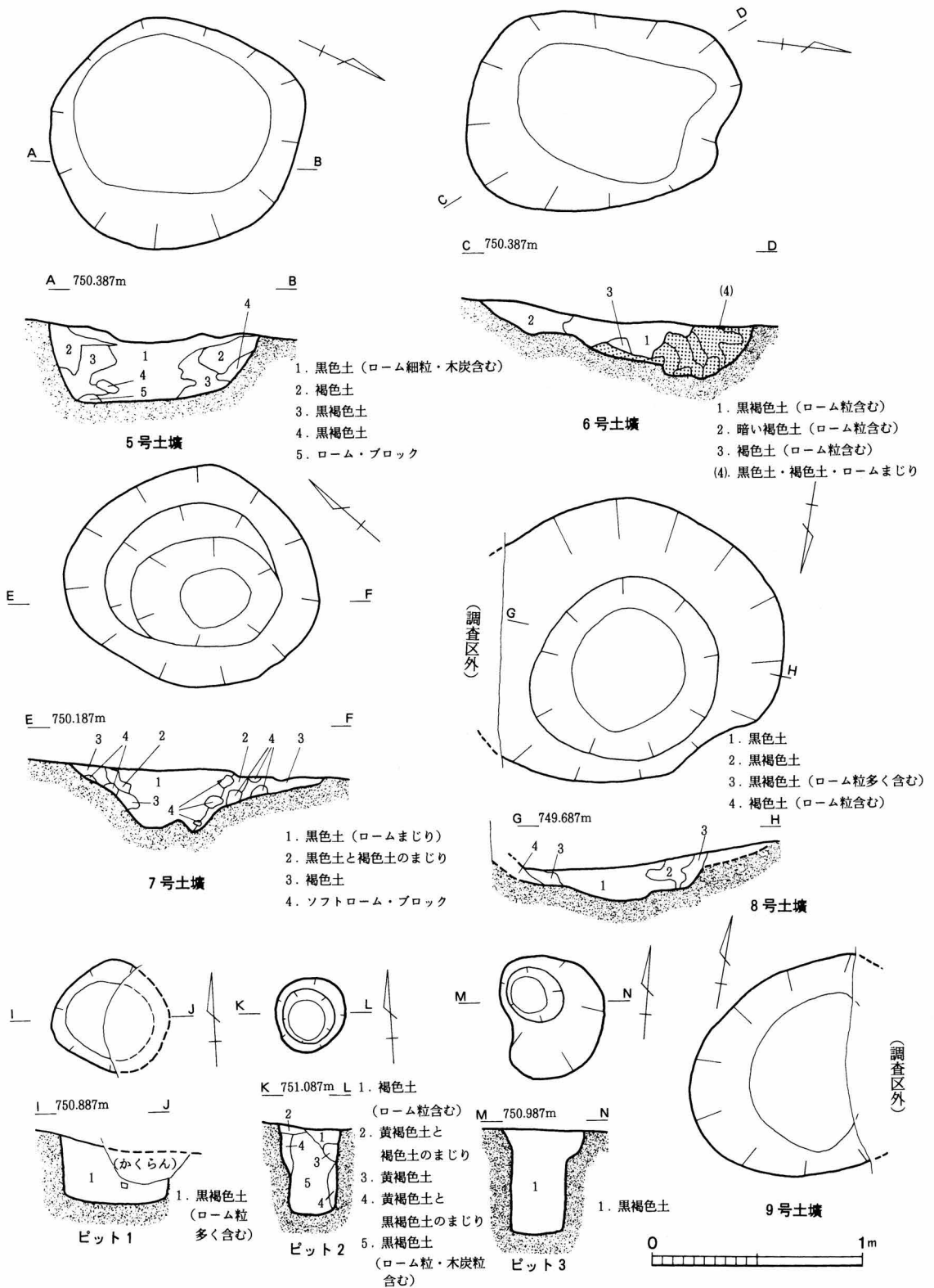
第3号土坑 W-21グリッド内から発見された。水道管理設溝の分岐によるかくらのため、土坑の3分の2近くは失われている。壁高は13cmほどが残っている。内部からは中期初頭と思われる土器片1点が出土した。

第4号土坑 (第14図) 第2号住居址の南側に発見され、南半分は調査区外にかかっている。深さ7cmほどの不明瞭な壁の土坑で、内部には深さ3.2cmに及ぶ穴がある。土坑内からは、中期初頭と考えられる土器細片1点が出土している。

第5号土坑 O-23グリッド内のIV層上面まで掘り下げて存在を確認したが、壁、床とも明瞭で、楕円形に近いプランを示す。内部からは、覆土に混じて径数cmの山石9個(粘板岩7、砂岩2)が出土し、内6個は火熱を受けた痕跡が認められた。土器の出土は多く、第24図1~6がある。



第21図 土坑実測図(1)



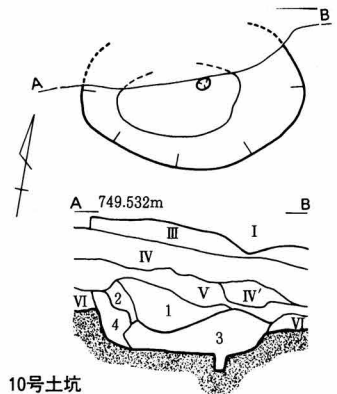
第22図 土坑及びピット実測図

1は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片、2は頸部付近の破片で、いずれも半截竹管状工具による平行沈線によって横位に分割された文様帯をもつ。1の口縁部は、断面「く」の字状に折れる形態で、口唇部とその直下の貼付隆帯には、半截竹管状工具による爪形状の連続刺突文がみられる。2の頸部の文様帯には、同じく半截竹管状工具によって、格子目状の施文がある。5、6は頸部以下底部に至る深鉢の同一個体片で、頸部直下は横位の区画があり、内部は半截竹管状工具による平行沈線と細い一本描きの沈線により、格子目状の文様が埋めている。胴下半部は横位文様帯に分割せず、半截竹管状工具によって幾可学的な文様が構成されている。3、4も半截竹管状工具による施文がある。

第6号土坑 M-23、N-23グリッド内から出土した。落ち込みが確認された際にはプランは明瞭と思われたが、掘り下げると壁、床とも不安定で、特に北側の床から壁にかけては不明瞭で、当初覆土と考えた(4)層は基本土層のVIに同じである可能性がある。土坑内部からは、土器、石器等の遺物は出土していない。

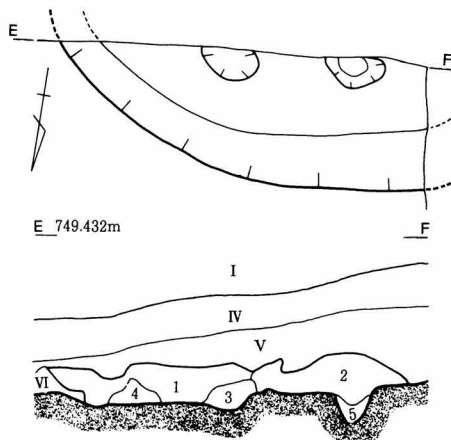
第7号土坑 調査区東端のJ-20、J-21グリッドから出土した。壁は上部で朝顔状に開き、床は凹凸があって発掘の際もあまり明瞭ではなかった。覆土は壁際でロームがブロック状に混入する状態がうかがえた。内部から土器、石器等は出土しなかった。

第8号土坑 同じく調査区東端のJ-22グリッドから発見され



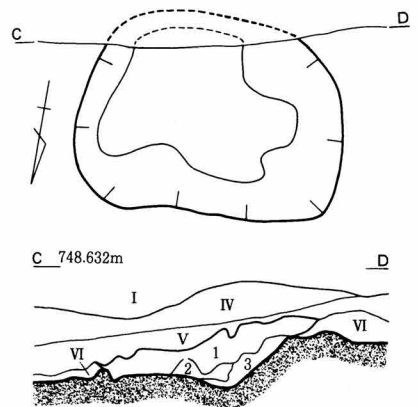
10号土坑

1. 黒褐色土（ローム粒わずか含む）
2. 黒褐色土（木炭粒少し含む）
3. 黒褐色土と黒色土のまじり
4. 暗い黄褐色土



12号土坑

1. 黒褐色土（ロームまじり）
2. 黒褐色土（ローム粒多く含む）
3. 暗い黄褐色土（ローム粒含む）
4. 黄褐色土
5. 褐色土（ロームまじり）

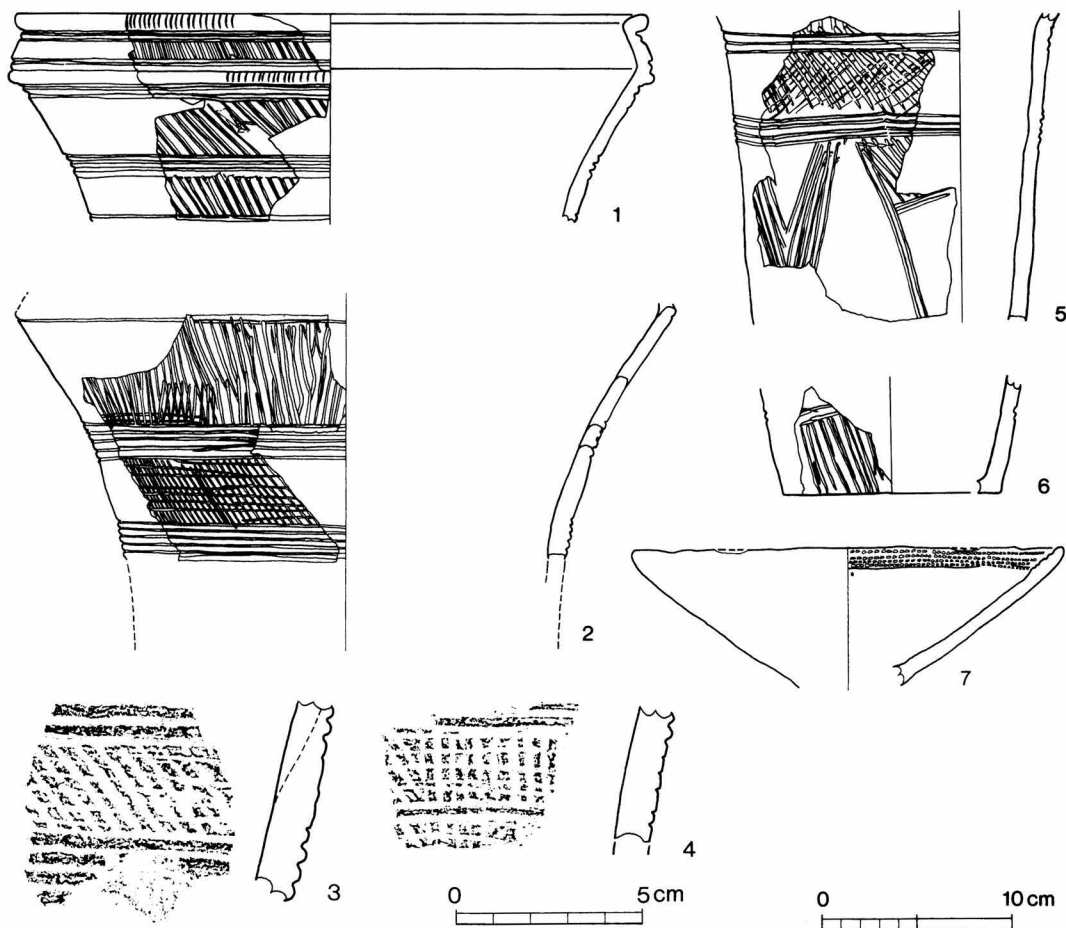


11号土坑

1. 暗い褐色土（ローム粒含む）
2. ローム・ブロック
3. 暗い黄褐色土（ローム粒含む）



第23図 土坑実測図（2）



第24図 土坑出土土器実測図

た。土坑の東壁の一部は調査区外へかかっている。何回かの豪雨時に調査区内の排土が西側から流れ込んだため、遺構の検出は難航した。壁、床ともあまり明瞭でなかったが、土坑内の土層の状態は5号土坑に類似している。内部から土器、石器等の遺物は出土していない。

第9号土坑 調査区北東コーナーに近いJ-23グリッドから出土した。全体の約3分の1は調査区外へかかっている。第8号と同様雨によって排土に埋まり、検出は難航した。壁と床の区別が明瞭でなく、覆土の状態も他とは異なっており、内部から土器、石器等の出土はなかった。

第10号土坑 浄化槽調査区内北西コーナーから出土した。平面楕円形で、北側の3分の1は調査外となっている。床に小穴1カ所がある。内部からは、胎土に雲母片や砂を多く含んだ中期初頭の無文の土器片1点と、黒曜石の剥片2点が出土した。

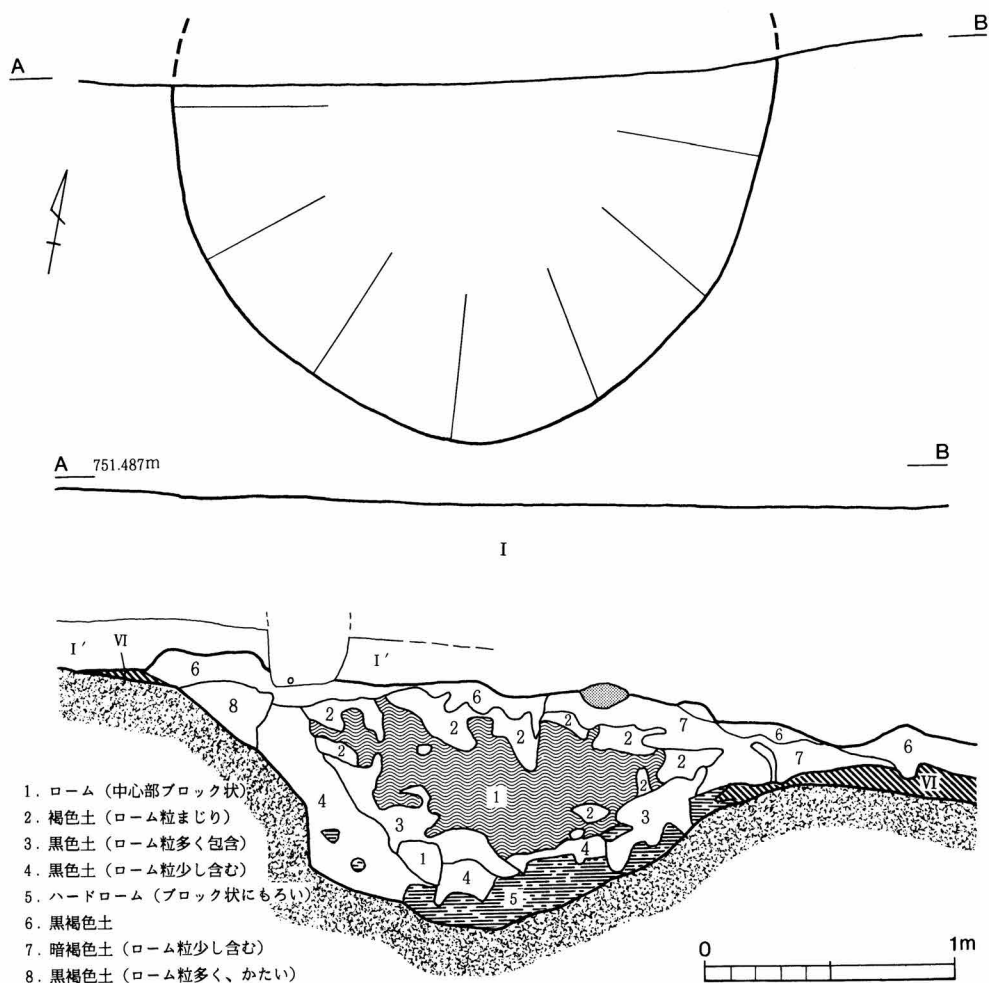
第11号土坑 浄化槽調査区内の南東コーナーに近いH-45グリッドから出土した。一帯は段丘崖へ続く傾斜地のため、東寄りの壁は土砂崩落により失われていると思われる。土坑内部からは、焼土塊と土製品状の細片1点が出土している。

第12号土坑 浄化槽調査区南西コーナーにかかって検出された。遺構は大形のものである可能性もあるが、一応土坑として扱った。壁は不明瞭で、内部から土器、石器などは出土しなかった。

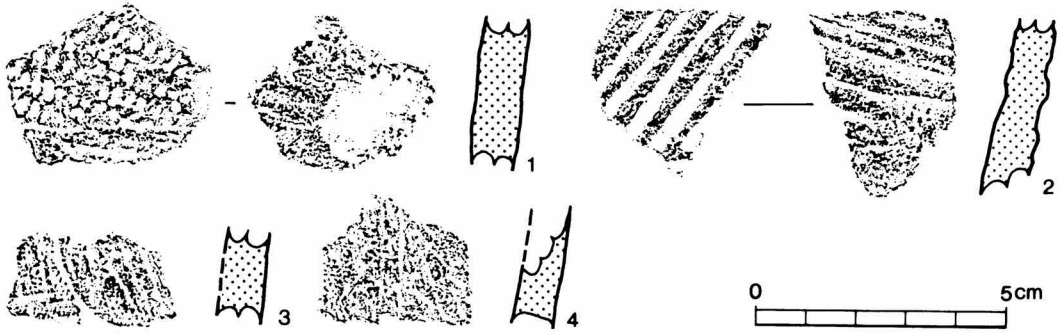
5. 第1号ローム・マウンド

S-25グリッドで、埋土であるI層及びI'層を除去してプランを確認したもので、全体の2分の1近くは北側の調査区外へかかっている。土層断面により、VI層上面付近から落ち込んでいることが観察されるが、6層及び7層は、IV層やV層のこの遺構付近に限られた部分土層である可能性もある。遺構の掘り込みの中心部に1層としたローム塊があり、これを2層及び3層がとりまいており、西側の壁に沿って4層が、東側の壁に接して5層が入り込んだ形になっている。

第26図の遺物は4層内から出土しており、1は外面にあまり明瞭でないR-Lの縄文施文があり、



第25図 第1号ローム・マウンド実測図



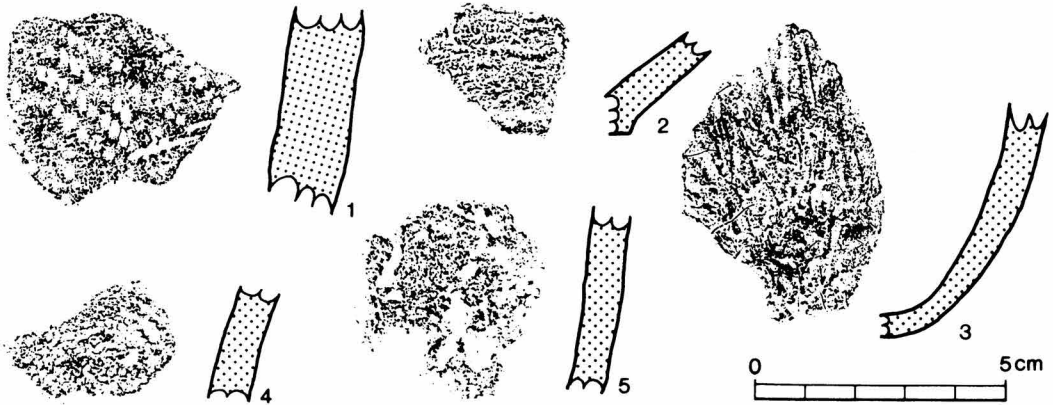
第26図 第1号ローム・マウンド出土土器拓影図

内面には不鮮明な条痕がある。2は外面に太くて浅い沈線が施文され、内面には条痕が見られる。3、4は同一個体片で、外面にかすかな条痕文があるが、内面は剝落による凹凸が著しい。1～4はいずれも胎土に繊維を含ませている。なお、粘板岩の拳大の河原石1個が出土している。

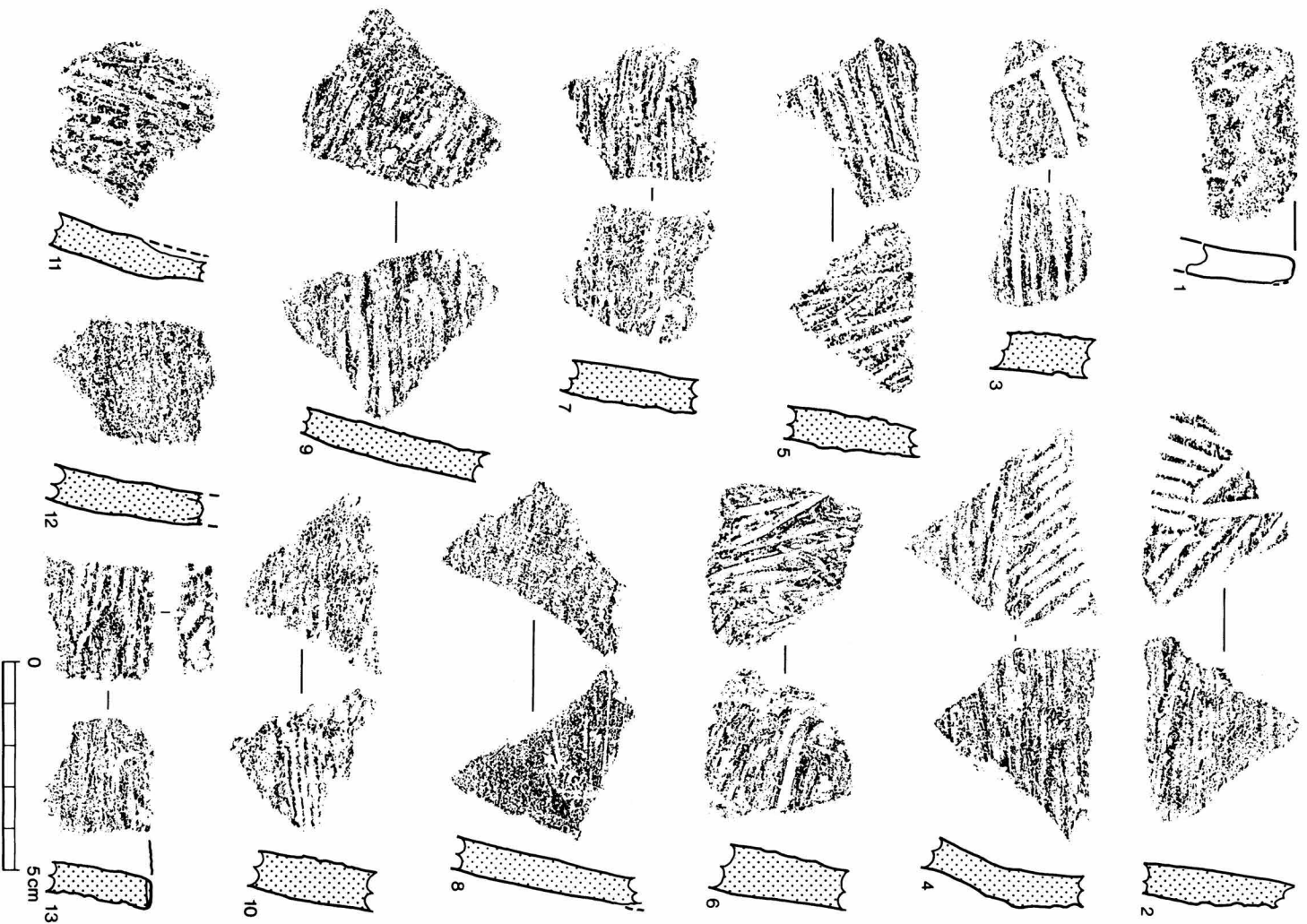
6. 遺構外出土の遺物

早期の土器（第27図、第28図）第28図1は押型文土器の口縁部破片で、器面は荒れているが楕円文の施文が見られる。

第27図1、4、5は、胎土に植物繊維を含んだ縄文施文の土器で、1はRL単節縄文原体を回転施文しており、4の施文は不鮮明である。5は縄文原体の圧痕の可能性ある。第27図2は器面にかすかな条痕がある平底の底部片、3は同じく器面に貝殻条痕が見られる丸底の底部破片である。第28図2～4は条痕文の上に太沈線による区画や、区画内の充填が行われており、4は頸部付近の破片で断面「く」の字状に折れている。5、6は内外面とも条痕が明瞭で、6は縦方向のやや乱雑な施文となっている。7は内面の条痕は不明瞭で、8は外面に幅広の条痕があり、内



第27図 遺構外出土縄文土器拓影図（1）



第28图 遺構外出土繩文土器拓影图(2)

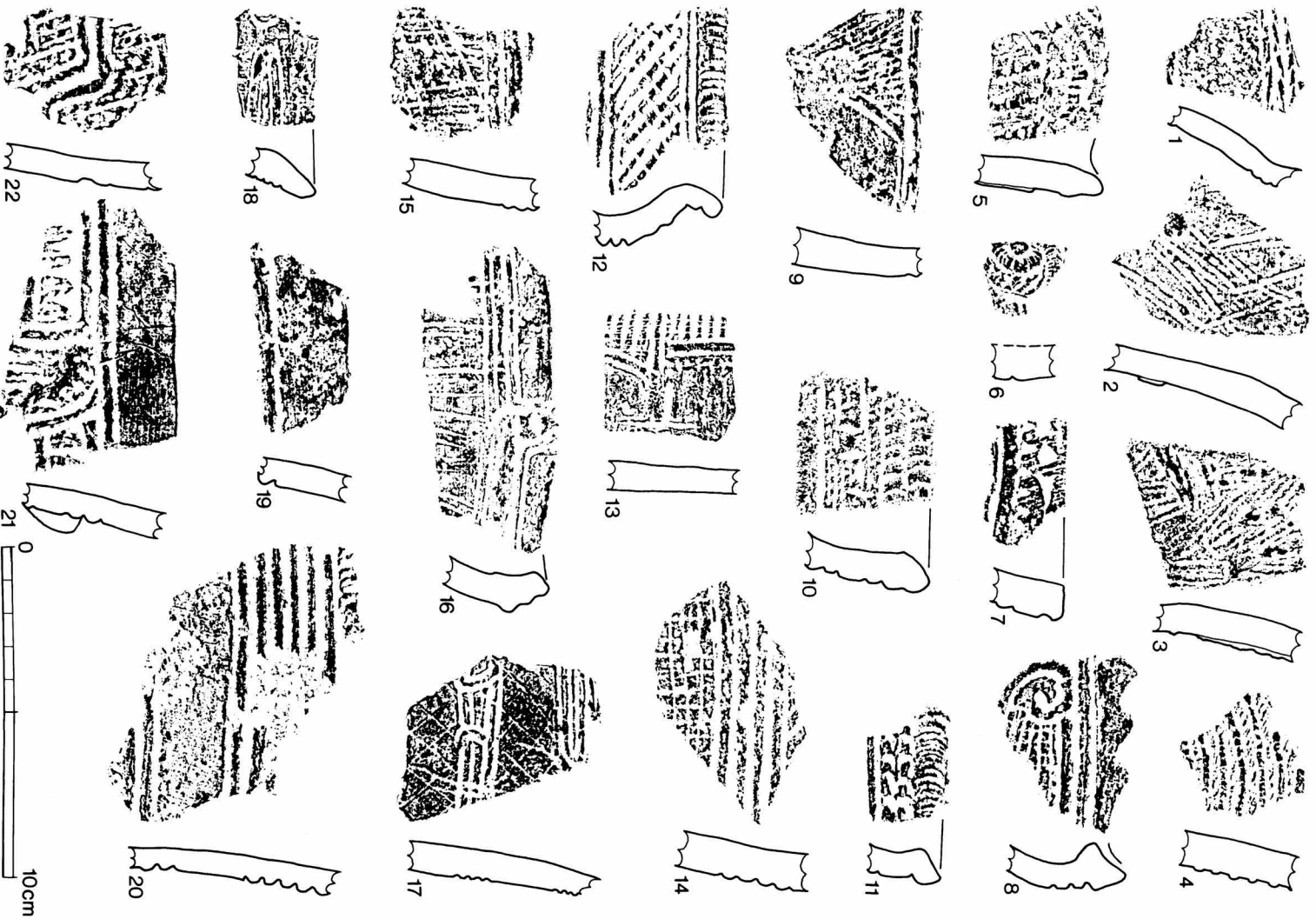
面は横方向の調整仕上げにより平滑化している。9は内面に条痕があるが、外面のものは不明瞭である。10は内面に横方向の細い条痕があり、外面の条痕は器面が荒れていて不鮮明である。11はわずかに屈曲する胴部の破片で、外面に縦方向の条痕があるが、胎土に砂粒を多く含んでおり、内面は荒れていて調整痕は確認できない。12は外面に横方向のかすかな調整痕が観察できる。13はやや外反する口縁部の破片で、口唇上には斜方向の連続押捺がある。外面には横方向の条痕が見られる。以上これらの早期の土器は、混合教室棟調査区北東寄りの傾斜地のグリッドから、図示しなかったものも含め30点が出土している。こうした出土状態は、段丘平坦部が削平され、傾斜地の包含層が良好に残っていたことにもよると思われる。

前期の土器（第29図）1は口縁部から頸部にかけての破片で、地文の縄文と諸磯b式土器特有の浮線文がある。2は平行沈線文とボタン状の貼付文があり、3は同じく平行沈線文の地文上に貼り付けられた浮線に結節状の連続押引きがある。4は地文の沈線文上に結節状浮線文が貼り付けられている。5は浮線上に連続して押捺が加えられた口縁部の破片である。6には結節状沈線文が渦巻状にレリーフされている。2～4は諸磯C式、6はこれに続く十三菩提式土器であろう。5は中期梨久保式かそれに後続する土器である可能性もあるが、一応ここに含めた。

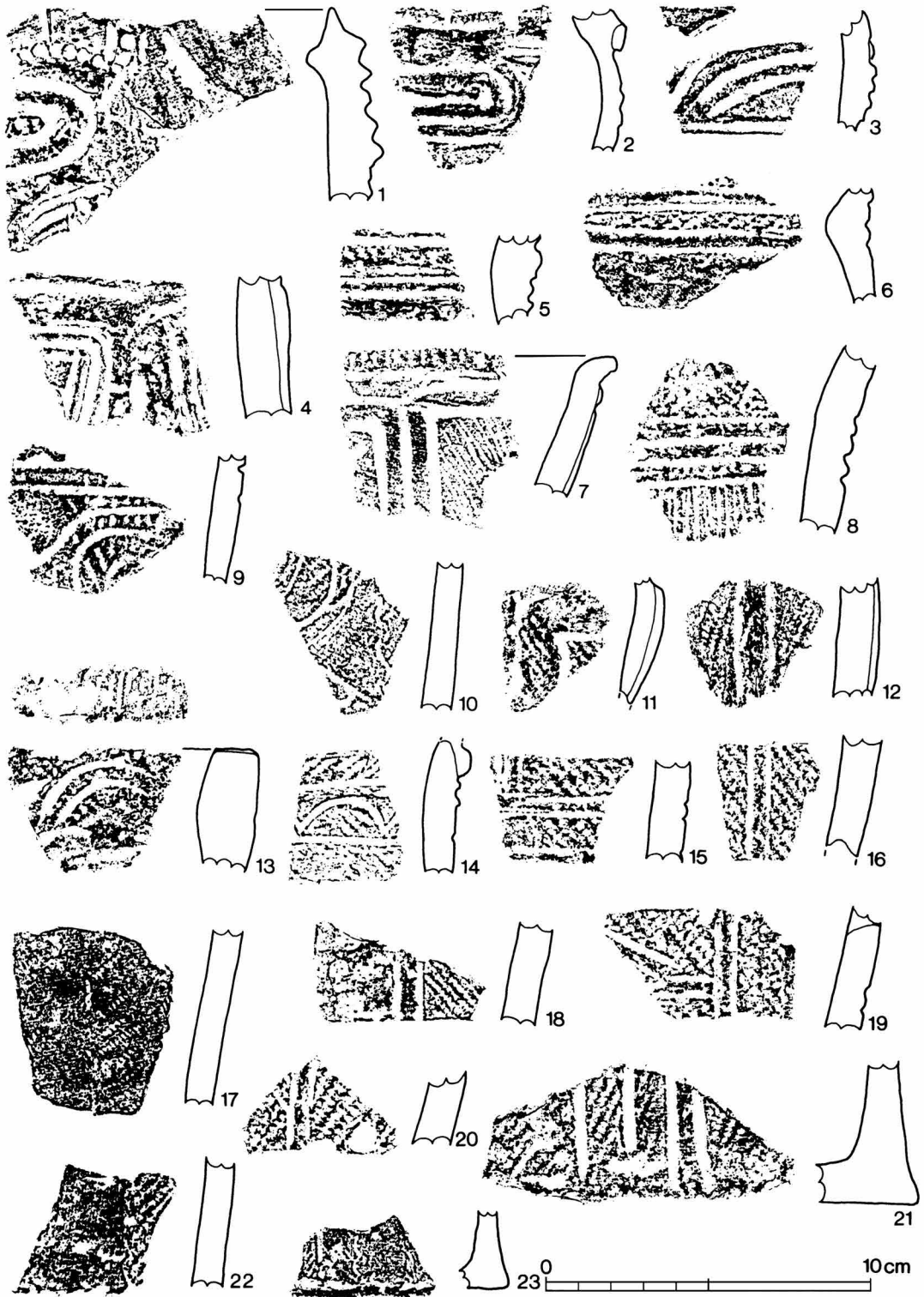
中期の土器（第29図7～12、第30図～32図）第29図7は口縁部に三角陰刻文と鋸歯状文があり、地文に細い条線が施文されている。8は連続した山形状の波状口縁で、半截竹管状工具による半隆起線のわらび手文と格子目状の沈線文が構成されている。9は深鉢の頸部直下の破片で、三角形の区画内を細沈線が充填している。10、11は半截竹管状工具による結節状の浮線文や連続刺突が施文された口縁部破片で、10は細沈線による地文がある。12～14は沈線による格子目状の施文がある土器で、12は「く」の字形に屈曲する口縁部である。15は縦と斜方向の平行沈線がクロスしている。これら7～15の土器は、時間幅はあるものの、中期初頭梨久保式土器に含まれる。

第29図16～18はいわゆる「平出Ⅲ類A」の土器で、16は地文に縄文が施文されている。これらは文様のうえから、「平出Ⅲ類A」のなかでも梨久保式に後続する時期以降に属すると思われる。

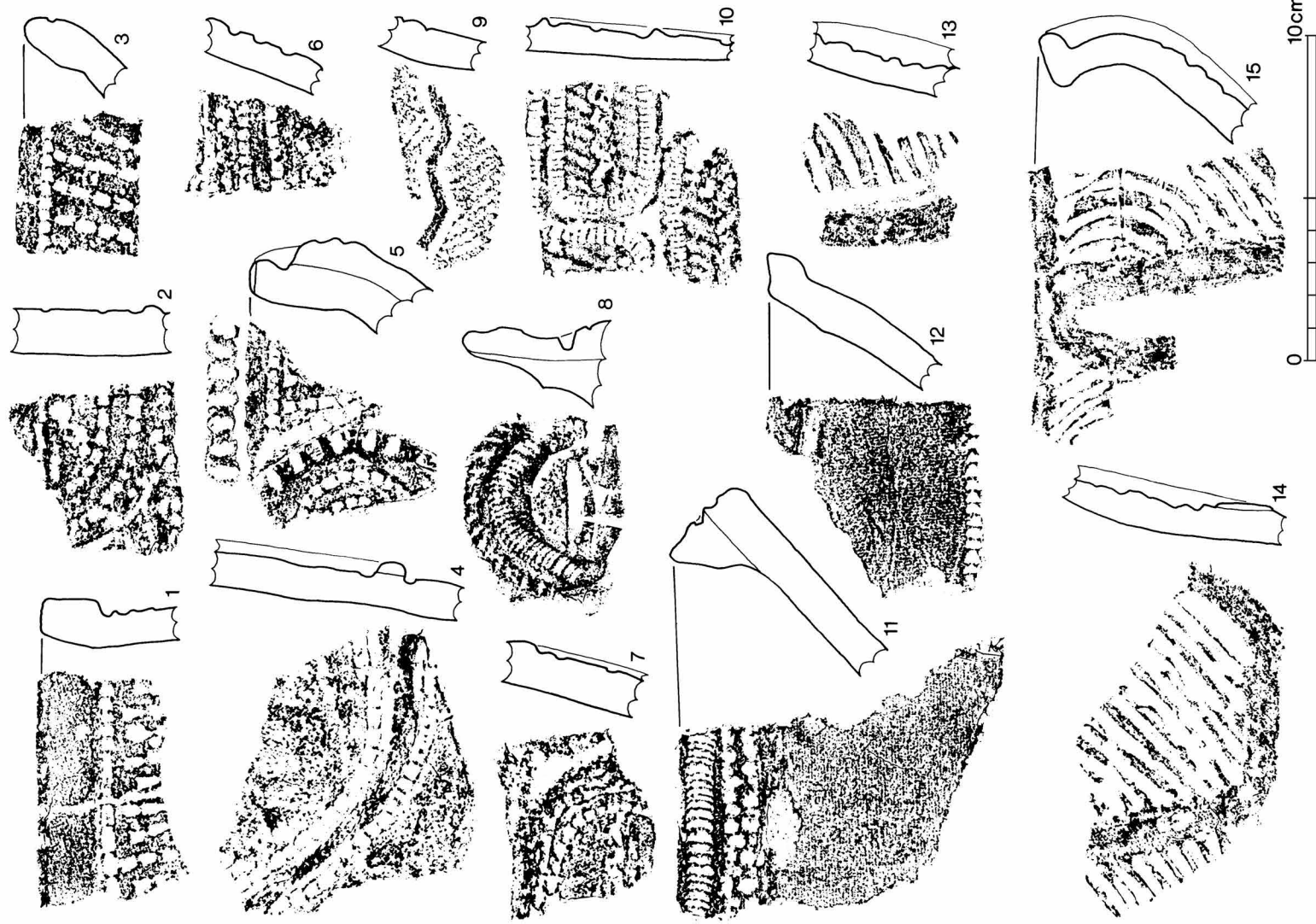
第29図19～22は灰茶褐色のやや薄手の土器で、4点とも同一個体である。21、22には地文として縄文施文が観察でき、22は半截竹管状工具による半隆起線の区画内を沈線が充填している。21は頸部付近の破片で、垂下する隆帯の頂部と横に巡る蓮華状文がある。20は半截竹管状工具による多条化した半隆起線と蓮華状文が見られる。これらは、倒立していない蓮華状文などの特徴から、北陸地方に多く分布する新崎式土器で、当地へ搬入されたものと考えられる。（註8）第30図の土器は主として地文に縄文や結節縄文を用い、その上に沈線や半截竹管状工具による半隆起線、それに隆帯などによる文様がある土器で、刺突を行ったものもある。1の口縁部には隆起帯による区画と刺突文があり、隆帯は一部剥落しているが上へのび、恐らく4単位の波状口縁の頂部に至っていたと思われる。口唇部内側には隆起部が横に巡っている。2、3は胎土に砂粒や雲母が多く含まれた口縁部の破片で、沈線や半隆起線、貼付隆帯などが見られる。4は胴部が膨らむ深鉢の頸部付近の破片で、隆帯と半截竹管状工具による半隆起線がある。5、6、8は頸部の破片で、半隆起線による区画内に細沈線の充填が行われており、口唇上には連続した浅い刻目があ



第29図 遺構外出土縄文土器拓影図(3)

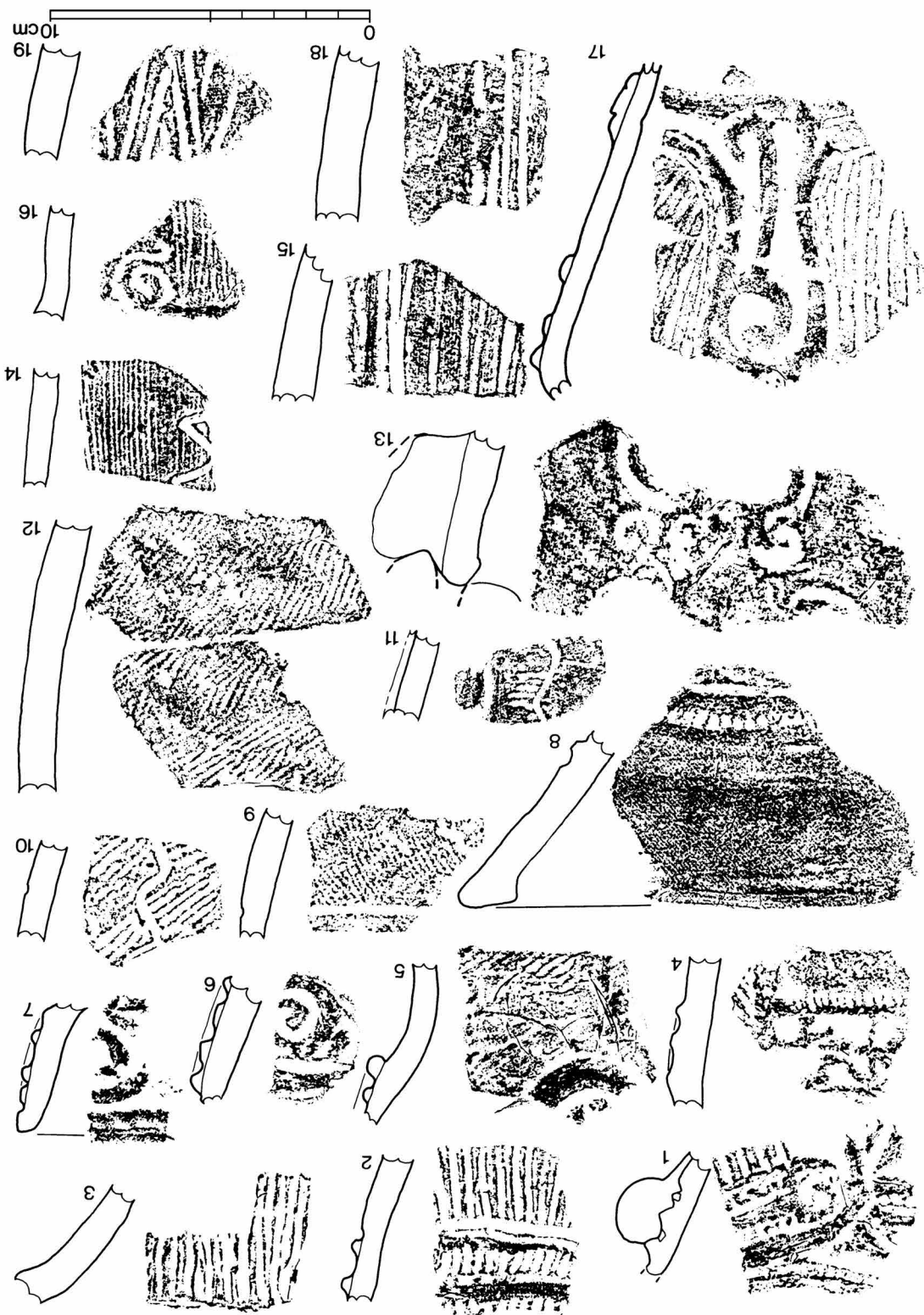


第30图 遺構外出土繩文土器拓影图(4)



第31図 遺構外出土縄文土器拓影図(5)

第32图 遺構外出土繩文土器拓影图 (6)



る。9は胎土に砂粒を多く含み器面が荒れており、浅い沈線と刺突が加えられている。13は肥厚した口縁で、縄文地文の上に沈線による施文があり、口縁部は一部剥落しているが小波状をなすと思われる。10～12、14～23は縄文地文の上に沈線や半截竹管状工具による平行沈線文が構成されているもので、10、17、22、23、には結節縄文が観察できる。14の隆帯上にも縄文施文が行われている。21、23は断面「L」字形の底部片である。これらの土器は胎土に雲母の微細片や砂粒が多く含まれるものがある。梨久保式に後続する九兵衛尾根Ⅱ式土器に相当すると思われる。

第31図1～7は結節状沈線と隆帯による施文を特徴とするもので、胎土には多量の砂粒と雲母の微細片が包含されている。1～3及び6は結節沈線のみが見られ、4、5、7は隆起帯に沿って結節沈線が巡っている。5の隆帯状には連続して押捺が加えられている。また10は深鉢の筒形の胴部片で、胎土に砂粒を多く含んでいる。縄文地文上に結節状の沈線による連続した区画を行い、内部に蛇行する結節沈線を引いている。これらは、貉沢式土器に相当するものである。

第31図8は口縁部の突起状の部分で肥厚しており、半截竹管状工具による連続した爪形状の浅い凹線文と、三叉状の陰刻などがある。9は縄文地文上に半截竹管状工具による半隆起線を横に巡らせており、深鉢の頸部付近の破片である。8は藤内式期以降の土器だが、9は時期を明らかにすることはできなかった。

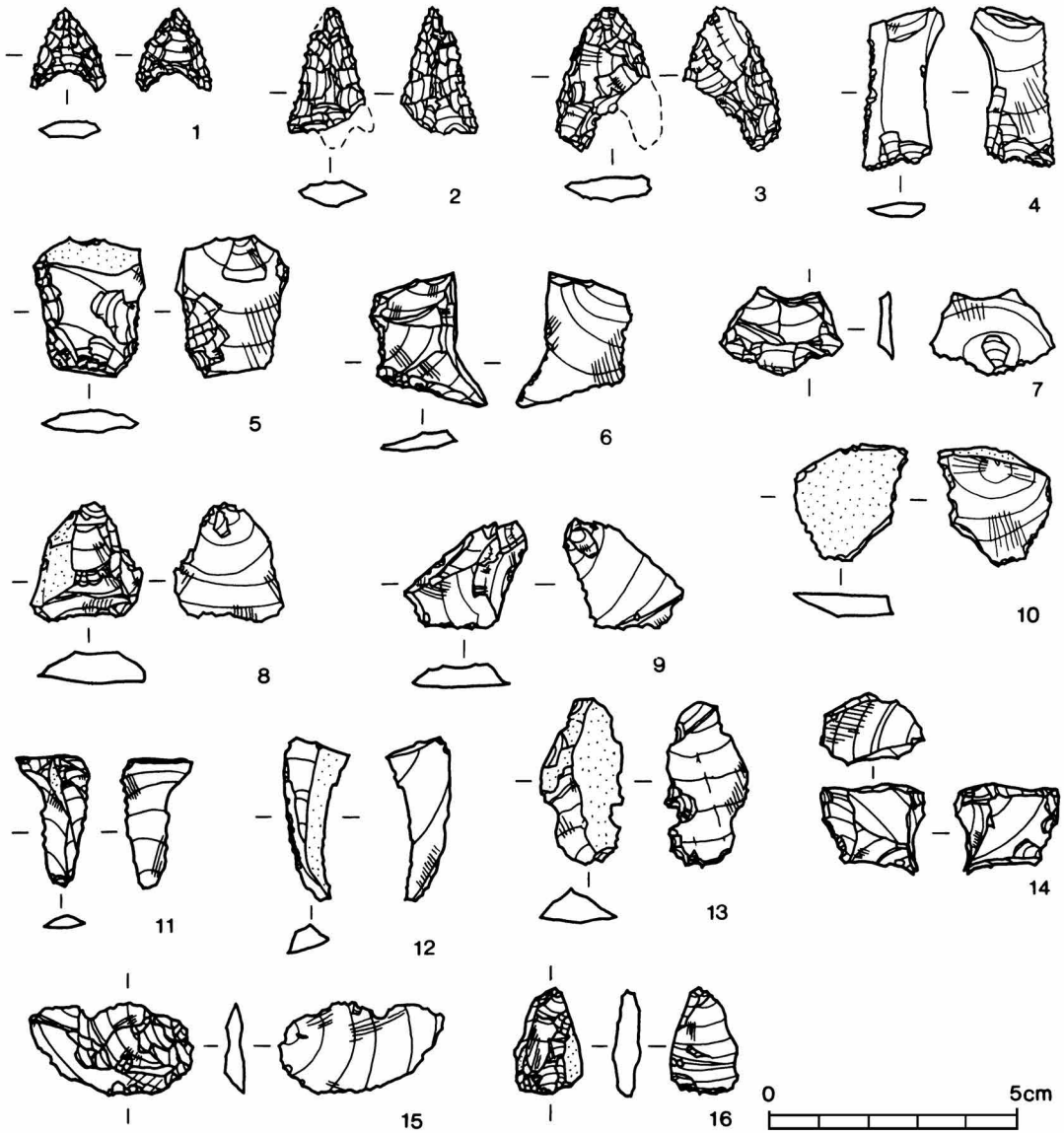
第31図11は浅鉢形土器の口縁部で、口縁外面に半截竹管状工具による連続爪形状の浅い凹線と、2本の太い沈線に沿って円形刺突が加えられている。内面はていねいに平滑化して仕上げている。

第31図12は内湾気味に外へ開く深鉢の口縁部で、口唇部を肥厚させ、頸部と思われる破片下端には連続して爪形状の施文が行われている。13～15は太い隆帯と沈線の特徴とするもので、同一個体と思われる。15の口縁部は沈線が同心円状に引かれており、口唇部は隆帯により肥厚している。13～15は中期後葉の曾利Ⅰ式の土器であろう。

第32図1～3は沈線の施文や貼付隆帯があり、4～7はソーメン状あるいは太い隆帯の貼付けと縄文の施文が見られる。8は外へ開く無文の口縁部で、頸部に半隆起帯と、連続する刺突が行われている。13は深鉢の口縁部で、口唇上の突起と口縁部の突起をつなぐ中空の取手状の部分である。9～12は縄文地文の上に沈線による施文と、隆帯の貼付けなどがある。4、16は縦方向の条線の上にやはり沈線による文様があり、10、11と同様に垂下する蛇行沈線文が引かれている。17はキャリパー状に開く深鉢の口縁部で、貼付隆帯と沈線による文様が構成されている。15、18、19は沈線による施文があり、19は綾杉状に構成されており、18は沈線が一部短線文化している。これらの土器は曾利Ⅱ～Ⅲ式期ころに属するものと考えられる。

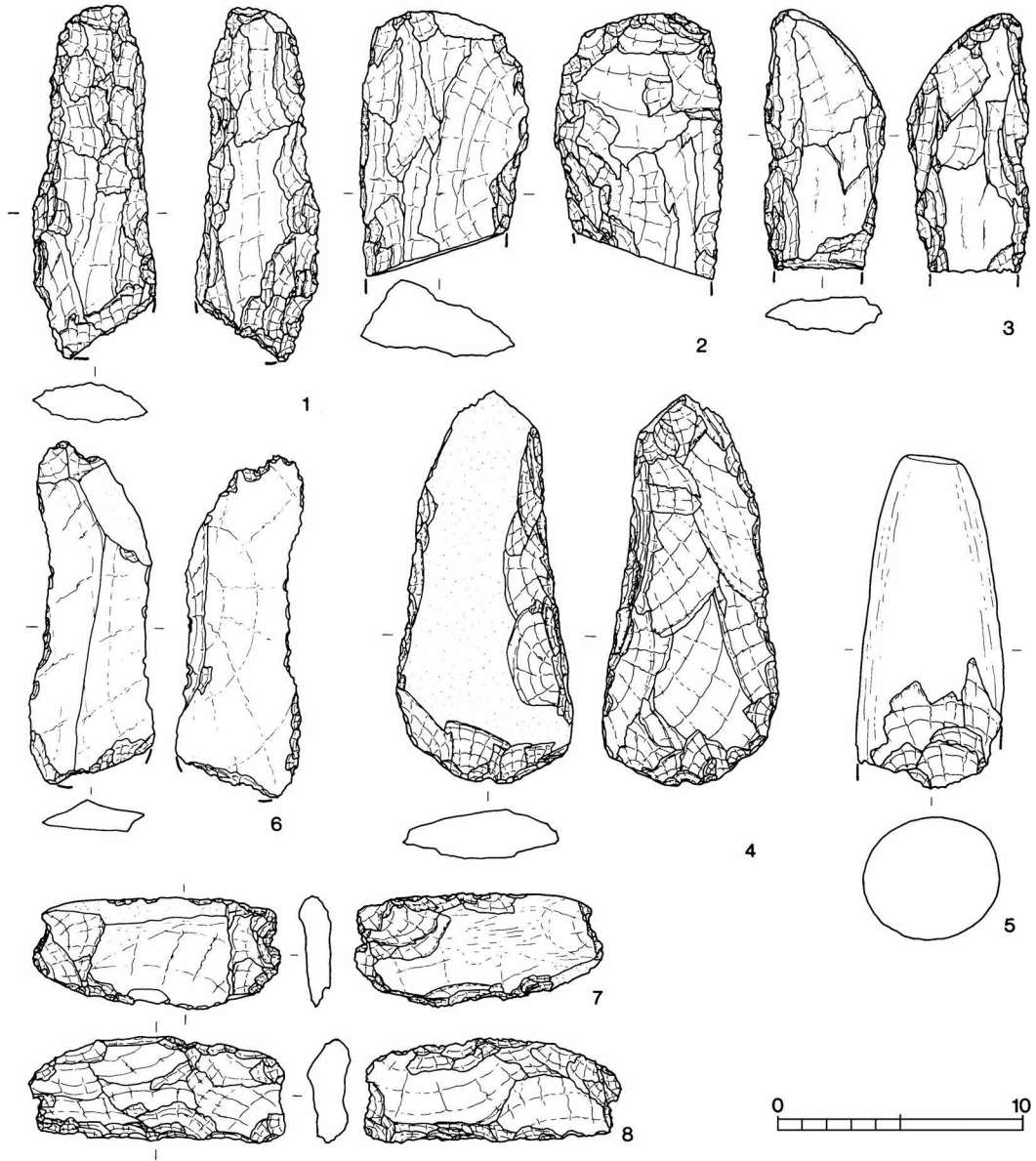
なお、これら遺構外の前期、中期土器は、包含層の状態が比較的良好であった混合教室棟地区内北東の傾斜地の各グリッドから出土している。

石器（第33図、34図）第33図1～3は石鏃で、いずれも空堀内の覆土から出土している。2がチャートを用いており、他は黒曜石製である。4～6は小剥離痕のある剥片で、7～13及び15は刃こぼれ様の微細な剥離が認められる剥片である。これらは混合教室棟調査区北東の各グリッドから出土した。



第33図 遺構外出土縄文時代石器実測図（1）

第34図1～4は打製石斧で、4以外は部分的に欠損している。1、3の両側縁には着柄用と思われるわずかな挾がある。2は部厚いフレイクを用いたもので、図示した上端には一部自然面を残すが、刃部の先端である可能性がある。3も図示した上端にわずかな自然面があるが、使用によると思われる磨耗が観察され、刃部と考えられる。6は薄い横長の剝片を素材としており、両側縁にわずかな刃こぼれ様の剝離があるが、先端の刃部は欠損している。5は乳棒状の磨製石斧と思われる。刃部は欠失しており、基部の頂部には整形とは異なる磨痕が観察できる。1、2、4、5は第1号配石址の礫として用いられており、6は空堀内の覆土から、3は重機による排土内か



第34図 遺構外出土縄文時代石器実測図(2)

ら出土している。第1号配石址は後述するように埋没した空堀内の上面に構成されている遺構で、これらの石器とは時間的に隔たりがあるため遺構外の遺物として扱った。

7、8は長軸の両端に抉のある石器で、背部に刃潰し加工を行っており、7の表裏の一部にはわずかな磨痕が観察できる。空堀内の覆土から出土している。弥生時代の打製石包丁と思われるが、今回の調査では弥生時代の遺物は他に土器細片1点が出土しているにすぎず、この項で記述した。なお1～4、7、8はいずれも粘板岩を用いており、5は輝緑凝灰岩を素材としている。

(赤羽)

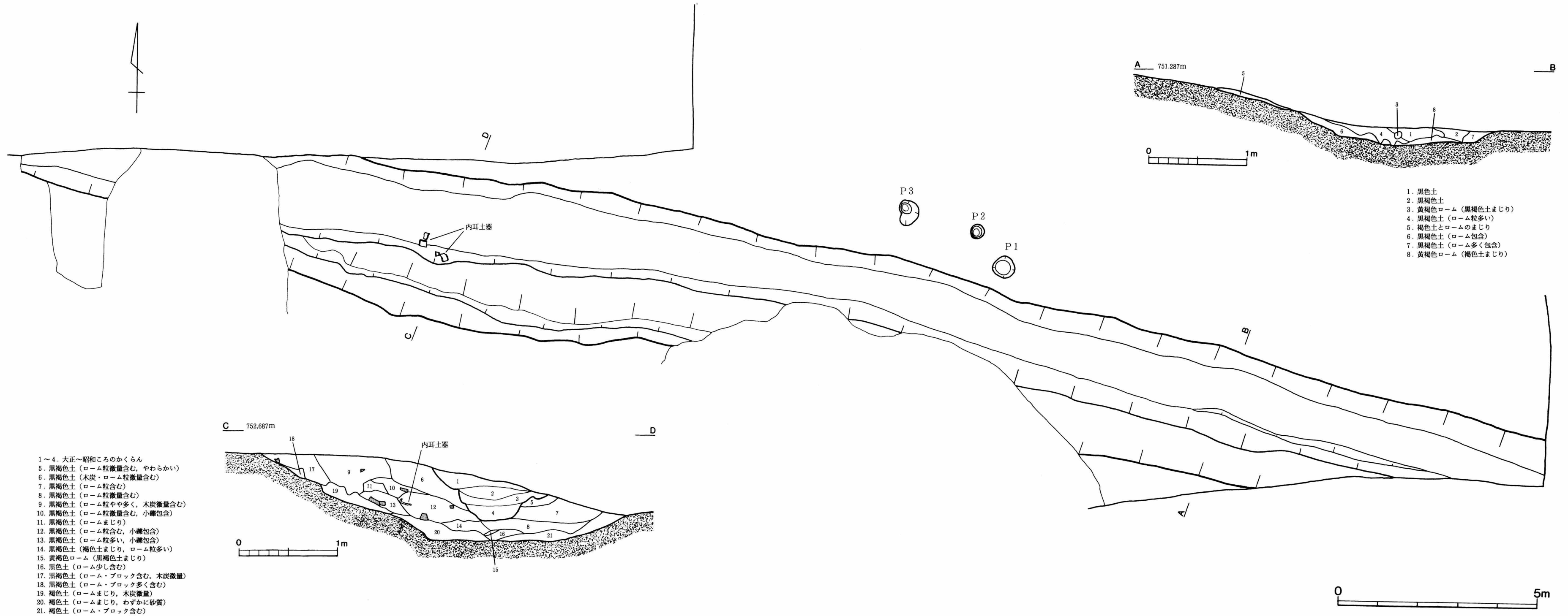
第2節 歴史時代の遺構と遺物

1. 第1号空堀

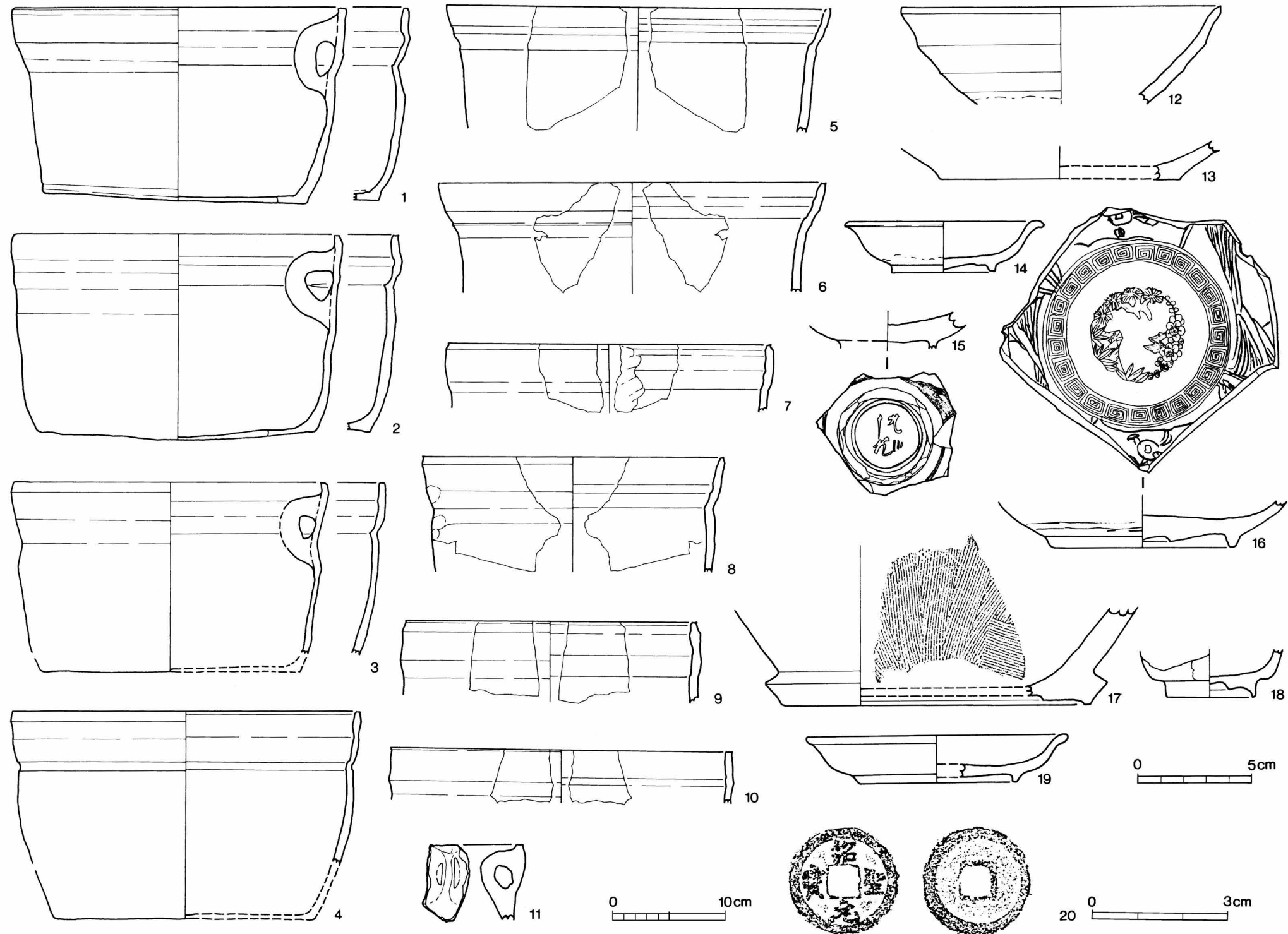
混合教室棟調査区内のジョレンがけによる遺構確認作業の早い段階で溝状の落ち込みが認められ当初溝状遺構としたが、内部の掘り下げに伴い第1号空堀と呼称した。調査区南東コーナーから西へ調査区内を斜にのびているが、P～U及びZ～イ列にかかる部分は旧校舎などの建設により失われている。堀上端の幅は約3.5～4 mだが、削平が著しいため、堀構築時より全体の幅は狭くなっていると思われる。堀の断面形は南と北の壁とも勾配は緩やかである。底はほぼ平で、南壁は立ち上がり部分で2回屈曲し、上部で段を持っている。北側は明瞭な屈曲はなく、緩く立ち上がる。南壁の残存高は最も深いところで90 cm弱であるが、北壁は10～30 cmほどである。北壁が低いのは、当時の自然地形がこの堀の付近から北へかけて浅い谷状に入り込んでいたためと思われるが、こうした地形を利用している点から、この堀の南側の防備のために設けられた空堀であると考えられる。土塁は認められなかったが、堀北側のQ-22、R-23グリッドには柱穴状のP1～P3がある。ピット内の土層の状態から、堀と時間的に近い遺構と思われる。(第22図)

堀内部の埋没土は、各土層ともローム粒がまじり、わずかに木炭を包含しているものもある。また、大形の礫の出土は少なく、小石程度の礫を包含する土層があった。なお、南壁寄りの最下層第20層はわずかに砂質をおびていたが、水堀であったとするものではない。また、堀の底のレベルは、最も高いウ-23グリッド内との落差は約3.4mである。

空堀内から出土した遺物は多くなく、主として内耳土器がある。内耳土器は第34図1～11以外に細片まで含め30片があり、これらの殆どは空堀内埋没土からの出土である。特にV～Z列及びJ～M列の空堀内に集中して出土しているが、これらの地点はかくらんが及んでいなかったためであろう。第36図1～8、10～11はいずれも空堀埋没土からの出土で、1～3は全体が復原可能となったもの、4～8、10は図上で器形復原可能となった土器である。1、2、5、6、7、10は土層断面図C-D付近から出土している。1は口径29 cm、器高17 cmで、両耳部とも残っていた。口縁部の内外面ともナデ痕が認められ、特に内面は強く押し整形している。同部の内外面ではナデ痕は不明瞭で、器面は凹凸が認められ、内面の仕上げ調整後貼付けた耳部付近は貼り付けの際の指痕が残っており、器壁は外へ押されている。底部外面は火熱により著しく焼けており、表面は剝落している。また胴部外面には全面に煤が付着し、黒色を呈する。2も1とほぼ同様の断面形状と仕上げ調整が見られるが、底部は下へ張っている点が目立つ。5、6は1、2と異なり、口縁部がわずかに内湾しながら外へ開く器形で、口縁部内面のナデ痕は明瞭である。胴部外面には上部を除いてナデ痕は認められず、内面には横或いは斜方向のナデ痕が観察できる。器外面は煤の付着が著しい。6も5とほぼ同様の器形だが、胴下端部の径がわずかに大きくなる可能性もあるものの、破片のため断定はできない。7、10は口縁部の細片で、全体の器形を判断



第35図 第1号空堀実測図

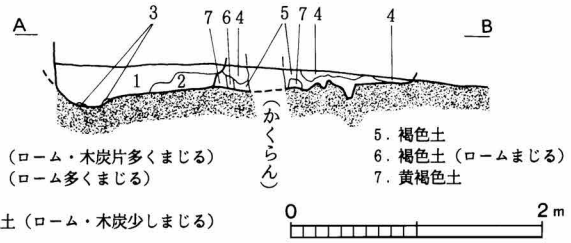
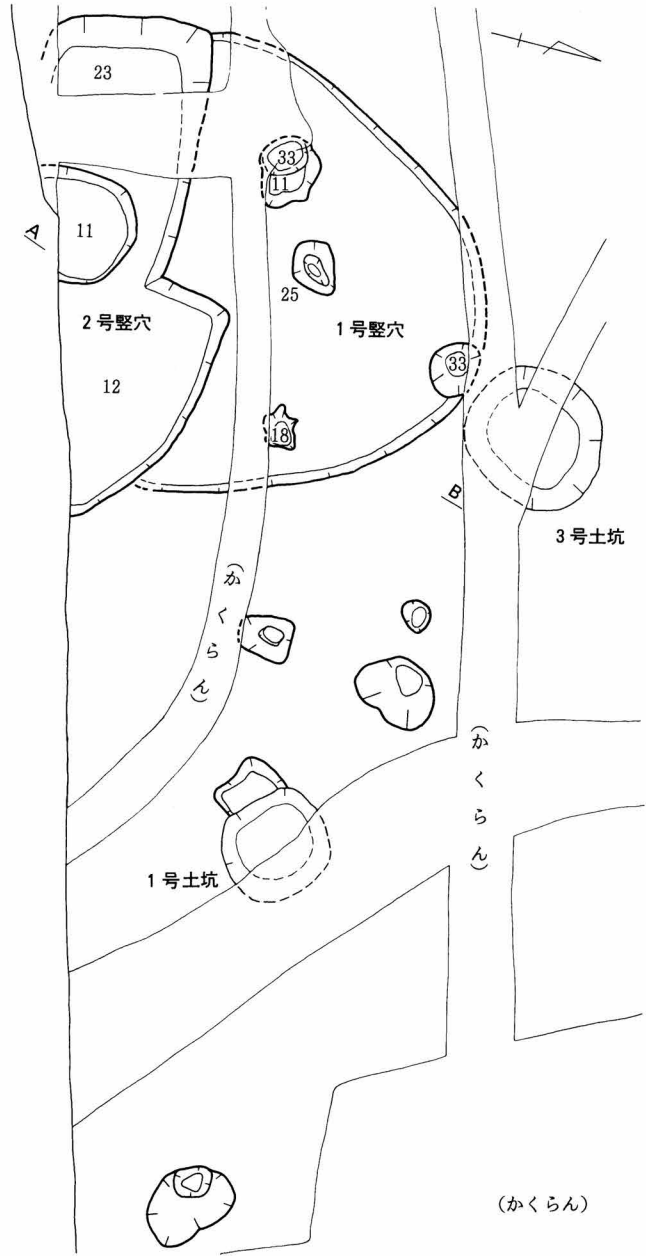


第36図 第1号空堀及びその他出土遺物実測図

することは危険だが、3、4に近いものと思われる。7は耳部付近の破片で、内面には耳部取付けの際の調整痕がある。3、4、8は調査区東端に近いL-20、M-20グリッドの空堀内埋没土から出土しており、(図版10-2)、断面形態は、3、4は2、3に類似するが、口縁部内面から外へ押すような強いナデによる整形、調整はない。4の内面には横及び斜方向のナデ痕がある。3、4とも外面は煤の付着が著しい。8は5、6と同様に口縁部が外へ開く形状だが、頸部以下の断面形は3、4に近く、頸部がしまって胴部がやや張る形となる。耳部取付付近の破片で、その調整痕がある。内面には斜方向のナデ痕が見られる。11は耳部の破片で、調査区東端のJ-20グリッドから出土している。

内耳土器以外には、13、14の陶器が出土している。13は内面に鉄釉が見られる底部片で、外面には煤が付着している。14は轆轤痕不明瞭な灰釉の端反皿で、16世紀前半代のものであろう。Y-23、Z-23グリッドの空堀埋没土の中から出土している。

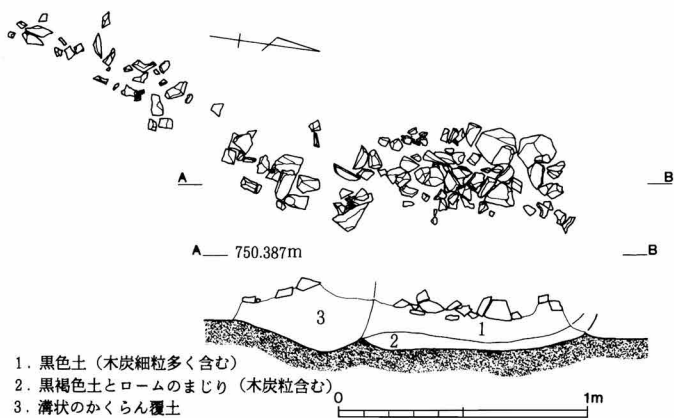
なお、遺構外の出土で空堀の年代と関係ありそうな遺物として、第36図12、20がある。12はO-26グリッド内から出土した灰釉の平碗で、復原口径14 cmとなる。15世紀代の可能性がある遺物である。



- 1. 黒色土 (ローム・木炭片多くまじる)
- 2. 黒色土 (ローム多くまじる)
- 3. 焼土
- 4. 黒褐色土 (ローム・木炭少しまじる)
- 5. 褐色土
- 6. 褐色土 (ロームまじる)
- 7. 黄褐色土

第37図 第1号及び第2号整穴実測図

20は北宋銭「紹聖元寶」で、初鑄は1094年である。15、19はY-23、Z-23グリッドから出土しており、15は染付の高台付磁器、19は淡青色の青磁小皿である。



第38図 第1号集石址実測図

15は国内産とすれば江戸時代に属するものであろう。
19は江戸時代以降の可能性もある。(赤羽)

第3節 その他の遺構と遺物

時代が判定できない遺構として、第1号、第2号竪穴、第1号集石、第1号配石がある。第2号竪穴は複雑に遺構が重複した可能性があるが、覆土はほぼ同質で、一部に多量の木炭が充満していた。第1号竪穴は浅く、床面も不安定で、2号とともに時代を判定できる遺物は出土しなかった。なお、付近には不規則なピット8カ所があるが、覆土は軟質のものであった。

第1号集石はL-20、L-21グリッド内にあり、一部かくらんを受けて礫も認められた。礫間から黒曜石片が出土しており、縄文時代に属する可能性もある。第1号配石はU~W-21グリッド内の空堀埋没土上面に検出された。中小の礫がいくつかにまとまって散在するが、遺構の可能性は低い。礫には縄文時代の石斧がまじっており、礫間からは、第36図16の上絵金彩の鉢、16、18の染付磁器片が出土した。17は浄化槽区内から出土した明治以降の播鉢片である。(赤羽)



第39図 第1号配石址実測図

第4節 部室棟建設予定地の遺構と遺物

今回調査の対象となった地区は、旧体育館のあった場所で、その後テニスコートに造成されていた場所である。この跡地に部室棟を建設するにあたり、発掘調査を行ったものである。調査は第40図に示したとおり、東西25 m、南北13 mの区画内を実施した。

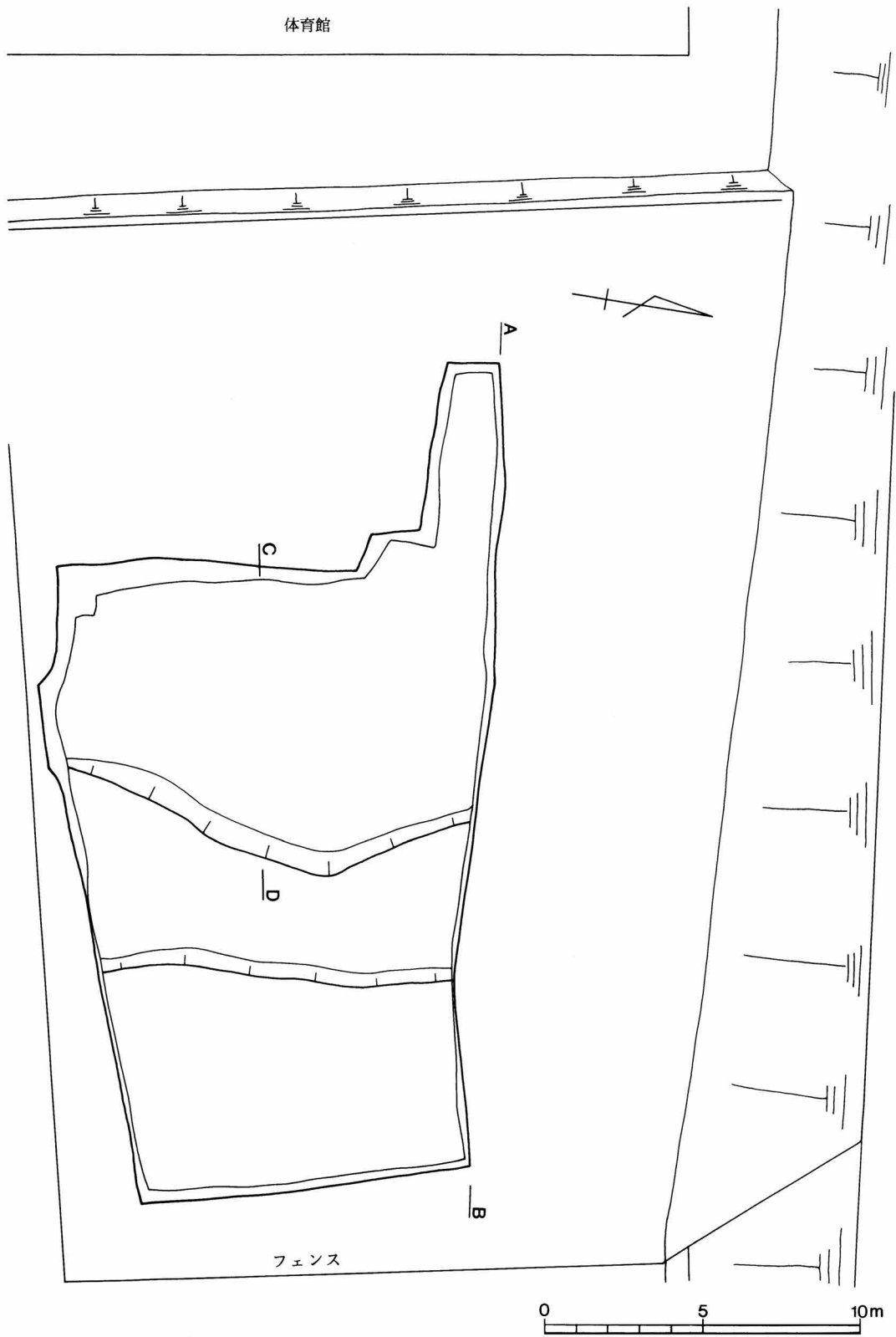
この箇所は、旧体育館が建設された時点で埋土が行われていることがわかっていたので、重機を投入して埋土部分の排土を行った。埋土から下層は手掘りによりローム層上まで掘り下げ、遺構確認を行った。

調査結果は次のとおりである。

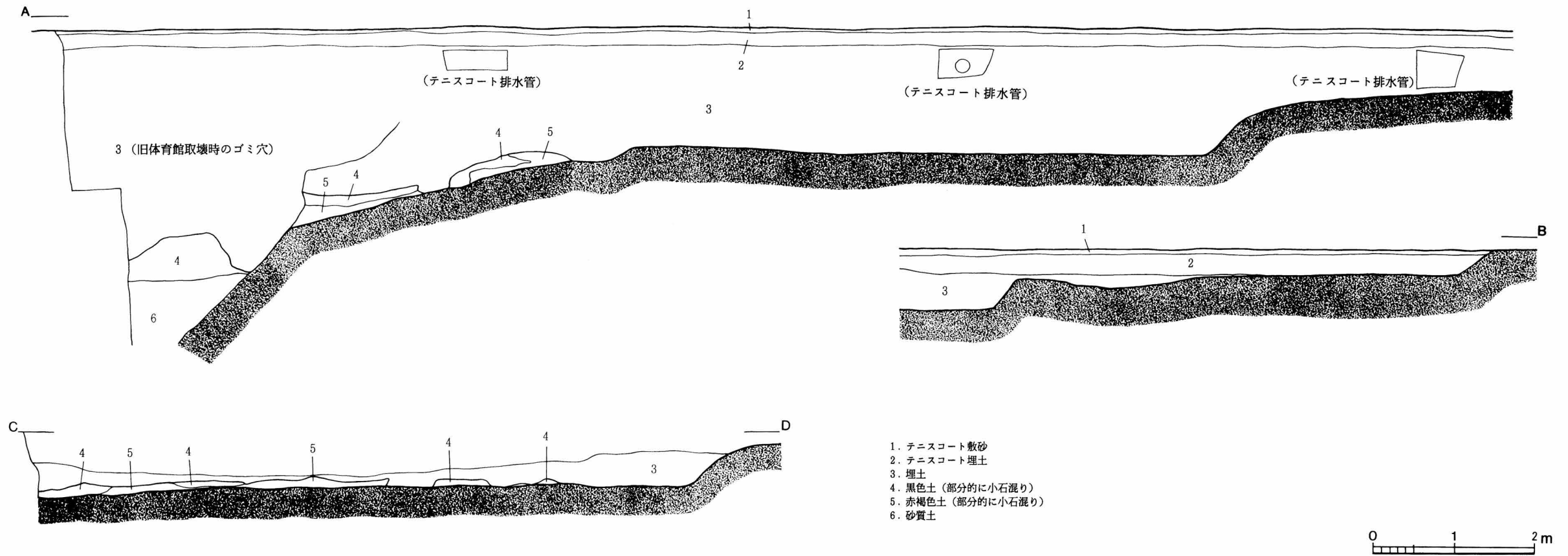
1. 調査箇所西寄りの黒色土層及び黒褐色土層上に、径6～15 cmの角礫による集石が南北2.5 mにわたって出土した。またこの近くに、径10～20 cmの角礫による集石が発見されたが、両集石とも遺物を伴わなかったため時代を判定することはできなかった。
2. 調査区内の2カ所に段が認められたが、これらが何を意味するものか発掘の段階では究明することができなかった。
3. 調査区A-B断面のとおり、調査区内北西隅に落ち込みが認められたため、幅2～3 m、長さ6 mのトレンチ状に拡張して調査を行った。その結果ローム面が西側へ41度の急傾斜をもって落ち込んでいることが判明したが、土層は埋土されたと考えられる層で、かなりの深さが認められたため、それ以下への掘り下げは打ち切りとした。

この西側への落ち込みは、断面の状態から自然の面とは考えられず、この西5 mのところを西天竜用水路の暗渠が通っているため、西天竜用水路工法の法面とも思われるし、一方城郭の堀であった可能性も考えられる。

4. この調査区内の出土遺物は、縄文時代中期の土器片1点、土器の表面が磨滅している時期不明の破片1点のほか、陶磁器として、徳久利2点、甕の底部片1点、茶碗の破片5個体分、土瓶の蓋1点などがある。そのほか鉄片5点が出土したが、時期等不明である。 (友野)



第40図 部室棟建設予定調査区全体図



第 41 図 部室棟建設予定調査区土層断面図

第V章 発掘調査の成果とまとめ

第1節 歴史時代の遺構と遺物について

1. 中世の遺物と年代

今回の調査では内耳土器（鍋）を中心に中世の遺物が空堀などから出土したが、それらの遺物の年代を比定することが、天白城跡^{あくと}と伝えられてきたこの遺跡の性格をさぐることにつながると思われる。

内耳鍋は器形復原ができたもの3点、図上で径が復原可能となったもの7点がある。これらは口縁部の形態などから、以下の様に分類できそうである。しかし、1遺跡内の限られた点数を扱っているため、分類としては危険な作業であることを認識しておきたい。

県内の内耳土器の分類、編年については、茅野市御社宮司遺跡、佐久市大井城跡などの調査で行われてきている。（註9）基本的には鍋型（A型）、浅鉢型（B型）、ほうろく型（C型）に分けられ、器形などの特徴からこれらは更にⅠ～Ⅲに分類できるとしている。ここでは次のⅠ～Ⅳ類に分けて記述する。

Ⅰ類 第36図5、6は、御社宮司遺跡の分類に従えばAⅠ型に近いもので、外へ開く口縁部が特徴で、頸部以下の胴部がやや張る可能性をもつもの(6)と、胴部が張らないと思われるもの(5)がある。AⅠ型の内耳土器は、近くでは駒ヶ根市青木城遺跡A地区縦堀内でまとまって出土しており、天目茶碗の破片等陶器も伴出しているが、時期を明らかにしていない。（註10）御社宮司遺跡の報告では、AⅡ型に先行する15世紀初頭ころと考えている。

Ⅱ類 第36図8は口縁部は外へ開くが、5、6ほど強く外反しない。頸部が「く」の字状に屈曲している。

Ⅲ類 第36図3、4は口縁部が直立に近く、頸部のくびれがある。

Ⅳ類 第36図1、2は3、4に似るが、口縁部内側を外側へ向って強く押してナデ整形しているため、頸部から口縁にかけて「く」の字状の屈曲がかなり目立つ土器である。

なお、破片が小さいため断定できないが、7、9、10はⅢ類に分類できるかもしれない。

次に器面の調整痕を観察すると、Ⅰ～Ⅳ類とも整形についてはほぼ共通していることがうかがわれる。口縁部内面はヘラ状具を用いて回転して横ナデをしており、仕上げは丁寧である。胴部内面は口縁部内面と同一の工具によって、横方向や斜方向に軽いナデ調整をしており、不連続な調整痕が見られる。しかし、頸部内面の稜付近は、やや削り気味に横方向の調整をしている。3～6、8はほぼこうした内面調整で共通するが、1、2の胴部内面は不明瞭なナデ痕がわずかに観察できるだけで、口縁部内面の整形と同一工具を用いたかどうかはわからない。外面については各個体とも煤の付着が著しいため観察は容易ではないが、内面にくらべると仕上げはラフである。口縁部外面は回転して横ナデしているが、胴部は指オサエ等によって仕上げられており、器

面の凹凸が見られる。胴下半部に横ナデをしている個体もある。底部の状態が観察できる個体は少なく、外面は著しく焼けていてわからないが、内面には同心円状のナデ痕がある。

なお調整仕上げの順序は、観察が容易な口縁部～胴部の内面や口唇、それに口縁部外面に限れば、口縁部内面→胴部内面の順で、面取り状の口唇は広い板状のもので均一に圧迫して整えており、或いは土器を伏せている可能性もある。口唇部と口縁部外面の仕上げ順は、口唇部を後に行う場合が多い。

以上、内耳土器について主として口縁部に着目した断面形態、器面の調整と仕上げ順について観察したが、胎土の状態については詳しく行っていない。

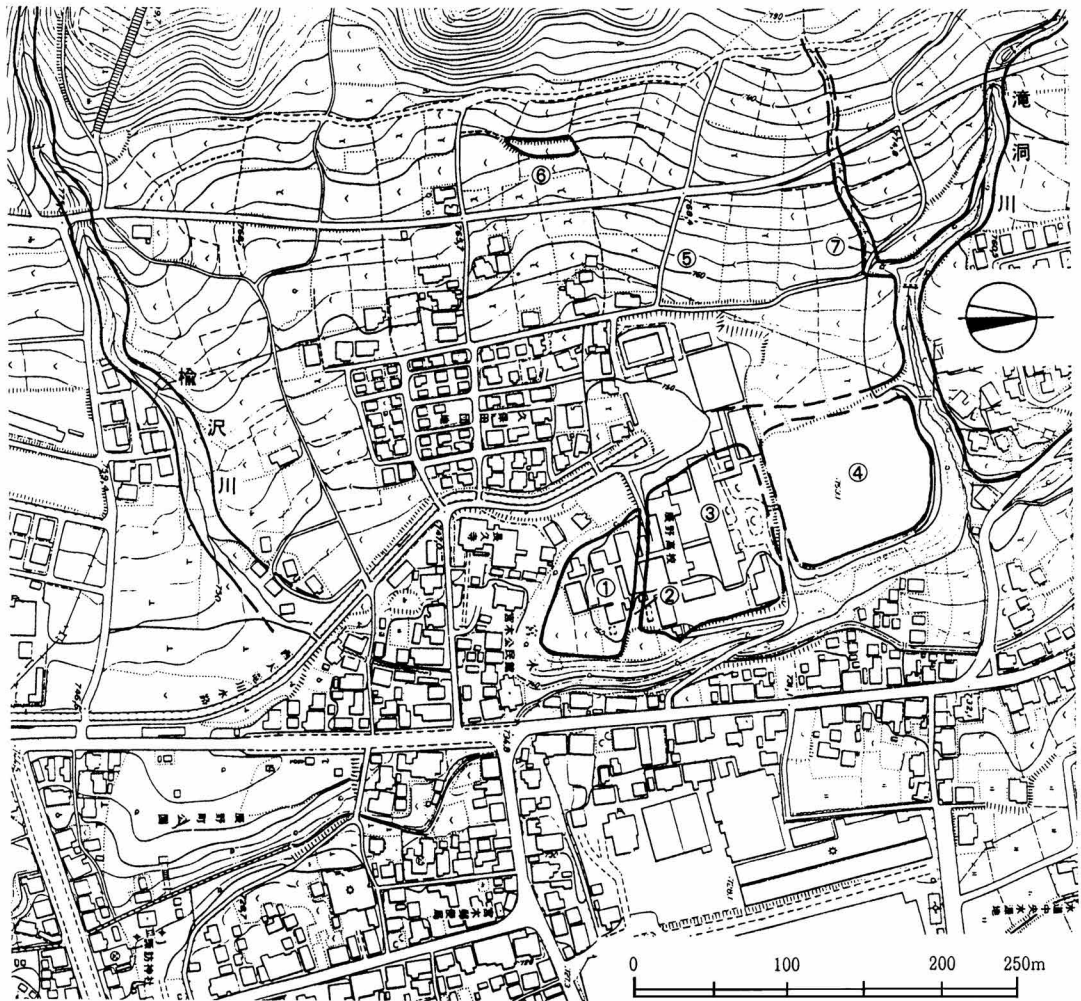
さて、Ⅰ～Ⅳ類ははたして時間差によるものか、或いは製作地の地域的な差異によるバラエティーなのかは難しい課題である。Ⅰ類は御社宮司遺跡の分類に従えばAⅠ型に近似することは述べた。Ⅱ～Ⅳ類はAⅡ型に近いと思われるが、AⅢ型に似るものもある。御社宮司遺跡の報告では年代について、AⅠ型を15世紀初頭、AⅡ型を15世紀前半から中葉、AⅢ型を15世紀末から16世紀前半に比定している。今回の調査で出土した陶磁器片は少なく、わずかに第36図12及び14がこれらの内耳土器と年代を同じくしそうな遺物である。12の灰釉平碗は15世紀中葉～後葉ころ、14の灰釉端反皿は15世紀後半～16世紀前半ころと考えられる。(註11) 従って、微視的に見れば内耳土器とこの2点の陶片が必ずしも伴出しているわけではないが、およそ15世紀中葉～16世紀前半という年代幅を与えることができるのではないだろうか。

2. 中世の遺構について

今調査で出土した遺構の内、伝えられる「天白の古城」と最も関連しそうなものが、第1号空堀である。(第42図②) この遺構は一部分を調査したにすぎないが、扇状地端部で現在の辰野高校敷地となっている南北に長い半島状台地を、ほぼ東西に横切る形で設けられたもので、これによって①と③が区画されている。②と同様な堀は、今回の部室棟調査区内からはそれらしき遺構は発見されていないが、現在の正門から正面玄関へ通じる道路に沿ってグラウンド寄りに存在していた可能性もある。一方、①から③にかけての西側は、南から小谷状に凹地が入り込んでおり、③から④にかけては西天竜水路暗渠の埋設により旧地形はかなり改変を受けているが、山麓からの扇状地と④の間には大規模な溝が存在していた可能性がある。部室棟調査区内西端には、西へ向かって落ち込む箇所が確認されており、或いはこれが①、③、④と連なる連郭式の部分と西方扇状地とを切断する堀であったとも考えられる。

上の山遺跡地内の遺構については以上だが、今回の調査箇所から西方300mの地点には、小字「要害」と呼ばれるところに⑥の方形状の土盛りがある。(図版20-1) また上の山遺跡の北には滝洞川があり、グラウンドの西80mの地点の右岸には、⑦の堀状の溝が認められる。(図版20-2、図版21-1) この溝は滝洞川へ接続する手前で鉤の手に曲っており、堀である可能性が高い。北の滝洞川に対し、南側には「要害」を中心として対照的な位置に楡沢川がある。扇状地であるため、ふたつの川とも表面に流水は見られないが、深いところでは数メートルの谷となっている。

ところで、⑦及び滝洞川と、楡沢川によって挟まれた一帯は、久保田団地北寄りの付近を中心として楕円状に東へ傾斜しているが、昭和60年12月に発掘調査が行われた⑤の地点では、中世の竪穴状の遺構や柱穴状のピットが出土している。内耳土器や北宋銭なども発掘されており、出土した陶片から16世紀前葉以降の遺構として報告されている。(註12) これらのことを総合すれば、上の山遺跡だけでなく滝洞遺跡や久保田遺跡を含め、滝洞川と楡沢川との間の東西400m、南北500~600mの広大な範囲に城郭が展開していたと考えられる。しかし、このふたつの川の間が城域であったとするより、むしろ自然の地形を利用したと考えたい。上の山遺跡の①~④が根小屋的な性格の居館とすれば、⑥は戦時の詰城的な遺構の可能性もあるが、規模は小さく、山頂を利用していない点など疑問が残る。①~⑦ははたして同時に築城されたのか。少なくとも滝洞遺跡の報告と今調査の所見に従えば、今回の調査地点の遺構は、昭和60年の調査で出土した遺構に年



第42図 「天白古城」の城域概念図

代的に先行することとなる。従って全地点を調査わけではないが、①～④が15世紀中葉～15世紀後半ないし16世紀前半ころ、⑤～⑦は16世紀前葉以降という年代を与えられるかもしれない。今後一帯の綿密な遺物分布調査や、地表面の微小な起伏などの観察を行うことによって、この城郭の構成や年代がより明らかになるものと思われる。

なお、現在の辰野病院や泉水団地の一帯は小字「サンゲナシ」と呼ばれ、元禄検地帳に見える「さけなし」に相当すると思われるが、これは「山上」に対する「山下」というより、「在家なし」に通じるものではなかろうか。北の小横川入口にも「うしろざいけ」と呼ばれるところがあり(註13)、これらは城域外で関係のありそうな場所である。

3. 上の山遺跡と宮所郷

この上の山遺跡の地が「天白の城」、「天白古城」などと呼ばれるようになったのは、『伊那温知集』の宮木の項に「弘治天正の頃郷士矢島勘六其子勘兵衛居住の後今似天白之小城と云在」とあることによるとと思われる。この矢島勘兵衛について『伊那志略』は、『樋口家譜』を引用して、天正の頃の上伊那の十三騎として名をあげているが、高遠保科氏転封の際の『保科肥後守殿分限帳並諸事書留』には、寛永13年(1636)現在の上伊那十三騎として「矢島勘兵衛 百石 宮木村住」とある。弘治元年(1555)～寛永13年までは80年以上の年代幅があり、父子2代としてはやや長すぎる感がしないでもない。武田晴信が伊那へ侵攻し箕輪の福与城を攻撃の際、小笠原長時の兵が宮所竜ヶ崎に陣を置いて武田に対したが攻め落されたのが天文14年(1545)であるから、『伊那温知集』の記載を信じるならば、矢島氏が「天白之小城」へ入居したのはこの後になるのではないだろうか。

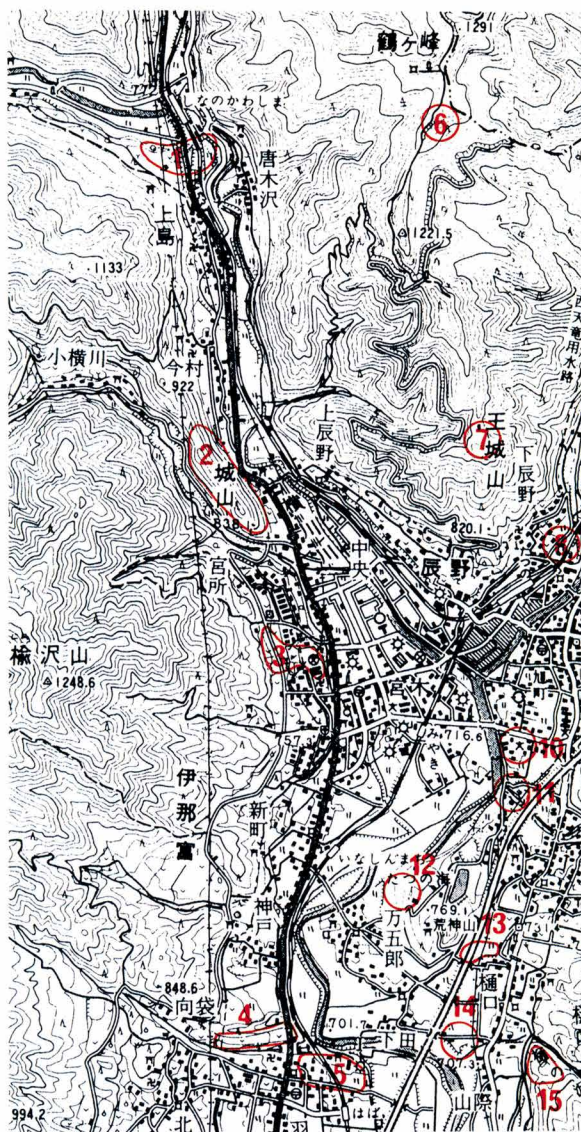
ところで、天正3年(1575)武田勝頼によって再建された宮木諏訪神社棟札の造宮関係者名に、春日河内守の名が見え、これは伊那の諸郷が諏訪上社造宮のため諸役を勤めた天正6年(1578)の『上諏方造宮帳』にある「宮所郷 代官 春日河内守」と考えられている。(註14)当時の宮所郷というのは、南は現在の北之沢川から、北は横川の谷に及んでいたとされている。(註15)この春日河内守がどこに居住したかは不明だが、仮に「天白之小城」だとすれば矢島氏と重複することになる。一方、『信長公記』によれば、天正10年(1582)織田信忠によって高遠城が落城した際の討捕られた者の中に春日河内守の名があり(註16)、これらに従えば、天文14年の竜ヶ崎の落城後、おそらく天正3年以降天正10年まで春日氏が、以降寛永13年まで矢島氏がそれぞれ宮所郷に居住していたのではないか。今回の出土遺物の年代を考慮すれば、その地は上の山遺跡内ではなく「要害」を含めた四方の扇状地一帯と考えられはしないだろうか。従って、上の山遺跡内の城郭は誰が築いたか疑問が残ることとなる。

今回の出土遺物は、15世紀中葉～16世紀前半の年代を与えられているが、文献上で宮所やこの城郭に関係しそうなこのころのでき事を拾ってみる。文明15年(1483)諏訪上社大祝家と惣領家の内乱に際して、高遠の諏訪継宗は上社領であった宮所、平出の両郷を押領した。更に、文明19年(1487)7月継宗は諏訪有賀に侵攻したが、『諏訪御符礼之古書』には「八月七日迄鞍懸御陣

被召候有賀へ矢射其間之りうか崎のや城取立候」とある。この「りうか崎」というのは、天文14年に小笠原軍が陣を置いた竜ヶ崎と同様、上の山遺跡の北800mにある現在の宮所の城山（第43図2）に相当すると考えられてきた。（註17）一方、これより先『守矢満実書留』寛正5年（1464）の条には、「彼光は上伊那宮所龍ヶ崎之城西之切岸江落其あたり血也」とある。従って、これも宮所の城山とすれば、山の尾根を利用し、土塁や堀切が残るこの山城は、すでに15世紀中頃には築かれていたことになる。しかし、15～16世紀代の文献には、隣接する上の山遺跡を含めた西方一帯の大規模な城郭を具体的に指し示したものはないが、前述した年代の遺物が今回出土しているのである。『伊那温知集』の宮所の項に「天正年中中西丹後と云郷土之居館跡在」とあって、城山の東の現宮所集落内には館跡らしき箇所もあり、城山を詰城とした根子屋の性格も考えられないわけではないが、文献上たびたび登場する「竜ヶ崎」は、或いは上の山遺跡内の城郭と緊密な関係にあったのではないかと推測するものである。今回の出土遺物の年代と、『守矢満実書留』、『諏訪御符礼之古書』に記述されている年代はよく一致しているからである。

一方、寛正5年（1464）以前の宮所郷については、史料の上では、元亨3年（1323）の上島の十一面観音像造立銘までさかのぼるが、その台座銘には施主として宮所孫次郎光信の名がある。宮所氏は諏訪氏の分流で、建武2年（1335）の中先代の乱に伴う横河城の戦で、信濃守護小笠原軍の市河助保に討滅させられたのは、この光信かその子で、横河城は現在の川島駅南の大庭から町屋にかけての台地（第43図1）と考えられている。（註18）昭和60年の町屋遺跡の発掘調査では、14世紀代の室町前期ころの遺物が出土し、年代的にはほぼこれを裏付けた。（註19）

以上、上の山遺跡の位置する宮所郷の歴史を年代的に整理すれば、治承4年（1180）宮所郷は平出郷とともに現地領主権が諏訪上社の領有となって以後、諏



第43図 周辺城館跡分布図

訪氏の分流宮所氏が横河城に居住し、建武2年に落城するに至った（第Ⅰ期）。その後15世紀中頃まで遺物や文献上で不明の時期があり（第Ⅱ期）、15世紀中頃には「竜ヶ崎の城」が築かれたが、諏訪氏の分流としての氏族が居住していたかは不明（第Ⅲ期）。文明15年（1483）高遠の諏訪継宗による押領から天文14年（1545）の武田氏と小笠原氏の竜ヶ崎における攻防まで（第Ⅳ期）と、高遠の諏訪氏滅亡後、武田氏の支配下で春日河内守が代官としていたらしい時期で、織田信忠攻撃による高遠城落城まで（第Ⅴ期）と続く。その後毛利氏支配下で矢島氏が居住したのではないかと思われ、保科正之が山形最上へ転封する寛永13年（1636）まで（第Ⅵ期）と区切ることができそうである。今回の調査結果は、上の山遺跡地内の遺構がⅢ～Ⅳ期に属することを示している。（赤羽）

註・参考文献

- 註1 段丘下の武井文武氏宅には、上の山一帯で採集された縄文時代中期の遺物が多く所蔵されており、『信濃史料』（昭和31年）には、縄文時代中期初頭、中期後半の土器や、石鏃、打製石斧、磨製石斧が記載されている。なお、これらの遺物は今回の調査後、所蔵者から町教委へ寄贈された。
- 註2 竹淵修二（昭和55、56年）「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」『上伊那教育会郷土館部研究紀要』第1集、第2集／竹淵修二（昭和57年）「辰野における河岸段丘の面区分および発達史」『上伊那教育会郷土館部研究紀要』第3集
- 註3 竹淵修二（昭和58年）「辰野における河岸段丘の面区分および発達史—地質構造を中心として—」『上伊那教育会郷土館部研究紀要』第4集
- 註4 春日琢美（昭和4年）「伊北地方及び付近の地形地質断片（三）」『郷土』第3巻3号
- 註5 長野県教育委員会（昭和48年）『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡辰野町その1（昭和47年度）』
- 註6 伊藤富雄（昭和55年）「上伊那十三騎」『伊藤富雄著作集』第4巻
- 註7 上伊那誌編纂会（昭和40年）『長野県上伊那誌』第2巻歴史篇
- 註8 長崎元廣氏教示／南久和（昭和60年）『北陸の縄文時代中期の編年他9編—南久和著作集第1集』
- 註9 長野県教育委員会（昭和57年）『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5』において小林秀夫が、また大井城跡発掘調査団編（昭和61年）『大井城跡（黒岩城跡）発掘調査報告書』で小山岳夫がそれぞれ分類を行っている。
- 註10 駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会編（昭和60年）『青木城遺跡緊急発掘調査報告』
- 註11 浅野晴樹氏教示／瀬戸市歴史民俗資料館（昭和60年）「本多コレクション(1)—古瀬戸—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅳ／藤沢良祐（昭和61年）「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ
- 註12 辰野町教育委員会（昭和61年）『滝洞遺跡』では美濃妻木窯の製品などが出土していると報告されている。なお、安南銭「治元聖宝」として報告しているものは、北宋銭「紹聖元寶」の誤りである。
- 註13 辰野日報（昭和61年4月19日付）「宮所考—うしろざいけ—」（昔といま たつの拾い話232）
- 註14 伊藤富雄（昭和35年）「庄園辰野・平出・宮所の研究」『伊那路』第4巻5号、6号
- 註15 註14及び赤羽篤（昭和32年）「宮所考」『辰野町資料』第40号
- 註16 註14に同じ

註17 註15に同じ

註18 信濃教育会（市村咸人）（昭和14年）『建武中興を中心としたる信濃勤王史攷』

註19 天目茶碗、常滑の破片等が出土しており、土師質土器皿はあるが内耳土器はなく、14世紀代の良好な編年資料となった。

参照文献

武藤雄六（昭和43年）「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊』第四卷第一号

市立岡谷美術考古館編（昭和49年）『扇平遺跡』

榎崎彰一編（昭和52年）『世界陶磁全集』3 日本中世

関野哲夫（昭和55年）「鶴ヶ島台式土器細分への覚書」『古代探叢』

児玉幸多・坪井清足監（昭和55、56年）『日本城郭大系』第8巻、別巻Ⅰ、別巻Ⅱ

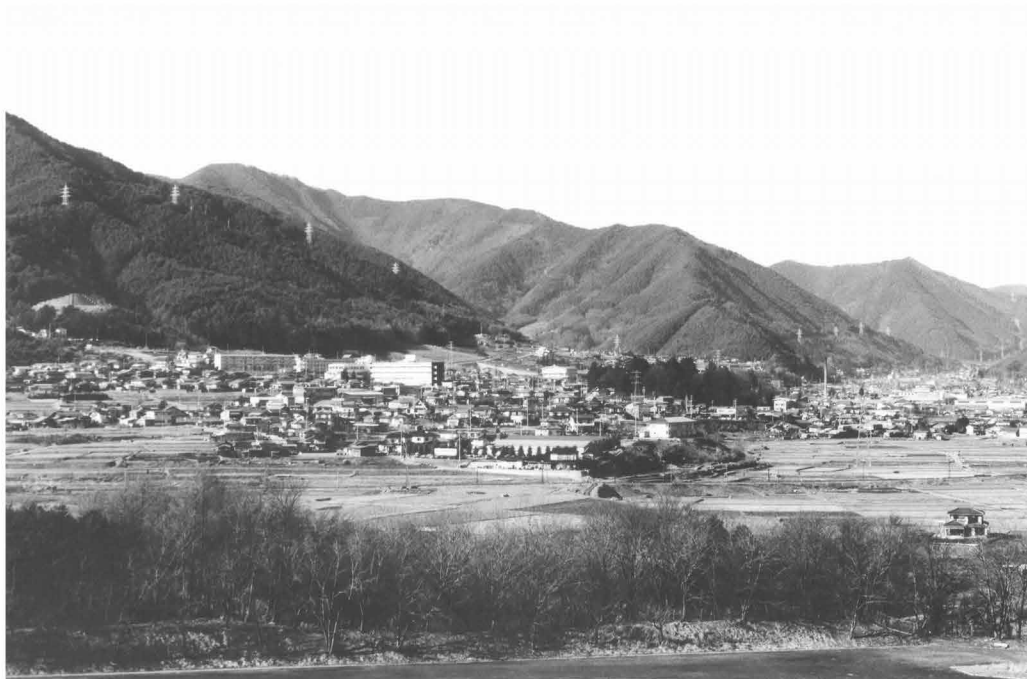
長野県教育委員会編（昭和58年）『長野県の中世城館跡分布調査報告書』

神奈川考古同人会編（昭和61年）「シンポジウム古代末期～中世における在地区土器の諸問題」『神奈川考古』第21号

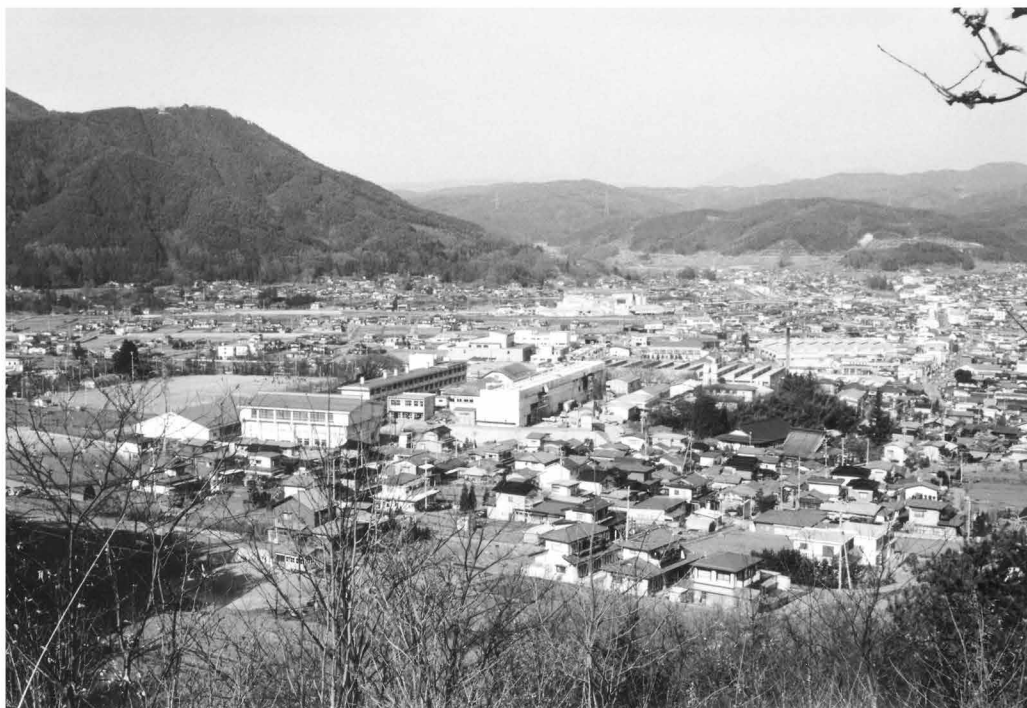
梨久保遺跡調査団編（昭和61年）『梨久保遺跡』

鋤柄俊夫（昭和61年）「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』第38巻第4号

村田修三編（昭和61年）『週刊朝日百科日本の歴史』21 中世Ⅱ 城—山城から平城へ



1. 遺跡遠景（荒神山から）

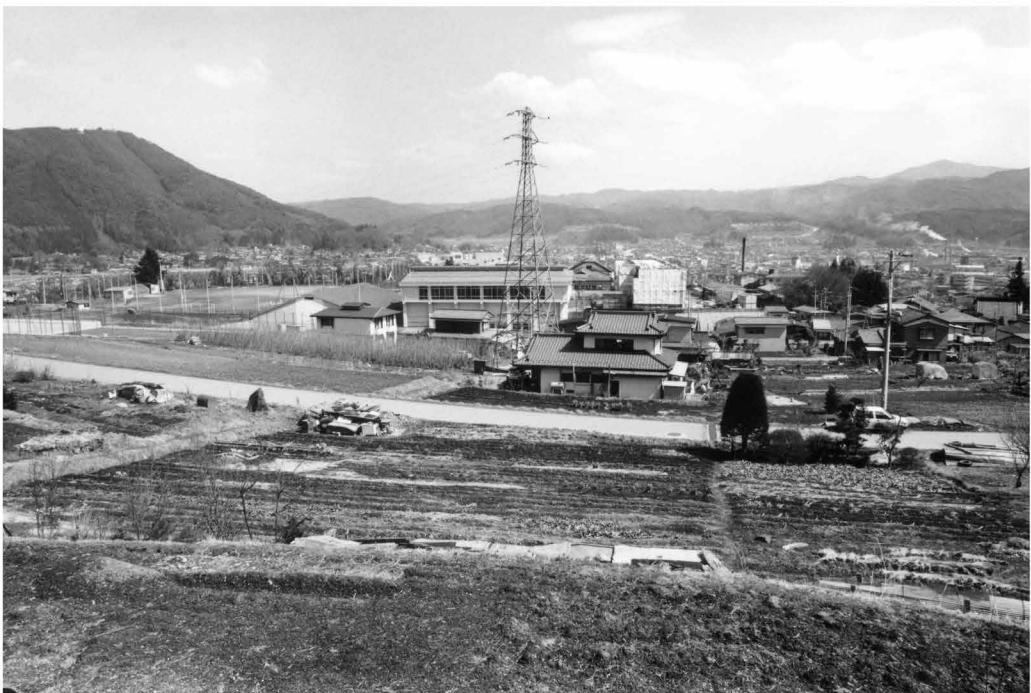


2. 遺跡遠景（西から）

図版 2



1. 遺跡遠景（北東から）



2. 遺跡近景（西から）



1. 調査区（教室棟建設予定区西端部）



2. 調査区（教室棟建設予定区中央部）

図版 4



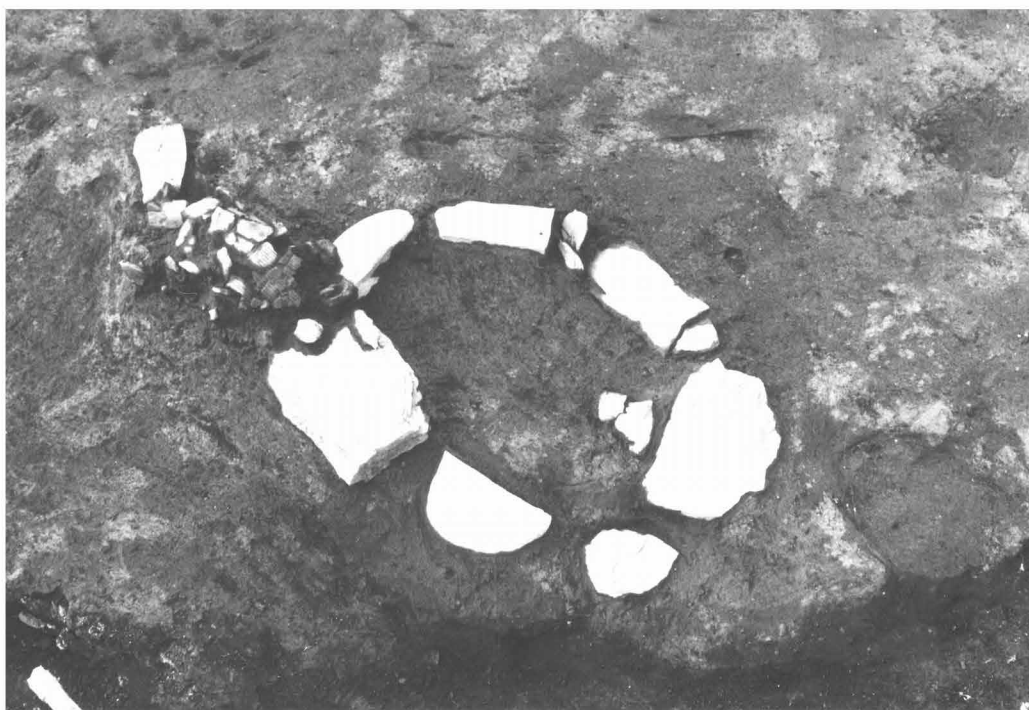
1. 調査区 (教室棟建設予定区東端部)



2. 調査区 (教室棟建設予定区東端部)



1. 第 1 号住居址



2. 第 1 号住居址炉



1. 第2号住居址



2. 第2号住居址炉



1. 調査区 (浄化槽建設予定区)



2. 第3号住居址

图版 8



1. 第 2 号土坑



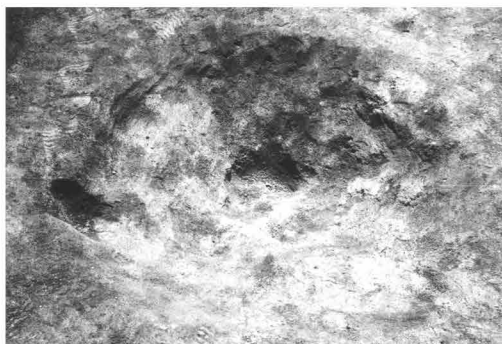
2. 第 3 号土坑



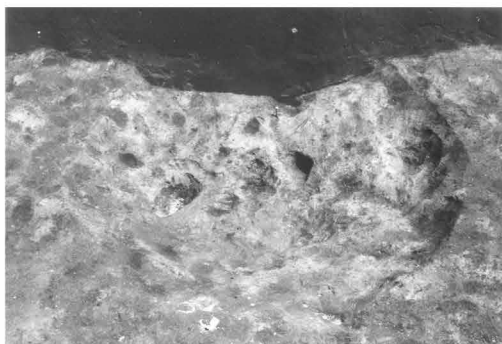
3. 第 5 号土坑



4. 第 6 号土坑



5. 第 7 号土坑



6. 第 8 号土坑



7. 第 9 号土坑



8. 第 10 号土坑



1. 第1号及び第2号竪穴



2. 第1号、第2号竪穴と土坑及びピット

図版 10



1. 第1号空堀



2. 第1号空堀内の内耳土器出土状態



1. 第1号集石址



2. 第1号配石址と第1号空堀

図版 12



1. 調査区（部室棟建設予定区）



2. 発掘調査風景（部室棟建設予定区）



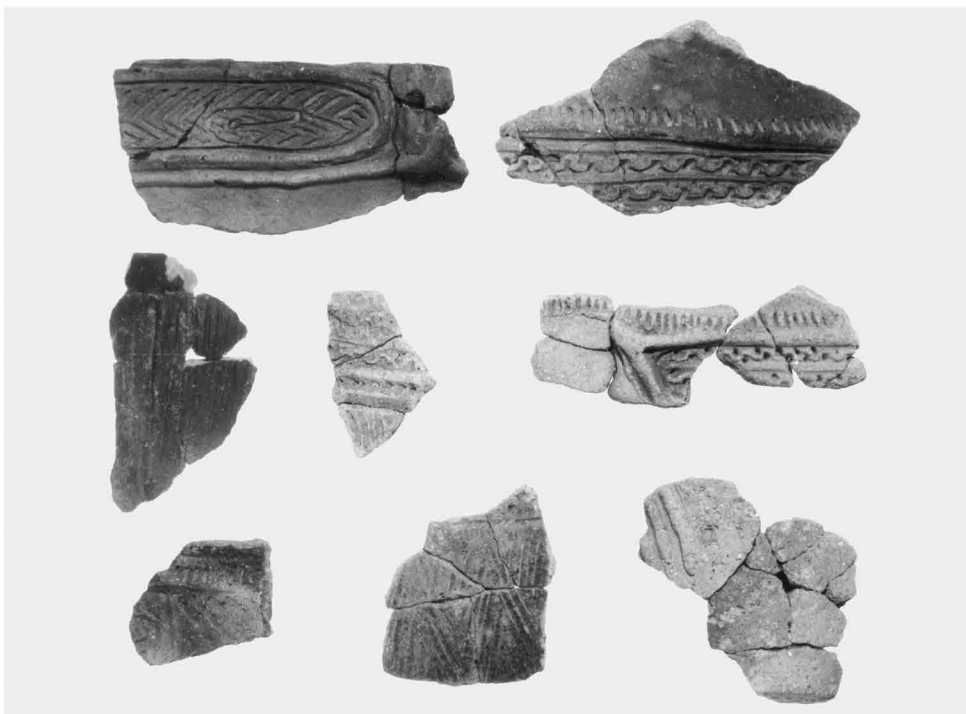
1. 第1号住居址出土土器(1)



2. 第1号住居址出土土器(2)



3. 第1号住居址炉内出土貝殼



1. 第2号住居址出土土器



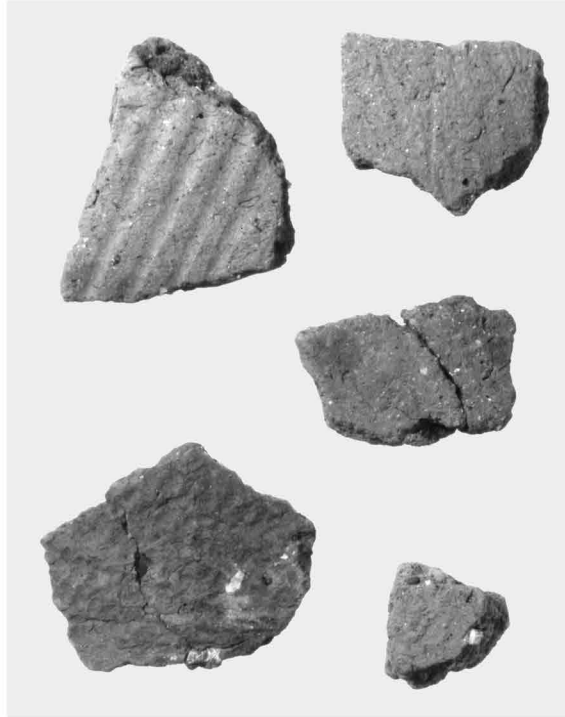
2. 第2号住居址出土石器



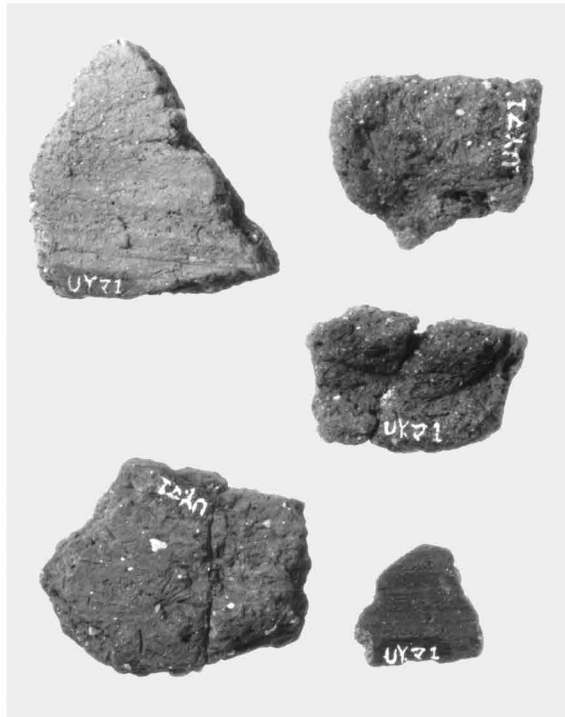
1. 浄化槽建設予定区内出土土器



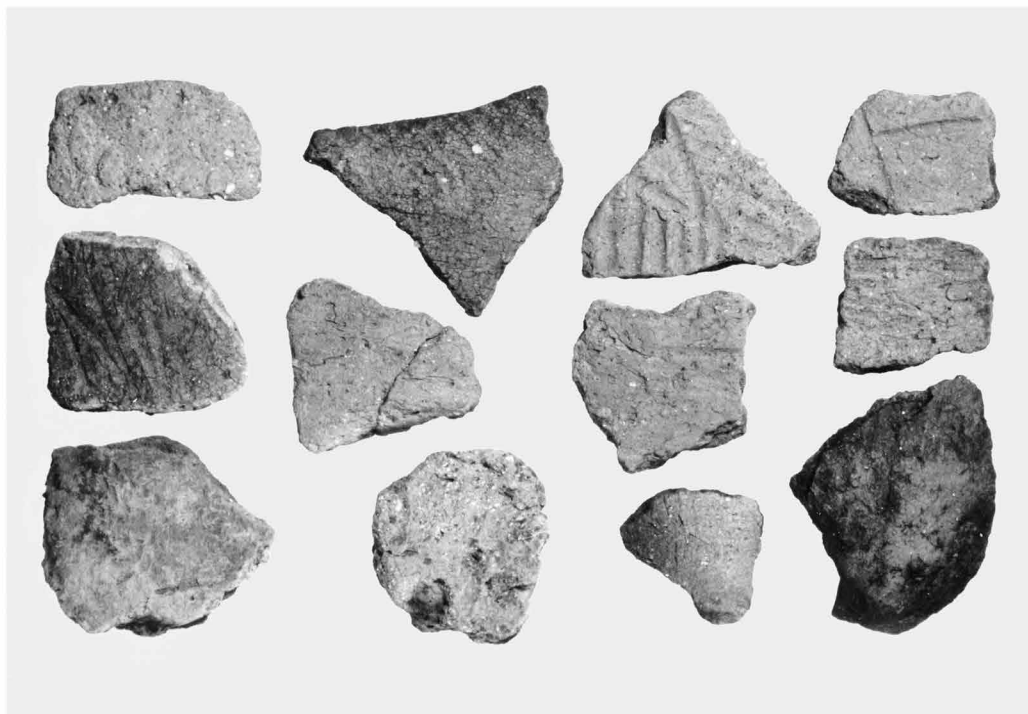
2. 土坑内出土土器



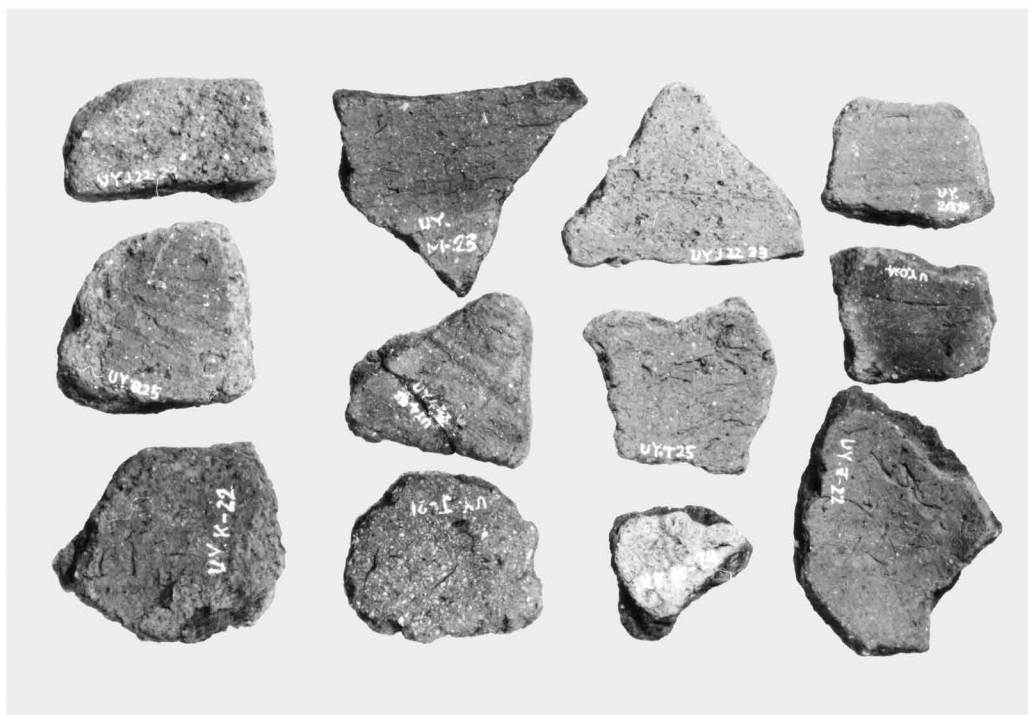
1. 第1号ローム・マウンド出土土器



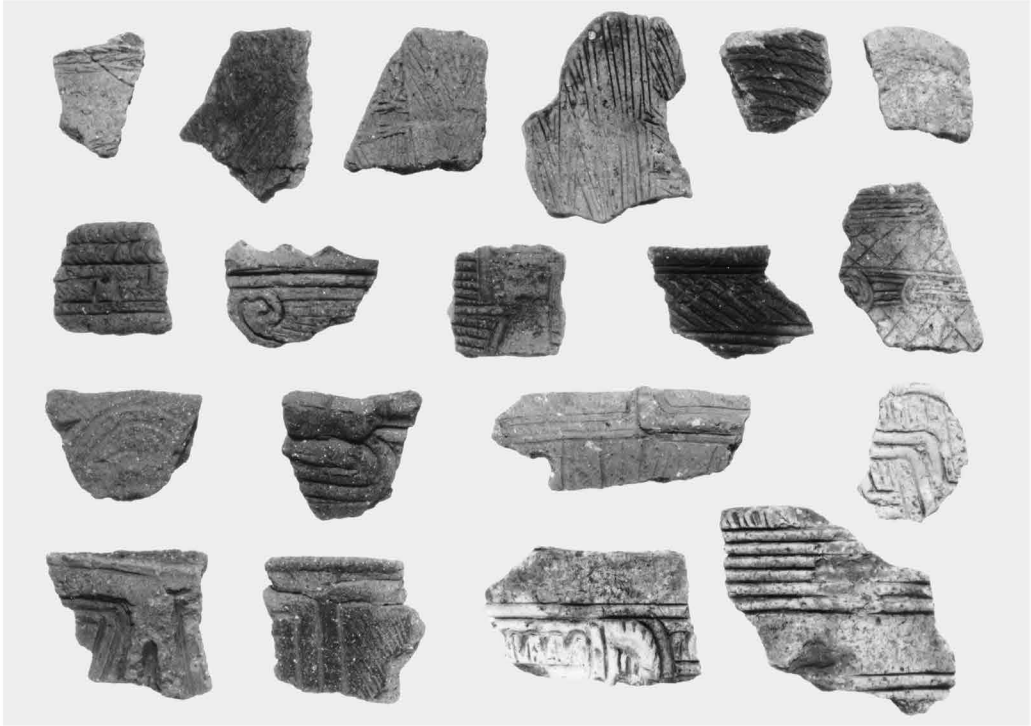
2. 同内面



1. 遺構外出土縄文時代早期の土器



2. 同内面



1. 遺構外出土縄文時代前期・中期の土器



2. 遺構外出土縄文時代中期の土器



1. 古銭「紹聖元寶」



2. 内耳土器 (1)



3. 内耳土器 (2)



4. 内耳土器 (3)



1. 遺跡西方の「要害」遺構



2. 滝洞遺跡との間にある空堀跡



1. 滝洞遺跡内の空堀跡



2. 遺跡北側の滝洞川



1. 発掘調査風景（東から）



2. 発掘調査風景（第1号住居址）

上の山遺跡 I

長野県辰野高等学校校舎改築に伴う
第1次埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 昭和62年3月20日
編集・発行 辰野町教育委員会
長野県上伊那郡辰野町中央1
〒399-04 ☎0266(41)1681
印刷 藤原印刷株式会社
